大泉村埋蔵文化財調査報告 第4集

豆生田第3遺跡

（まみょうだだいさんいせき）

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1986・3

山梨県北巨摩郡大泉村教育委員会

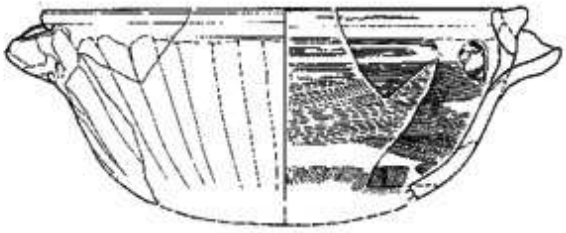
峡北土地改良事務所

大泉村埋蔵文化財調査報告 第4集

豆生田第3遺跡

（まみょうだだいさんいせき）

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1986・3

山梨県北巨摩郡大泉村教育委員会

峡北土地改良事務所

序

我々の祖先が、この大泉の地を拠りどころとしながら確かに生きていたのだ、という証拠は我々の足の下に眠っています。文字が無かった何千年も前の時代はもちろんのこと、文字があっても記録に残されることが少なかった日常的な暮らしは、今日土の中に残されたかすかな痕跡や、わずかな生活用具から知る以外に方法はありません。現在水田が広がる大地にも、水田が開かれる以前の長い歴史の中では幾度となく生活の場として利用された経過がありました。ある時は家族が体を寄せ合って夜露をしのいだ粗末な掘立小屋が、またある時には一家の主を埋葬したお墓が、人間の生と死が繰り返される中で繰り返しつくられて、それにまつわる喜怒哀楽も長い物語りもやがて忘れ去られてしまったのです。

今日、我々自身のために、また我々の子孫のために進められている圃場整備事業が、その陰で実は子孫に伝えるべき我々祖先の歴史を秘めた遺跡の破壊を代償に行われていると同時に、発掘調査をしなければ祖先の歴史を知ることができないという現状は皮肉であるといわざるをえません。それだけに調査によって明らかになった成果を、現在生きる我々の生活の文化的な向上に資するべきであるとともに、子孫に長く伝えることは我々に課せられた責務であるといえましょう。

大泉村では今年度大泉村歴史民俗資料館が開館し、圃場整備事業によって調査された金生遺跡をはじめ、今回の豆生田第３遺跡から出土した多くの埋蔵文化財を展示しています。また遺跡を記録保存するという意味でこのようなかたちの報告書を刊行し、多くの皆様に御活用していただくとともに、後世に長く残していきたいと思っております。

昭和61年３月

大泉村教育委員会

教育長　浅川　義彦

例　　言

1　本書は、昭和60年度県営圃場整備事業に伴う豆生田第３遺跡の調査報告書である。

2　本調査は、峡北土地改良事務所との負担協定により、文化庁・山梨県より補助金を受けて大泉村教育委員会が実施した。

3　遺跡所在地　山梨県北巨摩郡大泉村谷戸字豆生田

4　調査面積　3550㎡

5　発掘調査期間　昭和60年６月１日～８月23日

遺物整理期間　昭和60年８月24日～昭和61年３月31日

6　調査事務局　大泉村教育委員会

浅川義彦（教育長）・山田初男（係長）・浅川正人・三井初枝・浅川一郎

調査員　櫛原功一（埋蔵文化財担当）

7　発掘調査参加者

浅川英三・浅川晃輝・浅川久代・浅川けさ子・浅川美代・浅川洋子・浅川喜子・浅川米子中島ねのえ・藤森節子・藤森やす子・平井仁志・細田絹代・細田茂登枝・三井圭吾・三井澄子・三井春子

遺物整理参加者

浅川英三・浅川洋子・浅川喜子・細田絹代

8　遺物の実測・写真撮影・本文執筆及び編集は櫛原が行った。

9　発掘調査及び本書の作成にあたって次の諸氏に御教示を賜わった。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

雨宮正樹・井上喜久男・奥山和久・小野正文・数野雅彦・小林真・佐野勝広・進藤一弘・信藤祐仁・末木健・鈴木治彦・田代孝・塚本師也・中山誠二・新津健・萩原三雄・畑大介・樋口誠司・平野修・宮沢公雄・森和敏・八巻与志夫・山路恭之助・山下孝司・米田明訓

10　本調査の出土品・諸記録は大泉村歴史民俗資料館に保管してある。

11　本調査にあたり、山梨県教育庁文化課・峡北土地改良事務所・大泉村土地改良区・地権者の皆様に御指導、御協力をいただいた。衷心より謝意を表したい。

12　本書使用地図は国土地理院発行の　１／2500 谷戸、山梨県発行の県営圃場整備事業計画図１／1000、県営圃場整備事業計画一般図大泉・長坂地区１／5000である。

13　遺構平面図の方位は磁北である。またピットの深さは一をつけてcmで表わす。

焼土の分布はドットのスクリーントーンで示す。セクション図、エレベーション図の基準線脇の数字は、その標高を示す。

14　遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒べたで、灰釉陶器はドットのスクリーントーンで示す。また斜線は破損部分を表わす。

目　　次

序
例言
Ⅰ　調査に至るまでの経過 …… 2
Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2
　1　遺跡の位置 …… 2
　2　歴史的環境 …… 4
Ⅲ　調査の方法と経過 …… 7
　1　調査の方法 …… 7
　2　調査の経過 …… 8
Ⅳ　層序 …… 8
Ⅴ　遺構と遺物 …… 10
　1　縄文時代の竪穴住居址（7，8）とその遺物 …… 10
　2　平安時代の住居址（1～6，9，10）とその出土遺物 …… 14
　3　掘立柱建物址（1～6） …… 27
　4　土壙（1～16） …… 33
　5　集石（1，2） …… 37
　6　溝址（1～6） …… 39
　7　遺構外出土遺物 …… 42
Ⅵ　まとめ …… 55
　1　豆生田第3遺跡と金生遺跡の関係について …… 55
　2　平安時代の八ケ岳南麓の開発について …… 57
註 …… 60
引用、参考文献 …… 61
図版

表　目　次

第1表　平安時代の土師器、陶器観察表 …… 62

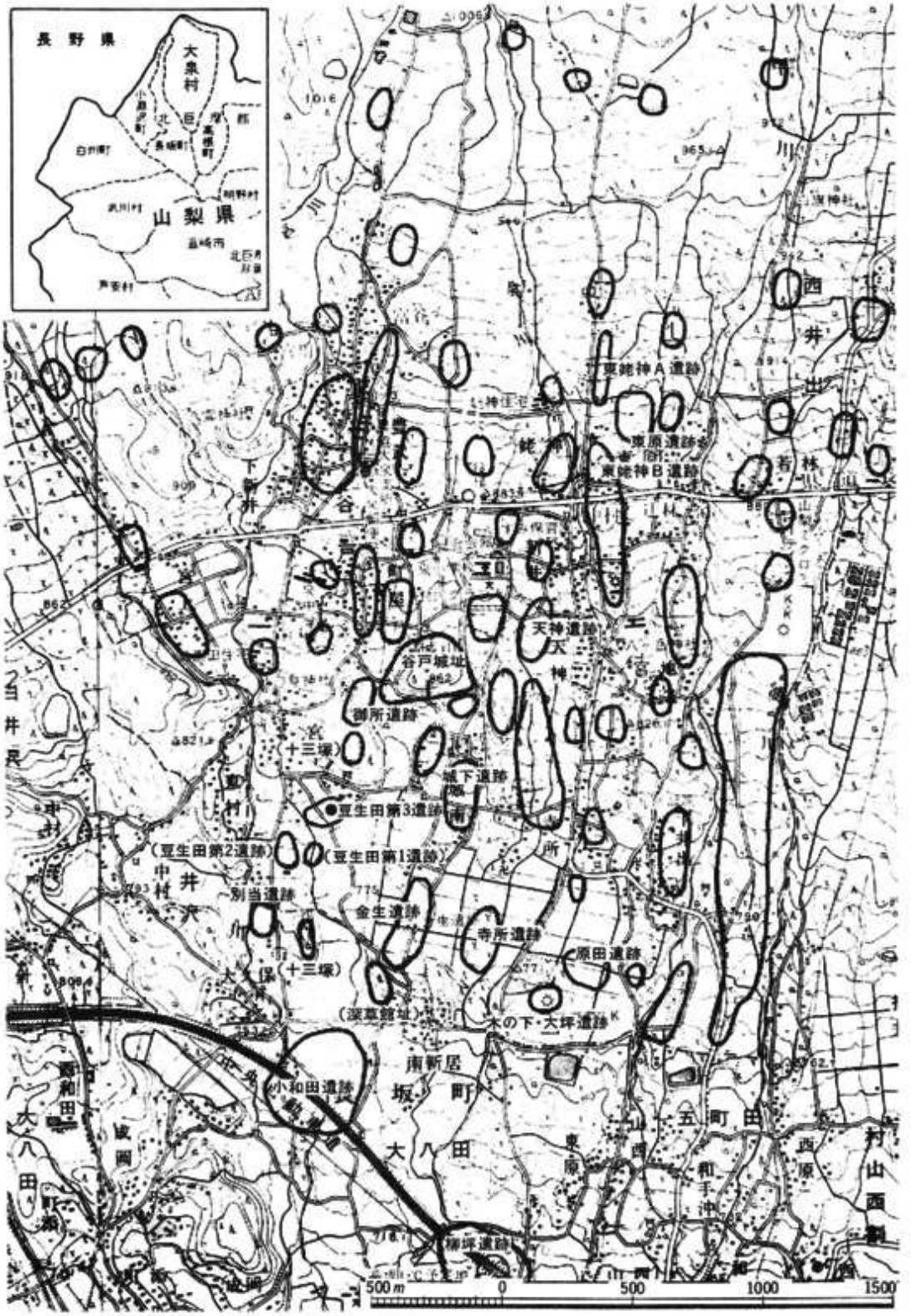
挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置及び周辺遺跡分布図（1／25000） …… 1
第2図　調査区周辺の中・近世関連遺跡（1／10000） …… 2
第3図　前林十三塚概念図 …… 5
第4図　発掘区域とその周辺（1／2000） …… 7
第5図　遺跡の層序（1／60） …… 8
第6図　豆生田第3遺跡　全体図（1／400） …… 9
第7図　7・8号住居址　11号土壙（1／60） …… 11
第8図　7号住居址　出土遺物（1／3） …… 12
第9図　7号住居址　石鏃（1／1） …… 12
第10図　8号住居址　出土遺物（1／3，15は1／1） …… 13
第11図　1号住居址　（1／60） …… 15

第12図　1号住居址　出土遺物（1／4）…… 15
第13図　2号住居址　出土遺物（1／4）…… 16
第14図　3号住居址（1／60）…… 16
第15図　3号住居址　出土遺物（1／4）…… 17
第16図　4号住居址（1／60）…… 18
第17図　4号住居址　出土遺物（1／4）…… 18
第18図　5号住居址（1／60）…… 19
第19図　5号住居址　出土遺物（1／4）…… 20
第20図　6号住居址（1／60）…… 21
第21図　6号住居址　出土遺物（1／4）…… 21
第22図　9号住居址（1／60）…… 22
第23図　9号住居址　出土遺物（1／4）…… 23
第24図　10号住居址（1／60）…… 25
第25図　10号住居址　出土遺物(1)　（1／4）…… 26
第26図　10号住居址　出土遺物(2)　（1／4）…… 27
第27図　2号住居址　焼土，1号掘立柱建物址，1～3・8・9号土壙（1／60）…… 28
第28図　2・5掘立柱建物址（1／60）…… 29
第29図　3号掘立柱建物址（1／60）…… 30
第30図　4号掘立柱建物址（1／60）…… 31
第31図　6号掘立柱建物址（1／60）…… 32
第32図　4～7・10・12～16号土壙（1／60）…… 34
第33図　7号土壙　出土土器（1／5）…… 35
第34図　6・7・16号土壙　出土遺物（1～4は1／3，5は1／1）…… 36
第35図　1・2号集石（1／60）…… 38
第36図　1～6号溝址セクション図（1／60）…… 40
第37図　1～6号溝址 …… 40
第38図　埋没谷 …… 41
第39図　埋没谷セクション図（1／80）…… 41
第40図　遺構外出土　縄文土器(1)　（1／3）…… 43
第41図　遺構外出土　縄文土器(2)　（1／3）…… 44
第42図　遺構外出土　縄文土器(3)　（1／3）…… 45
第43図　遺構外出土　縄文土器(4)　（1／3）…… 46
第44図　遺構外出土　縄文土器(5)　（1／3）…… 47
第45図　遺構外出土　縄文土器(6)　（1／3）…… 48
第46図　遺構外出土　石斧（1／3）…… 49
第47図　遺構外出土　石鏃・石匙（1／1）…… 50
第48図　遺構外出土　磨石（1／3）…… 51
第49図　遺構外出土　土製・金属製品（1／3）…… 52
第50図　遺構外出土　平安時代の遺物（1／4）…… 52
第51図　遺構外出土　中～近世の遺物（1／4）…… 53
第52図　遺構外出土　砥石・石鉢（1／3）…… 54
第53図　古銭（1／1）…… 55

図 版 目 次

図版1　1　遺跡調査前遠景（東南より）
　　2　遺跡調査前遠景（南より）
　　3　遺跡調査前遠景（北より）
　　4　遺跡調査中（南を望む）
図版2　1　7・8号住居址（北より）
　　2　8号住居址（南より）
　　3　8号住居址　炉（南より）
　　他　7・8号住居址　出土遺物
図版3　1　1号住居址カマド（東より）
　　2　3号住居址付近調査風景
　　3　3号住居址（西より）
　　4　3号住居址カマド
　　他　1・2号住居址　出土遺物
図版4　1　4号住居址（南より）
　　他　1・4号住居址　出土遺物
図版5　1　5号住居址（南より）
　　2　5号住居址　カマド周辺
　　3　5号住居址　遺物出土状況
　　4　5号住居址　カマド
　　他　5号住居址　出土遺物
図版6　1　6号住居址（東より）
　　2　9号住居址（西より）
　　3　9号住居址　カマド
　　他　6・9号住居址　出土遺物
図版7　1　10号住居址（西より）
　　2　10号住居址　遺物出土状況
　　3　10号住居址　カマド(1)
　　4　10号住居址　カマド(2)
　　他　10号住居址　出土遺物
図版8　1　1号掘立柱建物址（南より）
　　2　2・5号掘立柱建物址（南より）
　　3　3号掘立柱建物址（東より）
　　4　4号掘立柱建物址（北より）
　　5　6号掘立柱建物址（北より）
図版9　1　1号溝，4・5号土壙（北より）
　　2　4号土壙（南より）
　　3　5号土壙（西より）
　　4　7号土壙上部状況（北より）
　　5　7号土壙半截状況（北より）
　　他　7号土壙　出土土器
図版10　1　11号土壙（西より）
　　2　13号土壙（南より）
　　3　14・15・16号土壙（東より）
　　4　14号土壙（東より）
　　5　14号土壙（南より）
　　6　2号集石（北より）
　　他
図版11　遺構外出土縄文土器、土製品
図版12　1　9号住居址に寝てみる
　　他　遺構外出土各種石器
図版13　1　丸山上部
　　2　八右衛門内屋敷跡
　　3　別当十三塚の板碑
　　4　城下の宝篋印塔
　　他　遺構外出土　平安～近世の遺物
図版14　墨書・刻書文字（記号）集成



第１図　遺跡の位置及び周辺遺跡分布図（１／25000）

I　調査に至るまでの経過

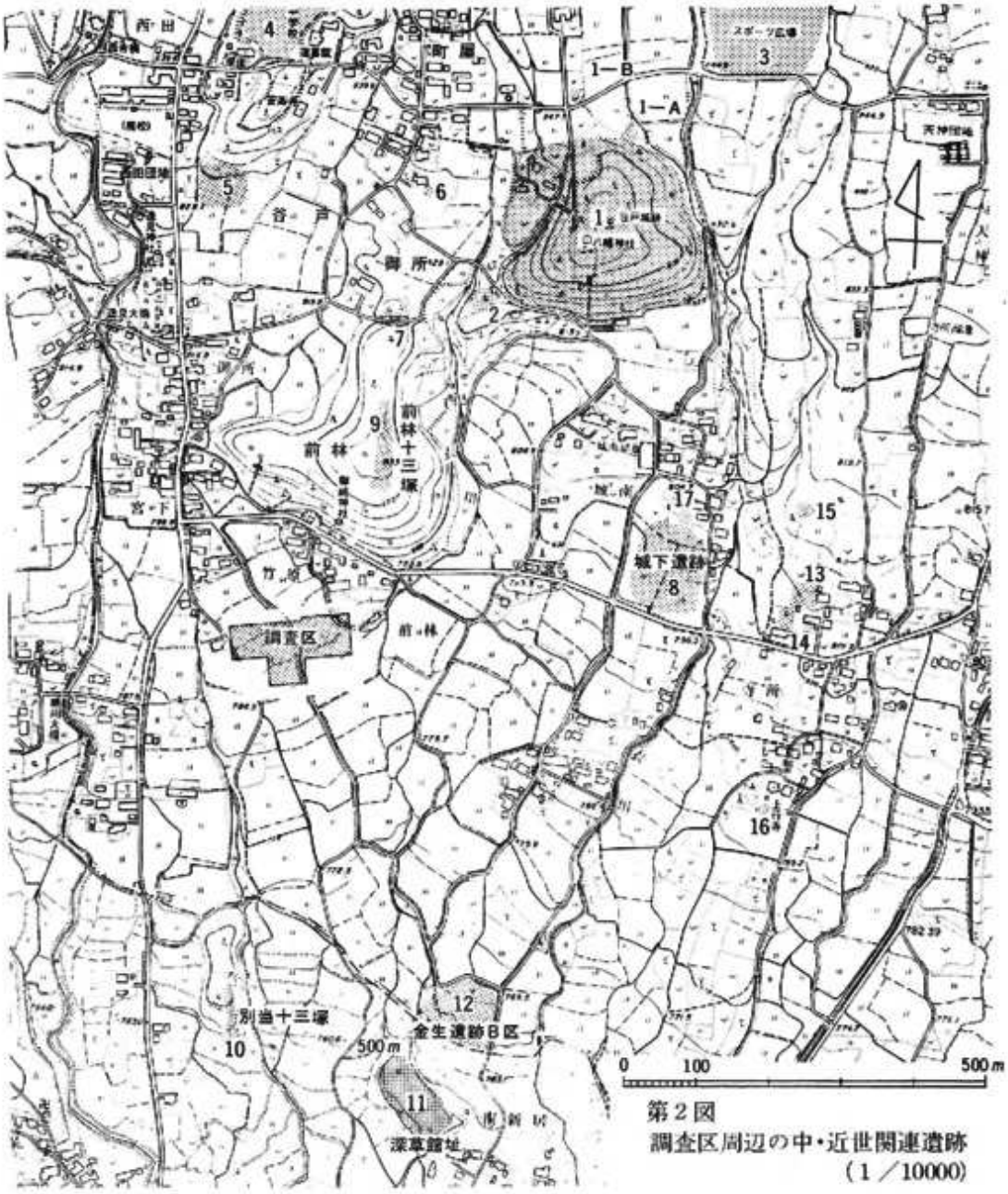
大泉村では、昭和53年度より開始された県営圃場整備事業によって、毎年20数ヘクタールの土地改良事業が現在進行中であり、この空前ともいえる大規模土地開発に伴なって、埋蔵文化財の記録保存を目的とする遺跡の緊急調査が、昭和54年の寺所遺跡の調査を皮切りに城下遺跡、原田遺跡、金生遺跡、天神遺跡、東原遺跡、東蛯神B遺跡において実施されている。この圃場整備事業は本村の主要遺跡を総なめにするもので、埋蔵文化財にとって最大の危機であることは言うまでもない。そのような状況のもとで現在までに調査された数多くの遺跡は、本村の長い歴史の解明にとって極めて重要な遺跡ばかりであったわけで、僅か数年のうちに主要遺跡のほとんどが不十分な調査ののち完全に消滅したことは、大泉村の歴史にとって不幸な出来事であったと言わざるを得ない。ただ幸いだったのは、この一連の経過によってはぐくまれた地域住民の中の文化財愛護精神が、金生遺跡の一部保存として実を結んだことである。国の史跡として破壊を免れた金生遺跡は、今日では山梨県における文化財保護運動のシンボル的存在であり、今後地域住民と埋蔵文化財とのかかわりにおいて、その果たすべき役割の大きさが益々期待されている。

ところで昭和60年度の圃場整備事業は、西井出の小岩清水工区と谷戸の谷戸下工区内の田畑約20ヘクタールが予定されたため、昭和54年に実施された大泉村内遺跡分布調査の結果に基づいて検討したところ、この両予定地域内には周知の遺跡は含まれていないものの、豆生田第1遺跡の周辺が谷戸下工区の事業予定地に接していることがわかった。そこで昭和60年4月、豆生田第1遺跡周辺の田畑の踏査を行ったところ、豆生田第1遺跡から約150m 離れた地番 613において縄文土器片が採集できたため、4月～5月、田畑一枚ごとに1～2ケ所づつ、2m × 2m の試掘調査を行って、本調査が必要な範囲を絞ることに努めた。その結果、地番609、610－2、613、614、において縄文時代後期の土器片を多量に得たため、その箇所を中心に半径約100mの範囲を縄文時代後期の集落遺跡と想定し、新たに豆生田第3遺跡と命名した。（第1図）

II　遺跡の位置と歴史的環境

1　遺跡の位置

豆生田第3遺跡は山梨県北巨摩郡大泉村谷戸字豆生田に所在し（第1図）、標高は784m～787mを測る。なだらかな傾斜面が続く八ケ岳南麓の中でも、大泉村周辺は塩川の支流である鳩川、甲川をはじめとする多くの小河川が集中する地域であり、河川と河川に挟まれた細長い尾根状の地形がひろがっている。またところどころに散在する小山は、尾根の末端がかなりの高まり



第2図
調査区周辺の中・近世関連遺跡
（1／10000）

をみせて、円丘状に風化した地形であり、現在その多くは林野となっているが、古くは城館として重要な役割を果たしていた所が少なくない。大泉村谷戸に所在する谷戸城址もそうした小山のひとつを利用しており、その南に広がる水田地帯を韮崎方面まで見渡すことのできるこの城山は、この地方一帯の開発領主の城館にふさわしいものである。その城山の西南に前林（メーバヤシ）とよばれる小山があるが、その100 m南の水田地帯に豆生田第3遺跡は位置する。遺跡の50 m 西には西泉川が、更に50 m いったところに鳩川が流れ、その上流から運ばれた土砂が、逸見神社の下あたりから南東方向に扇状に堆積している状況が地図上から看取できるが、遺跡

の付近は実際に水害によって幾度となく土砂の堆積を受けた地域だという。遺跡からは南東に富士山、南西に甲斐駒ケ岳、東に茅ケ岳を望み、次項で触れる金生遺跡(註1)、深草館跡を南東方向に見おろす場所である。ただし八ケ岳は前林に隠れてしまい、僅かにその頂上部を木々の間に垣間見るのみである。また遺跡の北側には現在集落が営まれているが、冬の猛烈な八ケ岳おろしを避ける意味で北側に山を背負った南向きの集落立地は、古代から快適な居住地であっただろうと思われる。（図版１）

2　歴史的環境

豆生田第３遺跡の周辺には、縄文時代～中・近世の数多くの遺跡が発掘等によって確認されている。例をあげれば、縄文時代の遺跡として御所遺跡、天神遺跡、金生遺跡、別当遺跡、平安時代の遺跡として寺所遺跡、城下遺跡、中・近世の遺跡として谷戸城址、金生遺跡B区、深草館址が代表的なものである。今回調査した豆生田第３遺跡からは縄文・平安時代の住居址とともに中・近世の頃の宅地跡が検出されたが、改めてこの周辺に分布する中・近世の遺跡をみると、数多くの関連遺跡をひろうことができるとともに、それらの組み合せが実に良好に当時の生活舞台、生活環境を構成し、今に伝えていることに気づく。そこで周辺遺跡の概要を記してみたい。（第２図）

1　**谷戸城址**　標高862ｍ、比高差35ｍをはかる円丘状の小山に構築された城館跡で、２重の同心円状の郭を中心とする１～６の郭と、数段の帯郭があり、土塁、掘等の保存状況は良好である。平安時代末、常陸国より配流された黒源太清光の築城と伝えられるほか、東鑑記載の「逸見山」に比定され、県内最古の山城といわれている。また天正壬午の戦（1582年）の際、北条氏直軍が入城して土塁等を修理している。伝説として米流しの話が残る。谷戸城址では古くから焼米の出土が知られているほか、甲斐国志には、古硯一面（「縁ニ両鴛鴦ヲ刻セリ」）、鎖一枚（「重サ三百目、花菱ノ紋アリ」）の出土の記事がある。またかって城址北側の馬出し東(1—A）の水田の開墾の際、古銭がかますに５袋分ほど発見されたという。また昭和56年の桜植樹に伴なう２の郭の調査では、14～15世紀の龍泉窯系の青磁片、内耳土器、砥石が発見されている。また昭和54年、城址北側の梅畑(1—B）で地下式壙１基が、県文化課の新津健氏によって調査されている。そのほか、小宮山福三氏宅地周辺でも地下式壙や石組井戸が発見されたことがあるという。

2　**丸山**（図版13—１）　谷戸城址西南、村指定文化財「丸山のモミ」のある場所である。甲斐国志によれば正治元年（1199年)6月19日に亡くなった黒源太清光の墓であり、塚の頂上部の五輪塔にふれれば必ず祟りがあるという。現在、塚上部には石殿と宝篋印塔の笠及び台部がある。

3　**対屋敷**　現在泉小グランド（スポーツ広場）になっている付近をさす地名である。グランド造成で北側が深く削平されている。「谷戸の七屋敷」といわれるもののひとつ

であろうか。甲斐国志には記載がない。

4　**谷戸淡路守宅跡**　甲斐国志には道喜院の境内で、広さが「竪一町、横二町」あると記載されている。現在の泉中学校グランド付近であろう。グランド東側（グランド西南という説もある）には以前地下式壙があったというが、現在確認することはできない。

5　**谷戸八右衛門内屋敷跡**（図版13－2）　江戸時代頃、谷戸八右衛門の屋敷があったといわれる場所で、現在谷戸福男氏によって建てられた「八右衛門内屋敷跡」の石柱がある。その前方には石殿と宝篋印塔の笠部がある。大泉村谷戸の山田川上流には八右衛門出口と呼ばれる泉があり、八右衛門が泉を発見したいきさつが民話として残されている。(註2) また「八右衛門」という名は代々引き継がれるものであったことから、谷戸家は泉の水利権を握っていた豪族であったと思われる。この付近を「御所」とよぶが、八右衛門内屋敷をさしていた可能性が強い。なおこの近くに八右衛門が財宝を隠したという伝説がある。

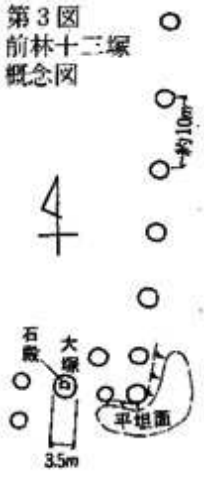
6　**町屋の古銭出土地**　昭和59年８月、大泉村谷戸町屋の藤森貞三氏の宅地内の桑畑で抜根中、石列の間からまとまって91枚の古銭が出土した。古銭は中国唐代の開元通宝をはじめとして明代の永楽通宝まであるが、主体は北宋銭である。91 枚はほぼひとさし分（100枚）に相当するため、人為的に埋納されたものではないかと思われる。また小字名の「町屋」は、中・近世の城館に伴う集落をさすよび名で、藤森氏宅付近を含めて、中・近世集落の広がりが想像される。

7　**御所遺跡**　昭和52年、前林に続く屋根上を横切る農道工事によって発見されたもので山梨大学考古学研究会によって調査された。縄文時代前期諸磯期の住居址のほか、地下式壙が１基調査され、その覆土中からは五輪塔が発見されている。

8　**城下遺跡**　昭和56年４月～８月、圃場整備事業によって調査され、平安時代の竪穴住居址25軒のほか平安時代～中・近世に伴うかと思われる掘立柱建物址のピット群が検出されている。甲斐国志によれば、往昔の古、城山の南にもと逸見神社があったと記されており、この付近に相当するのではないかと思われる。

9　**前林の十三塚**（第13図）　前林の尾根部に直径２～3.5ｍ、高さ0.5～１ｍ の小規模の塚が計12基確認できる。そのうち７基は約10m間隔で南北方向に一直線上に並んでいる。12基の中で最も大きく高い塚は「大塚」とよばれ、石殿がおかれて何らかの祭祀が行われているようである。

第３図
前林十三塚
概念図



10　**別当の十三塚**（図版13－３）　大泉村と長坂町の境の長坂町大八田別当に位置する小山の南斜面尾根上に南北方向に一直線上に、径２～３ｍ、高さ 0.5～１ｍ の小規模の塚が計10基並んでいる。そのうち南から２、４、７番目の塚に高さ50 cmほどの板碑がひとつづつ立てられて

いる。そのうち4番目の板碑の裏側には「大八田」と彫り込まれている。

11 **深草館跡**　長坂町南新居にある中世の館跡である。連郭式構造を呈し、土塁、掘切等の保存状況は極めて良い。地元の言い伝えによれば黒源太清光の長子光長の館跡といわれるが、甲斐国志には「清光の臣、堀内某」の館跡で、「子孫堀内下総守ノ子主悦ノ助ノ時、城陥リ落魄」したと記されている。堀内下総守は、武田家過去帳によって16世紀後半の人物であることが推定されている。

12 **金生遺跡B区**　深草館跡北側に位置する。昭和55年の圃場整備に伴う調査によって、中世～江戸時代初期の深草館跡に附随した集落址で、その外郭部を形成していたことが明らかになった。地下式壙50数基のほか、掘立柱建物址、水路址、墓壙等が検出されたほか、瀬戸・美濃系陶器類、青磁、白磁、内耳土器、鉄砲玉等豊富な遺物が出土している。

13 **浅川氏宅の土塁、井戸址**　大泉村西井出寺所の浅川晃輝氏宅内の西側竹林内にある。土塁は高さ約1m、長さ10数m にわたって南北に構築されているが、堀が見られないため屋敷の整地の際作られた境界線的なものかもしれない。井戸址は昭和60年6月頃、地表の落ち込みによってはじめてわかったもので、径1m、深さ3m の石組み井戸である。井戸の傍らには水神が祀られているが、井戸の発見でその意味が明らかになった。

14 **浅川氏宅の地下式壙、井戸址**　浅川晃輝氏の南隣り、浅川武夫氏の玄関の軒下に、地下式壙の開口部があり、敷居の真下付近でもうひとつの地下式壙と接続している。また西側の竹林内には整地面があり、2つの井戸址が東西にある。井戸はともに石組みで、東側は径70cm、深さ2.5m、西側は径0.6m、深さ1.5mを測る。先の土塁、井戸址との関連が強いと思われる。

15 **五輪塔群**　浅川晃輝氏宅北側の水田の北西隅の桜の古木の下に、小形の五輪塔群がある。6基余りあるが完存しない。浅川家の言い伝えによれば、平家の落ち武者の墓で、祀らなければ長男が家を継ぐことはできないとのこと。

16 **上行寺の地下式壙**　大泉村西井出寺所の上行寺は、文永11年（1274年）に本村を日蓮が通過したことをきっかけにつくられたものといわれているが、その寺の南側、寺と畑の境で昭和54年に偶然穴が開き、県文化課の新津健氏が調査したところ、1基の地下式壙であることがわかった。

17 **城下の宝篋印塔**（図版13－4）　大泉村谷戸城下の墓地中に宝篋印塔を利用した石塔が2基ある。その笠部の造りから鎌倉時代末～室町時代のものと思われる。後世新たに加えられた塔身の文面は次のとおり。東側例―「清涼院／太岳祖元居士」、「細田治郎左エ門清重／建保五年四月二十二日／六十六歳卒」。西側例―「頼岳院／一宗儀乗居士」、「多田満仲五代孫／多田四郎有頼子／細田太郎頼重／安元二年二月十七日　九十四歳」とある。両者の作風は同じため、ほぼ同じ時期に先祖供養の目的で立てられた石塔であ

ろう。

以上は管見によるものであり、他にもあることと思う。さて豆生田第３遺跡の所在する小字名「豆生田」と同音の地名として須玉町大豆生田が最も良く知られている。大泉村の方は「大」が欠落して書かれるのが今日一般的であるが、寛文６年（1666年）の「甲州逸見筋谷戸邑御検地水帳」をみると、五反田、竹のはな（館の端の意か）、経塚田、城のこし、城の脇など興味深い地名とともに「大豆生田」が記載されている。つまり、その後いつしか「大」が欠落して使われるようになったわけである。須玉町の大豆生田は、甲斐国志によれば、巨摩郡中郡にあった同名の村が釜無川の氾濫によって土地を流失したため当地へ移住したものといわれ、また「山梨県水害史」によれば、水害があったのは天正２年（1574年）であるという。「大豆生田」は県外にも例があり、一説には古代の田の等級の「豆田」から発生したともいわれるが、甲斐国志の説はともかく、須玉町の例と大泉村の例の間には何らかの関連があろう。なお、豆生田第３遺跡の北側の「竹原」とよばれる集落は、甲斐国志には「高原」とある。

Ⅲ　調査の方法と経過

１　調査の方法

今年度の当初に土地改良事務所側から圃場整備予定地域内の土の切り盛り図が呈示され、水

第４図　発掘区域とその周辺（１／2000）

田の苦土以下を重機等で破壊しない部分（いわゆる盛り土部分）の調査は補助金の対象外とみなし、発掘調査を認めないという指導があったため、まず最初に切り盛り図に従って盛り土部分を調査対象地域からはずした。そして、遺跡の東側地区（試掘調査で多量の土器片を得た場所）に中心があるとの判断から、東側地区に重点をおいて調査を行ない、その周辺は最初に重機によって巾1.5 mのトレンチを２本程度入れ、遺構確認とセクション観察によって全面的に剥ぐか否か検討するという調査方法をとった。また各遺構の調査を行なうにあたり、磁北に基づいた５m グリッドを設定し、北→南へA～R、西→東へ１～33と表示した。（第４図）

2　調査の経過

本遺跡の調査は昭和60年６月１日に開始した。まず調査区域内全体の再試掘を行ない、調査区域内の土層、遺構確認面のレベル等を調べた。その後６月11日に器材搬入、テント設置。翌日から重機による表土剥ぎ作業を始め、同時に鋤簾がけによって遺構確認作業を開始した。また鋤簾がけの終了した部分から杭打ちを行なった。６月18日からは住居址等、遺構の調査に入り、セクション図、遺物出土状況図を取った後掘り上げ、清掃、写真撮影、平面図作成を行なった。調査期間中、台風６号等による天候の不順によって作業できない日が多く、調査進行に影響を与えた。８月23日、殆どの作業を終え、器材、テントを撤収した。調査面積は3550㎡、調査日数は57日、作業員は延べ 558人を要した。

Ⅳ　層　　序

本遺跡周辺は、すぐ西に西泉川、鳩川が流れているため川流れによる災害を幾度となく受けた地域であり、黒色土が厚く堆積した埋没谷があちこちに発達している。遺構の多くは埋没谷と埋没谷の間のローム面上で確認することができたが、６号住居址や３号掘立柱建物址のように黒色堆積土上に構築された例もあり、確認できなかったり見過した遺構もあったのではないかと思われる。とくに調査区北側の水田下は、黒色土が1.5 m以上にもわたって広く堆積しており、遺構を確認できなかった要因となっている。

次に示すセクションはI―J18グリッドの道際のものである。（第５図）

１層　明褐色土層―田の耕作土（天土）

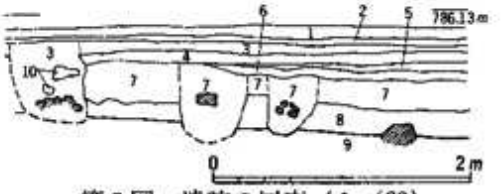
２層　黄褐色土層―田の止水層（苦土）

３層　明褐色土層―旧水田の耕作土

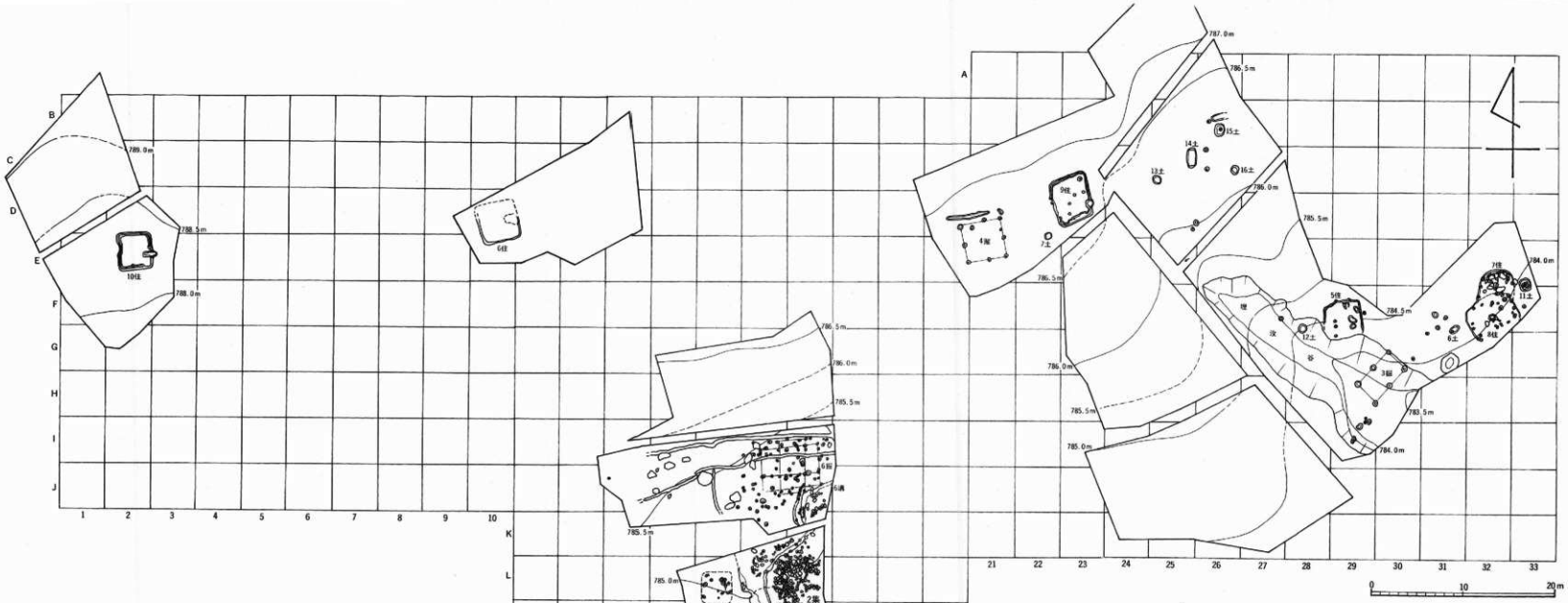
４層　赤褐色土層―旧水田の止水層

５層　茶褐色土層―旧水田造成前の耕作土層で、小礫がやや多い。

６層　茶褐色土層―ローム粒子と７層の混合土層で、造成時の盛り土であろうか。



第５図　遺跡の層序（１／60）



第６図　豆生田第３遺跡全体図（１／400）

凡例
○住―○号住居址
○掘―○号掘立柱建物址
○土―○号土壙
○溝―○号溝址
○集―○号集石

7層　黒褐色土層―小礫、ローム粒子をやや多く含み、しまりが弱い。旧表土層であろうか。暗渠が東西方向に2本走り礫が詰められている。旧水田面以前に伴うことは明らかである。

8層　暗黒褐色土層―ローム粒子が少なく、黒色を呈す。

9層　ローム層

V　遺構と遺物

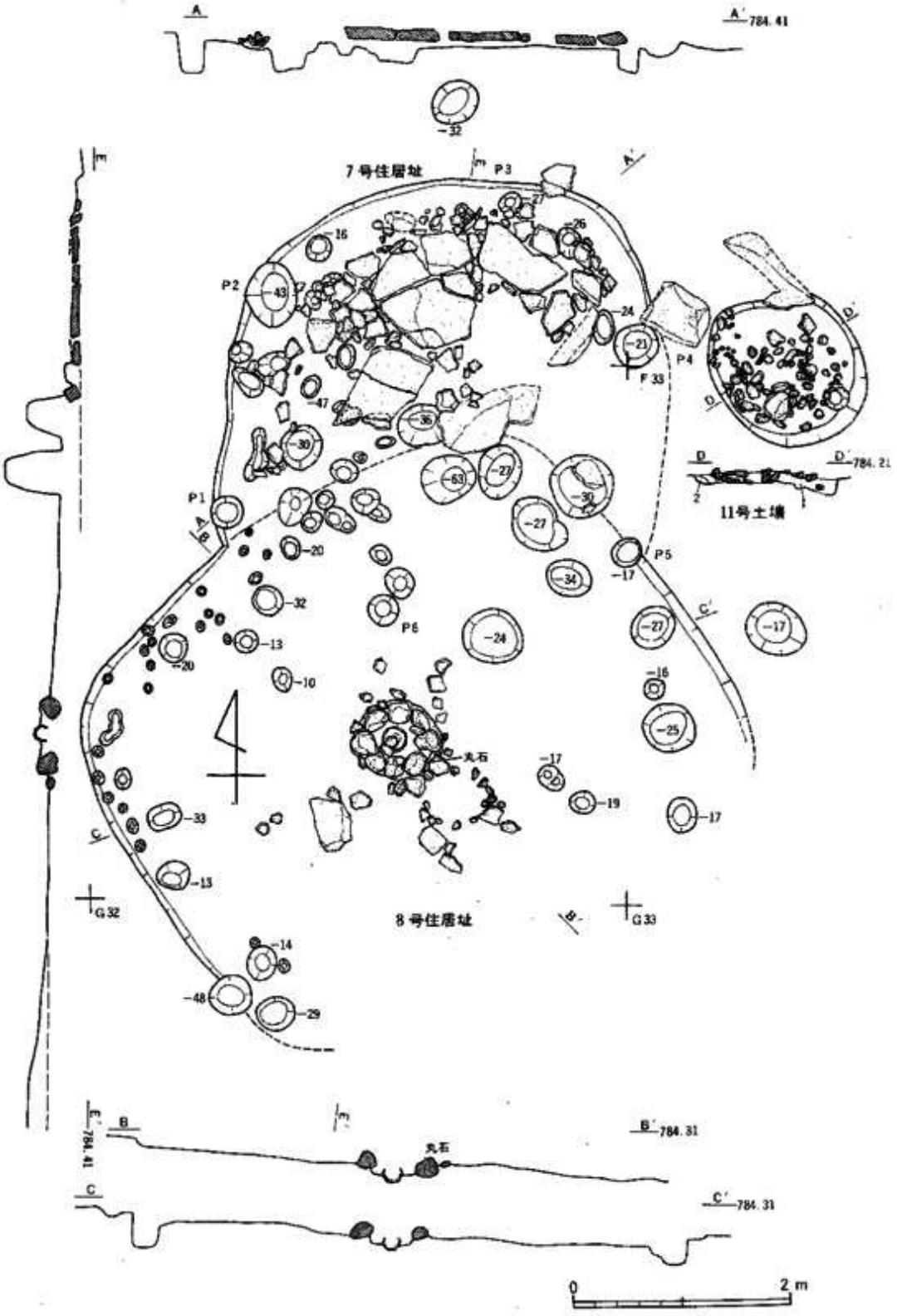
豆生田第3遺跡の調査で検出された遺構は、縄文時代後期住居址2軒（堀ノ内式期敷石住居址1軒、加曽利B式期1軒）、平安時代住居址8軒（9世紀第4四半期2軒、10世紀第1四半期2期、10世紀第3四半期4軒）、平安時代～中・近世の掘立柱建物址6軒、縄文時代～中・近世の土壙16基（縄文時代3基、中・近世の方形石組土壙2基）、溝址6条、集石2、ピット群2である（第6図）。発見された遺物は、縄文土器（前期諸磯 b式～ c式、中期曽利V式～後期加曽利B式）、石器（打製石斧、磨製石斧、稜磨石、凹石、海浜石、石鏃、石匙）、土製品（土偶、土匙、ミニチュア土器）、平安時代土師器、灰釉陶器、須恵器、鉄製品（刀子等）、砥石、中・近世の陶器、磁器（青磁等）、土師質土器、土鍋、瓦器、石鉢、砥石、キセル、古銭である。

1　縄文時代の竪穴住居址（7，8）とそのその遺物

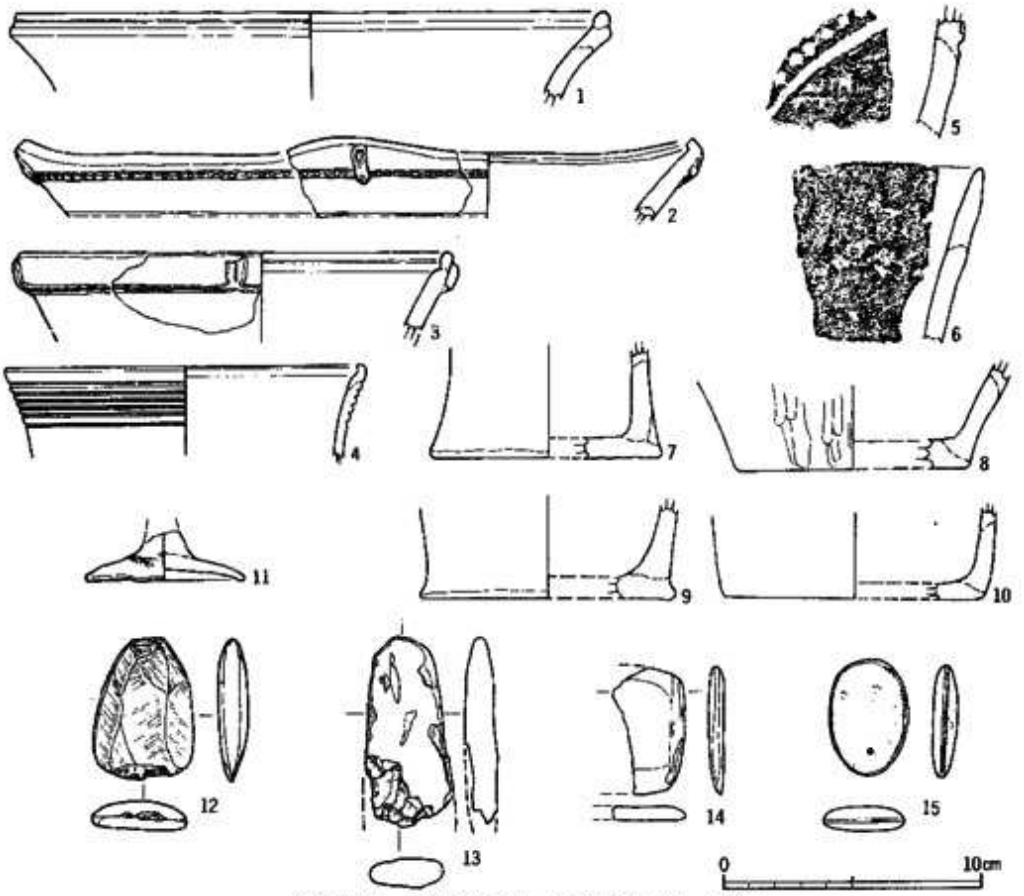
7号住居址

遺構（第7図、図版2）　E・F31・32グリッドに位置する。縄文時代後期堀ノ内Ⅱ式期頃の所産と考えられる敷石住居址である。南側半分が8号住居址に切られているため、敷石部分は北側半分のみ残存している。また検出面が苦土直下のため重機で表土を剥ぐ際、敷石の石材の一部が移動した可能性がある。従って覆土はほとんど残存せず、石材と石材の間や敷石面の低い場所に僅かに残存した覆土中から遺物が少量出土している。なお8号住居址とレベル差がほとんどないため、一部に出土資料の混合があることを断わっておく。さて本址はローム中に掘り方面を構築した後、茶褐色土の貼り床をして平らにならし、巾40 cm～80 cm、厚さ5～10 cm程の鉄平石（板状節理の発達した安山岩）を主とする板状の輝石安山岩を住居址中央部に敷き、周辺部や石材と石材の間には小さな石材を敷きつめてあった。また外郭部分はやや雑に小さな石材が斜めに立ち並んで検出された。本址の掘り方プランは直径4 m の円形であるが、敷石部分は残存部から推定すると一辺2 m の六角形を呈す。残存した敷石部分のコーナーにはピットがあり、主柱穴と考えられる。即ち本址の柱穴はp1～p6の6本であろう。炉は、本址中央 部が8号住居址によって切られているため検出できなかった。

遺物（第8・9図、図版2）　1～4は土器口縁部、5は胴部、7～10は底部、11は土製

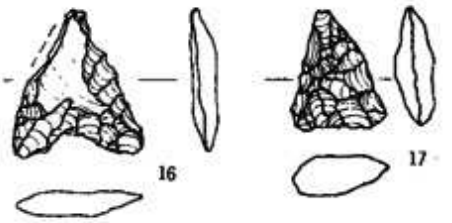


第7図　7・8号住居址、11号土壙

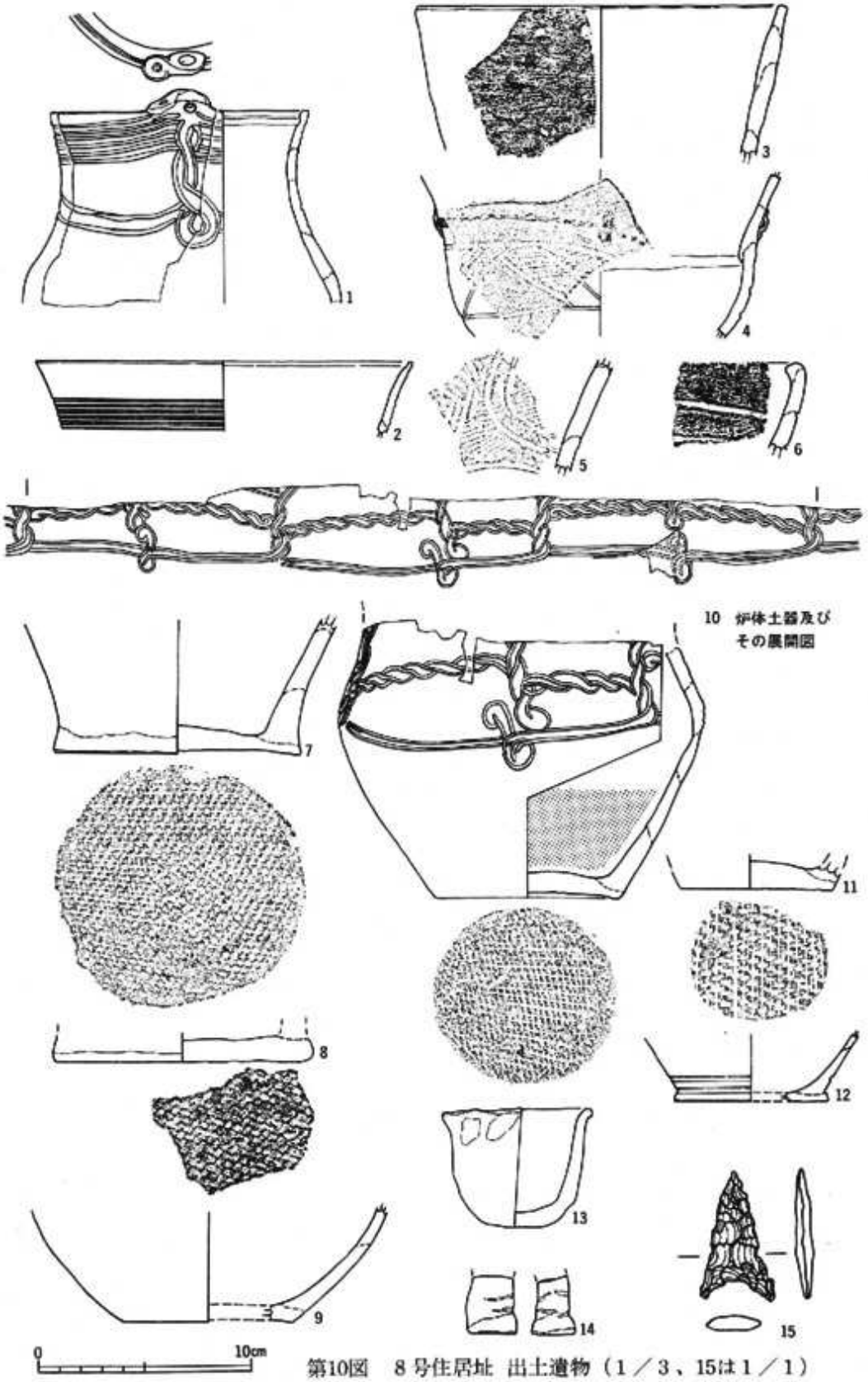


第８図　７号住居址 出土遺物（１／３）

蓋、12～14は小型磨斧、15は磨き石である。このうち１は口縁部に一条の沈線が巡る深鉢形土器である。また２、３は口縁部に刻みのある１本の隆帯がまわり、８の字状の貼り付け文がみられる。４は口縁部外面に平行した６本の沈線がめぐる深鉢形土器で加曽利B式期の所産であろう。11は直径6.2 cm の無文の土製蓋で、磨きが良好である。12は翡翠製の小型磨斧で、長径5.6 cm、短径 3.8 cm、厚さ１cmを測る優品である。出土地点が苦土直下のため水田の鉄分沈着が著しく、全体的に茶褐色に染まっているが、部分的に翡翠独特の黄緑色がみられる。15は黒色粘板岩の海浜石を利用した磨き石で、長径 4.4 cm、短径３cm厚さ0.9 cm を測る。表面には細かい擦痕状の使用痕がみられるが、中でも側面部分では側面に直交して無数にみられ、石の平らな面を指でつまんで一定方向に磨く使用方法が想像できる。縄文時代後期といえば、特に土器の内外面の磨きが盛んな時期で、中でも堀ノ内式期はその整形技術の発生期に相当する。つまりこの磨き石は、土器内外面の磨き技術の発達に伴って出現した石器で、土器を磨くためのものであると推定することができよう。石質は碁石等に利用される那智黒に近いものであり、先の



第９図　７号住居址 石鏃（１／１）



第10図　8号住居址 出土遺物（1／3、15は1／1）

翡翠製磨斧とともに類例が少なく、貴重な資料である。また黒燿石製の石鏃が2点(16、17)出土した。

8号住居址

遺構（第7図、図版2）　F・G32・33グリッドに位置する。円形に近い隅丸方形を呈す竪穴住居址で、中央に石囲い炉をもつ。北側1／4を7号住居址に、南側半分を水田の造成で削平されており、本址の遺存状況は悪い。但し炉址は石組み、炉体土器とも完存していた。主軸方向はN→34°→Wを示し、長径5.5mを測る。住居址の覆土は茶褐色土層で、僅か10cmの厚さで残存していた。床面はローム面に構築されているが、堅くしまった部分はほとんどなく、しかも約6°の傾斜で北に傾いている。ピットは壁ぎわに15個以上検出されたが、主柱穴はどれなのか明らかではない。またシミ状の小ピットも数多くみられた。周溝はない。炉は住居址のほぼ中央に位置し、径70cm、深さ15cmの円形の掘り込みの上部に、径20cm程の8個の丸い安山岩礫を円形に組んで石囲い炉が構築されている。8個の礫のうち住居址正面にあたる石には径21cmの丸石を用いているが、他はごく普通の自然石である。また丸石の正面に10cmほどの卵形を呈する茶褐色の安山岩をおき、その両側には安山岩の平石を配している。更に炉の正面の巾60cm程の部分は床面より少し高く平らになっており、その周囲には礫や平石が置かれ、炉の正面として何らかの機能を果していた場所と思われる。丸石についてはⅣ章2で述べる。炉の中央部には約5cm掘り込んで胴部以下の加曽利BI式の炉体土器を埋めて固定してあった。　炉体土器内には焼土・炭化物は全くみられなかったが、炉体土器周辺の一部のローム面が焼成を受けて赤色化していた。なお炉内覆土は住居址覆土と同質であった。

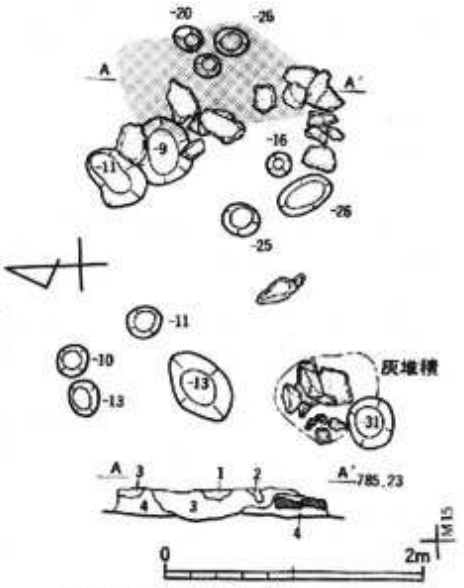
遺物（第10図、図版2）　住居址の覆土が薄いため遺物の出土は少ない。1～3、6は土器口縁部、4、5は胴部、7～12は胴部下半及び底部、13はミニチュア土器、14は土偶足である。このうち10は炉体土器に転用された土器で、器形は1と同じタイプの胴部上半をもつ深鉢形土器であろう。胴部外面は1と同じく良く磨かれた表面に棒状工具で描かれた縄状文様があり、土器を緊縛しているかのようである。民俗事例にみられる土器を包む籠が想起される。内面には黒変部があり、元は煮沸用の土器として使用されていたことがわかる。残存高 13cm、胴径14.5cm、底径 8.7cm。7、8、10、11には底部に網代痕がみられるが、そのうち7、10、11は2本越え1本潜り1本送りの編み方であり、その材料の巾は現状では、7は 1.5～2mm、10は0.5 ～2mm、11は1～1.5mm を測る。8は2本越え、2本潜り、1本送りで、原体の巾は 2.5～3mmである。13は炉の南1.8mの位置にあったもので、口径6～7cm、高さ 5.5cm、底径3cmを測る無文のミニチュア土器で、成形が雑である。また底部には、かすかに荒い網代痕がみられる。14は現存高2.7cm の土偶足の破片である。15は黒燿石製の石鏃である。

2　平安時代の住居址（1～6，9，10）とその出土遺物

1号住居址

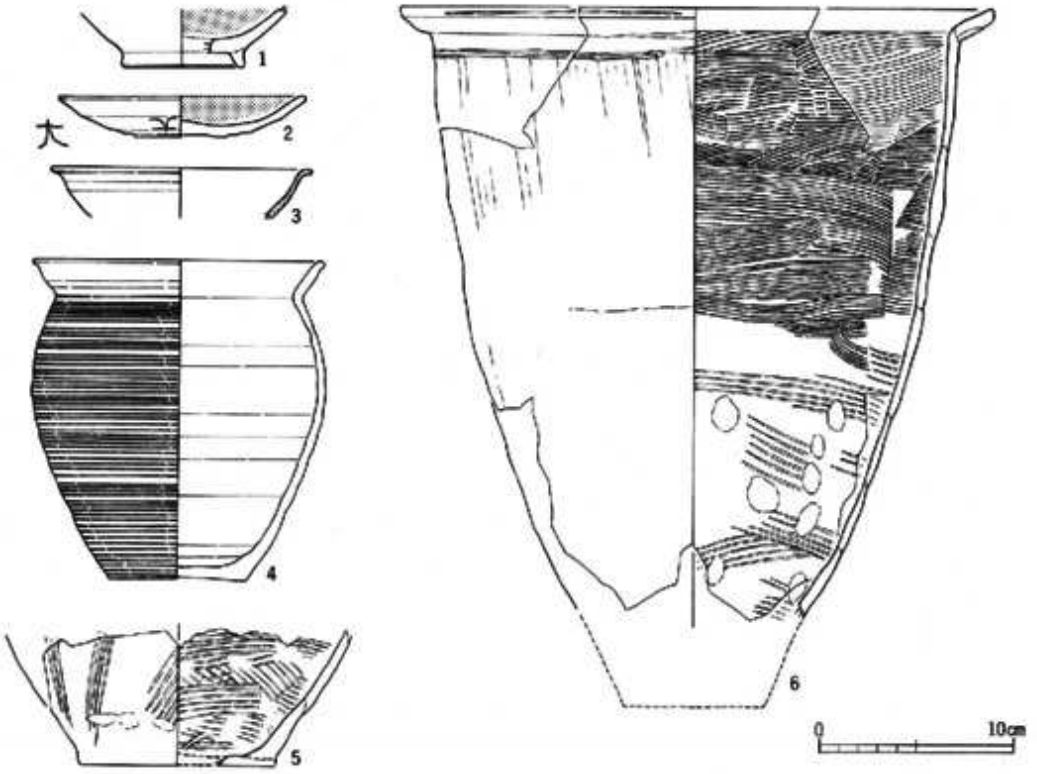
遺構（第11図、図版3）　L15グリッドに位置する。水田の苦土層を重機で剥いでいる途

中、配石を伴う焼土が検出され、その周辺から多くの土師器片が出土したためカマドと判断した。この住居址周辺は中・近世のピットの重複が激しく、また耕作面から浅い所に遺存していたため、壁等は既に消滅し、カマドの構築材と焼土が僅かに残存していたものである。また床面、周溝等もわからず、結局住居プランを把握することができなかった。但し、焼土の南北両側に袖石と考えられる石材がみられることから、平安時代に八ケ岳南麓で一般的な東カマドの住居址を想定することができる。その土層は次の通り。1層　黒褐色土層―撹乱層。2層　黒褐色土層―焼土粒子を少量含む。3層　黄褐色土層―焼土、ローム粒子、黒褐色土、土師器甕破片を多量に含む。4層　黒褐色土層―小礫を混入し、粘性、しまりがある。なおカマドから西2m 離れたところに灰が厚く堆積していたが、本址に伴なうものか否かは判然としない。



第11図　1号住居址（1／60）

遺物（第12図、図版3）　カマド周辺及び、カマド3層中から出土した。1、2は内面黒色土器、4はロクロに整形された小型甕で信州系土師器である。このうち2の内面黒色皿は山

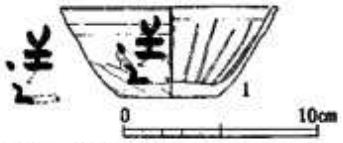


第12図　1号住居址 出土遺物（1／4）

梨県内では類例が少ないタイプである。またこの外面には刻書文字「大」がみられる。6の甕はカマド内3層から出土したもので、外面の縦方向の刷毛目痕が薄く特異である。3の灰釉は混入品の可能性がある。なお図示した他に10世紀第3四半期の甕口縁部小破片が3点出土しているが、甲斐型坏は破片すら出土していない。以上よりこの住居址の時期は6の甕口縁形態から10世紀前半におさえられる。

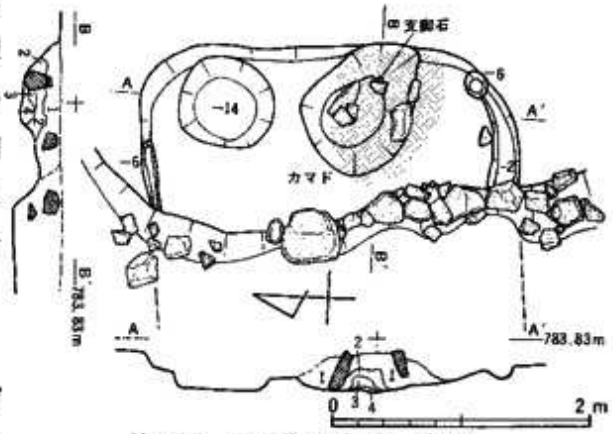
2号住居址

遺構（第27図、図版3）　D15グリッドに位置する。1号住居址と同じく、苦土の直下に検出された焼土と土師器類の出土をもって住居址を想定した。焼土層は厚さ5cm、径1mの範囲で広がっていたもので配石等はみられなかったが、焼土層の西側からまとまった坏が出土したことから、東カマドをもつ住居址と思われ、壁が削平されて存在しないため、床面を追って住居プランを求めようとしたが、床面、周溝、柱穴等全く不明であった。



第13図　2号住居址 出土遺物（1／4）

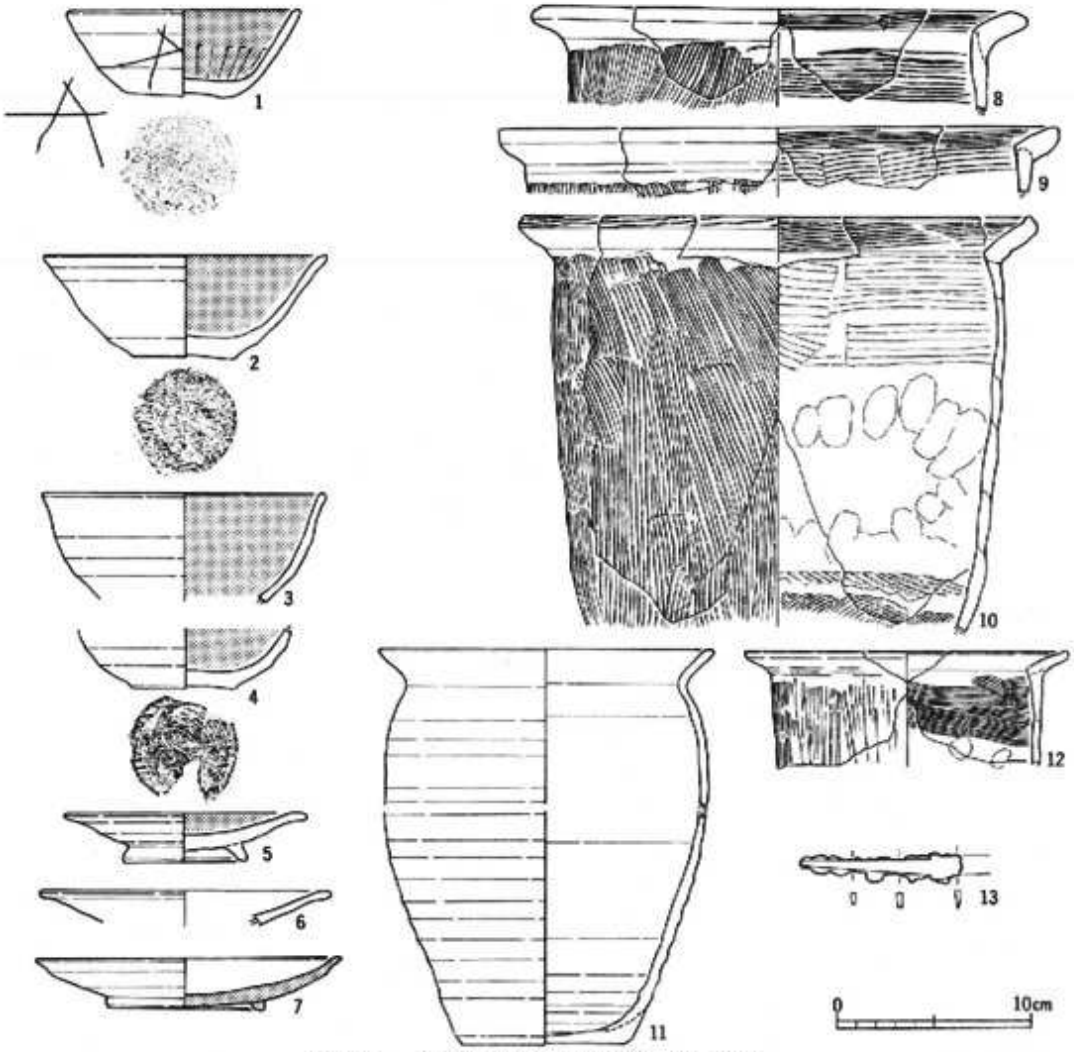
遺物（第13図、図版3）　焼土の西南50cm付近に土師器が少量出土した。1の坏は重機で欠いて破損しているが元は完形であったと思われる。10世紀第1四半期の甲斐型坏であり、外面に「送」と墨書されている。この他に同時期と思われる内外面刷毛目整形された土師器甕胴部片と、同じく小型甕片、須恵器坏の小片が出土している。



第14図　3号住居址（1／60）

3号住居址

遺構（第14図、図版3）　R16・17グリッドに位置する東カマドをもつ隅丸方形の竪穴住居址である。住居址の西側が1号溝によって削られ1／3程度残存するのみである。主軸方向はE－2°－N、南北2.9mを測り、該期の住居址の中では小規模である。覆土はローム粒子、スコリア、炭化物を含み、しまり、粘性のある暗茶褐色土層1層のみである。ローム層に掘り込まれた床面は全体的に堅くしまっている。また床面上2.5～6cmの部分に4～10cm巾の板状の炭化材が2ケ所ほど見られた。周溝は北壁下と南壁下にみられる。主柱穴と思われるピットはない。カマドに向って左、住居址の北東隅には、径が大きく浅いピットがある。カマドは石組み粘土貼りで、天井石を除き遺存状況は良好である。カマド内に残る支脚石の上には甕を平らに保つための平石がのっていた。平石は必ずしも置かれるものではないが、同じような構造を示すものとして、支脚石の上に完形の坏を逆に置く例がある。(註3) カマド内の土層は次の通り。2層　暗褐色土層－ローム粒子を多く含み、しまり、粘性あり。3層　焼土層。4



第15図　3号住居址 出土遺物（1／4）

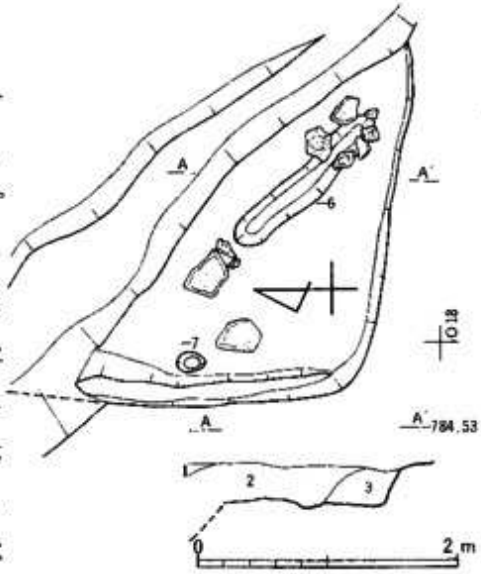
層　暗黄褐色土層―ローム粒子を多く含む。なお1号溝の東側のへり、即ち住居址との境には、護岸用と思われる雑な石積みがみられる。

遺物（第15図、図版4）　カマド内とその両脇からやや多く出土した。1～5は内面黒色の信州系土師器である。1は完形品であるが、2、4の坏に比べ、器体の傾斜角が急で、内面にかすかなヘラ整形痕がみられ、やや古い様相を示している。また外面には記号的な線刻を有している。6は内面の磨きが良好な土師器皿で、やはり信州系である。甲斐型土器は本址には破片すら含まれない。7は黒笹14号窯式の灰釉陶器皿で、ほぼ9世紀後半に位置づけられている。8～10は内外面刷毛目整形された甕で、肥厚した口縁形態から10世紀第3四半期の所産であろう。中でも10はカマド内から出土した大形破片であり、本址の時期を決定する資料である。11はロクロ成形甕で、胎土が信州系土器群に類似するが断定はできない。13はカマド内出土の刀子で、茎部と刃部の一部が残存する。茎部は長さ 6.7 cm、厚さ2～3 mm。図示した他に、信州系のロクロ整形甕口縁部1と、ロクロ整形による横刷毛目痕をもつ小型甕片1、須恵器大甕

胴部片１、銅片（銅銭か）１がある。

４号住居址

遺構（第16図、図版４）　N18グリッドに位置する。東側を北西から東南に斜めに横切る４号溝によって本址は直角三角形状に残存する。主軸方向はE－８°－Sを示す。カマドは遺存していないが隅丸方形の東カマドをもつ竪穴住居址であろう。土層堆積は１層と２層が４号溝にともなうもので、３層部分のみが本址の覆土である。３層は黒褐色土層で、ローム粒子、スコリアを含みしまり、粘性あり。ローム層中に床面は構築されており、前述の通り床の大半を４号溝によって失われているうえ、残存した床の半分以上が溝の水洗によって浸されている状況がセクションにはっきりと表われている。なお周溝、主柱穴はない。床面上の礫は溝に伴うものであろう。



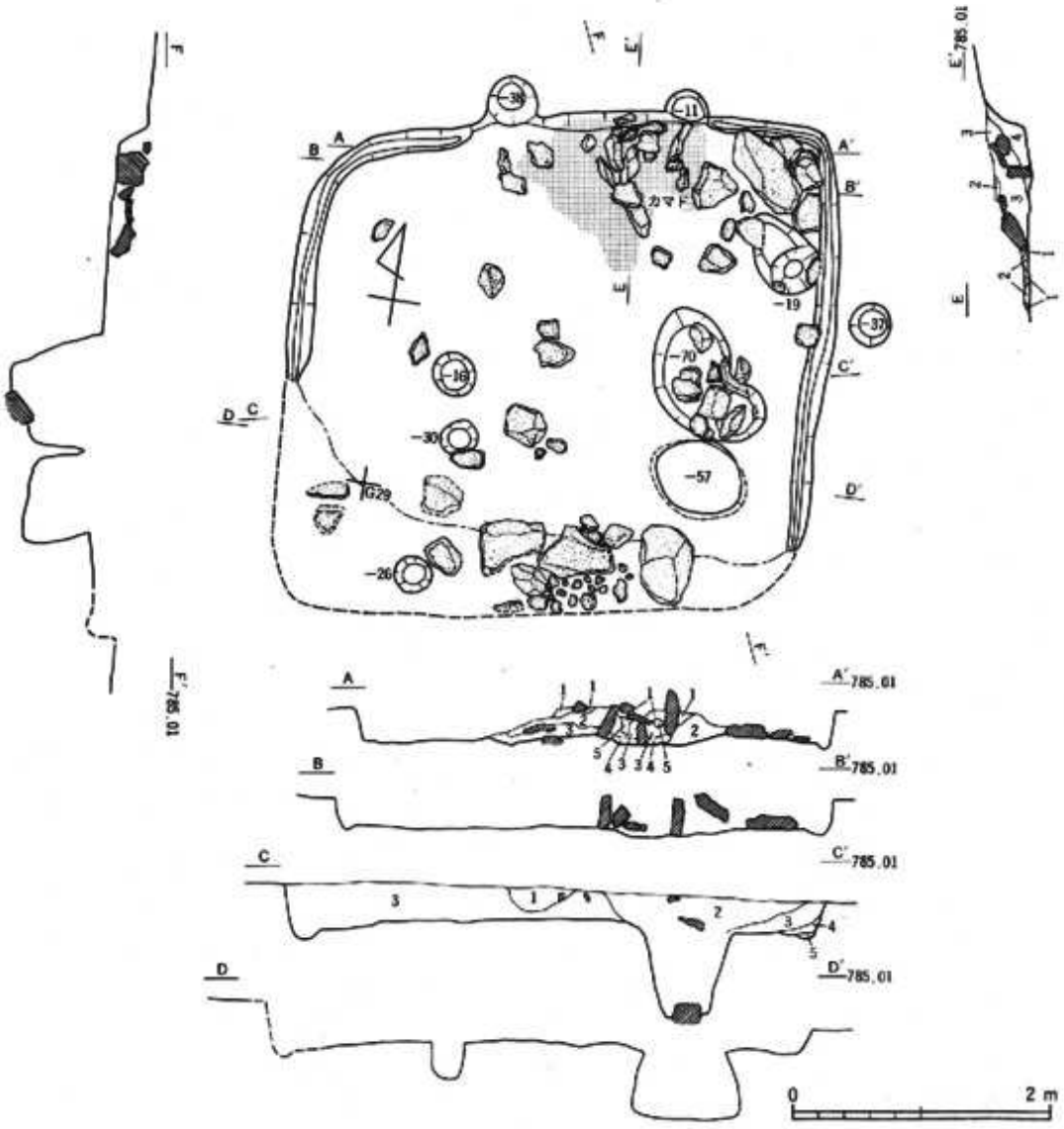
第16図　４号住居址（１／60）

遺物（第17図、図版４）　僅かに残存した覆土中から少量出土している。１は口縁部が玉縁化した甲斐型坏の小片。２は外面胴部を細かい刷毛目で縦方向に整形し、口縁部内面を同じ刷毛目でロクロ整形した甕である。信州系の甕で、本県では類例を見ない資料である。３は口縁が肥厚化した甕である。図示した他に、10世紀第３四半期の甲斐型坏片と、内面黒色坏片がある。以上より本址は10世紀第３四半紀頃の所産であろう。

第17図　４号住居址 出土遺物（１／４）

５号住居址

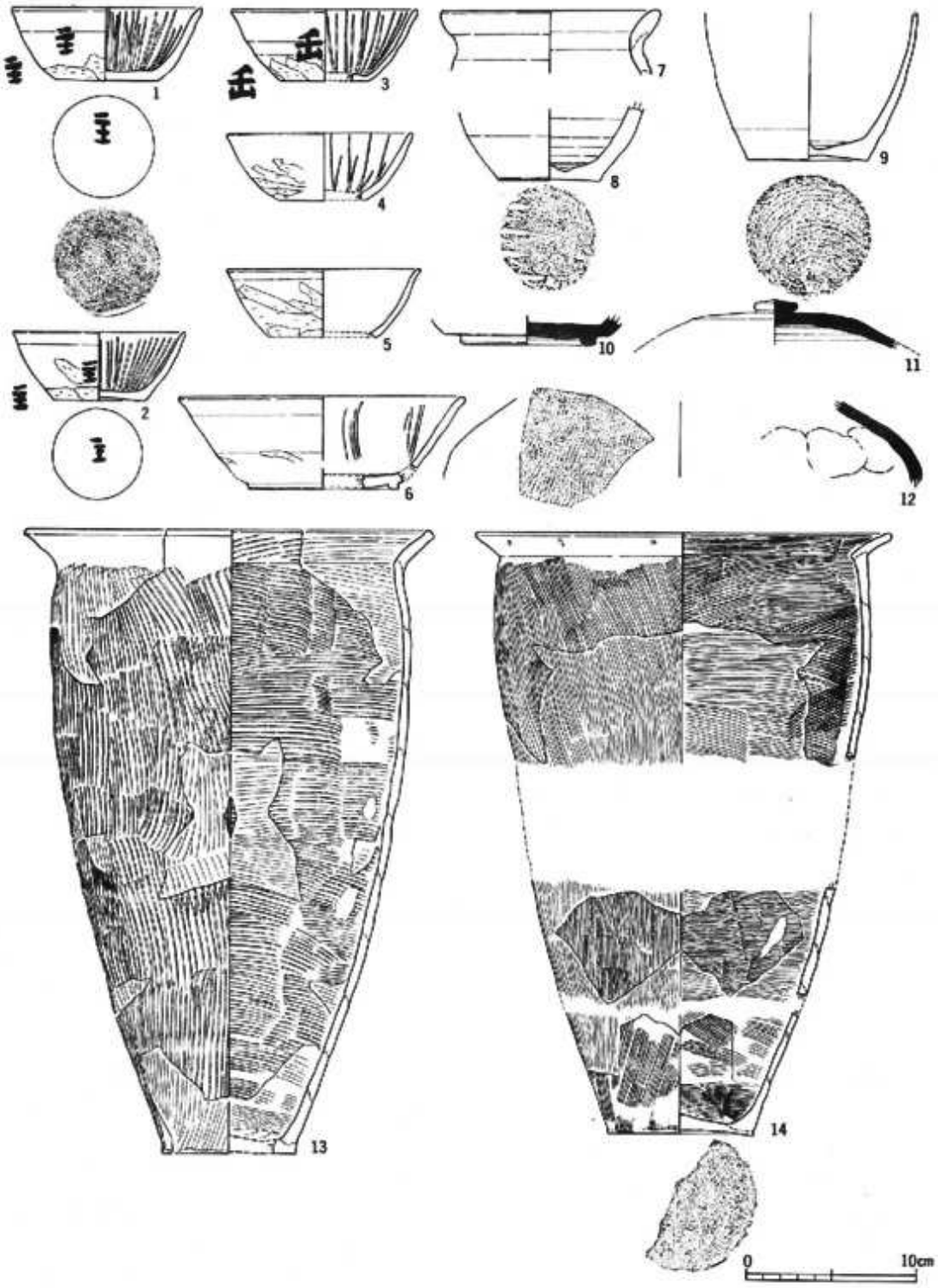
遺構（第18図、図版５）　F・G28・29グリッドに位置する北カマドをもつ隅丸方形の竪穴住居址である。本址は北側がローム中に、南側が黒色土中に構築されている上、住居址西側には巾５～10ｍ、長さ27ｍの黒色土を包含する埋没谷が形成されているため、埋没谷に伴う浸食作用を受けて西壁中央から南壁にかけて床面、壁、周溝等を確認することができなかった。北壁部のピットは後世のものであろう。主軸方向はN－６°－Wを示し、東西4.1ｍをはかる。覆土の層序は次の通り。１層　明褐色土層、２層　茶褐色土層は埋没谷上層の堆積に伴うものである。３層　黒褐色土層－小礫、スコリアを混入し、しまりがある。４層　黒褐色土層－３層に近いが小礫の量が少ない。５層　黒褐色土層－壁のローム崩土。床面は北側２／３が良好に遺存しており、カマド部分を除いて周溝が巡る。床面には長径70cm、深さ50～70cmの土壙が２



第18図　5号住居址（1／60）

基並存するが、セクションから本址に伴う貯蔵穴であると思われる。特に南例の袋状を示す形態は珍らしい。また床面上の4つのピットは主柱穴か否か不明である。カマドは北壁やや東寄りに石組み粘土貼りで構築されており、両袖、支脚石は遺存していたが、天井部の全てはカマドに向って右側、住居址の東北隅にまとめられていた。北カマドをもつ住居址は、八ケ岳南麓では9世紀第4四半期に稀に見られるものであるが類例は極めて少ない。〔註5〕カマドの層序は次の通り。1層　黒褐色土層―住居址覆土の3層と同一。2層　明黄褐色土層―粘土質のローム土で、カマドの構築土が崩れたものである。3層　黒褐色土層―1層とほぼ同質で、焼土粒子、炭化物と共に多量の土師器甕片を包含していた。4層　茶褐色土層―壁体崩土でしまりがない。

遺物（第19図、図版5）　カマド内及び床面直上から多くの遺物が出土した。1～6は甲斐型坏で、口縁形態、底径と口径比から9世紀第4四半期の所産であろう。この中で墨書土器

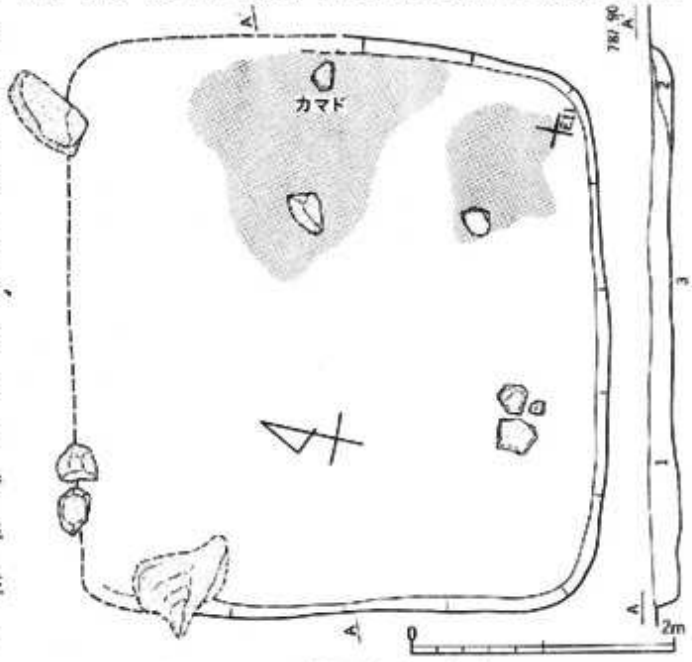


第19図　5号住居址 出土遺物（1／4）

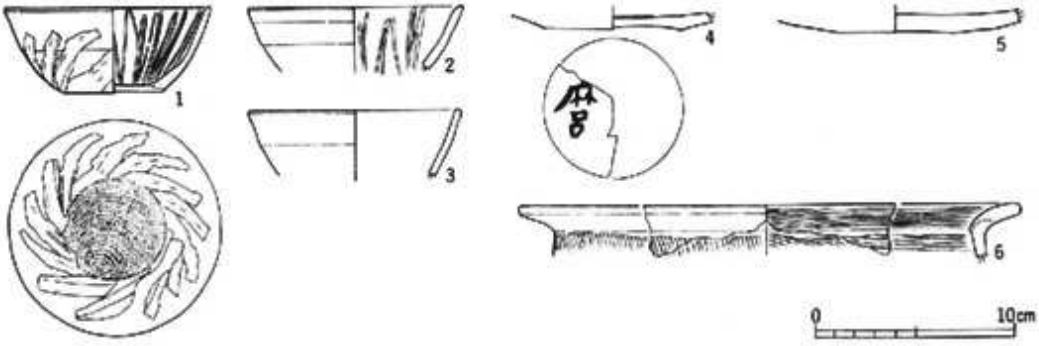
が3点みられる。1、2は共に外部と底部にそれぞれ「主」と墨書されており、その筆跡から同一人物によるものと想像される。「主」は戸主、或いは主人を意味するのであろうか。3は外部に「缶」が墨書されている。このほかに3と同一文字と思われる墨書のある坏口縁部が、図示しなかったが1点ある。なお9世紀第4四半紀の甲斐型坏は、それ以降の製品と比べて粒子が少し荒く、肌触りがざらつくなど胎土、整形に違いがみられるようである。7～9はロクロ整形された小型甕、10～12は須恵器、13、14は内外面刷毛目整形された甕である。13はカマド内3層中とその周辺からまとまって出土したもので、口縁部から底部まで接合した資料である。最近、県内ではこうした器形がわかる資料が増加しており、坏と同様に甕にも法量的に一定の規格があったことを知ることができる。図示した他に内面黒色土器片が1点ある。

6号住居址

遺構（第20図、図版6）　D・E10・11グリッドに位置する。茶褐色土層中に構築された住居址のため、重機によって下層のローム面までトレンチを入れている途中、セクション面に焼土と床面、壁の一部が確認されたものである。つまりトレンチがちょうどカマドの中央部を通過したため、カマドの主要部分全てが失われている。但し焼土の広がりから東カマドであることは確かである。また茶褐色土中の構築ということで壁、床面の検出が難しく、北側半分では全く確認できなかった。住居址の平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は E−13° −N、東西



第20図　6号住居址（1／60）



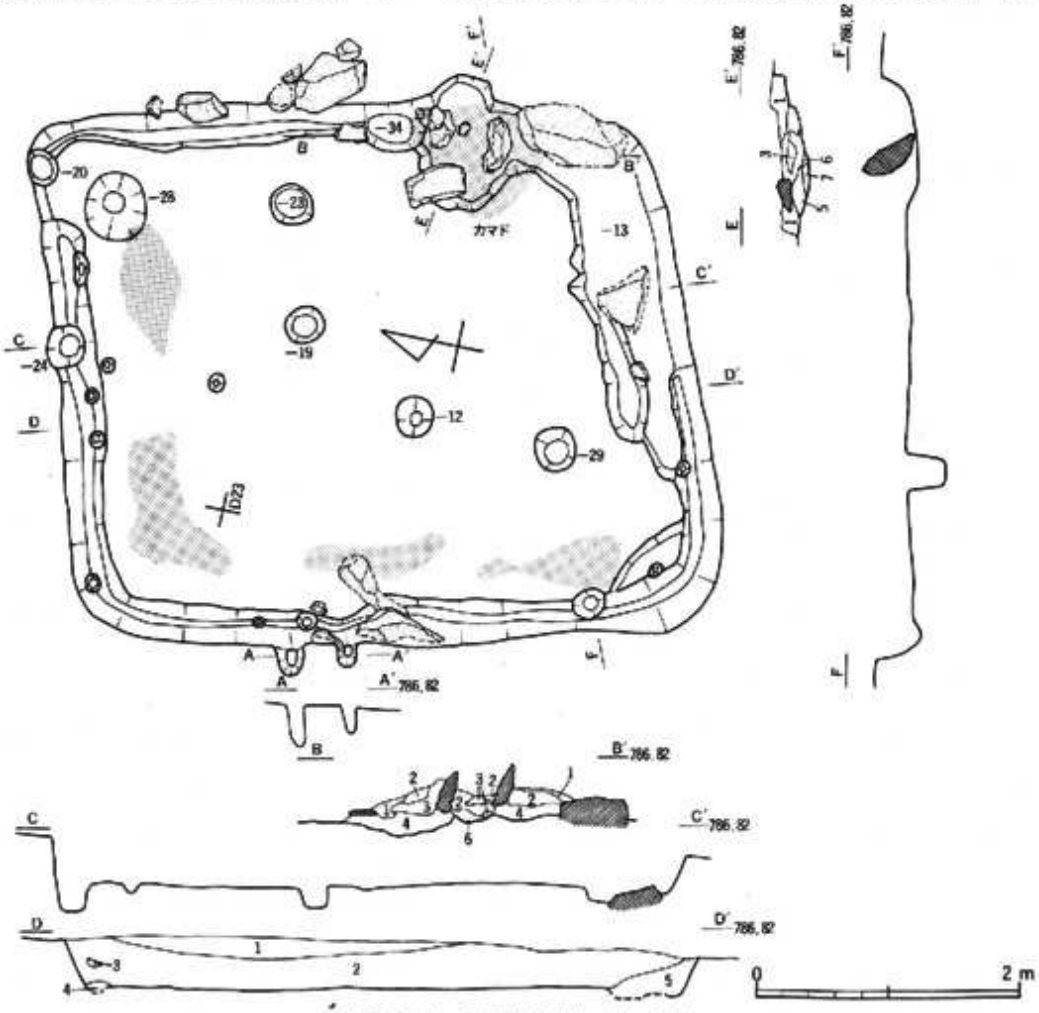
第21図　6号住居址 出土遺物（1／4）

4.2mをはかる。層序は次の通り。1層　黒褐色土層―小礫をやや多く含み、しまり、粘性あり。2層　焼土層。3層　暗茶褐色土層―ローム粒子をやや多く含み、粘性が強く堅くしまっている。床面には堅い部分がほとんどなく、周溝、ピット共に検出することはできなかった。カマドは前述の通り。

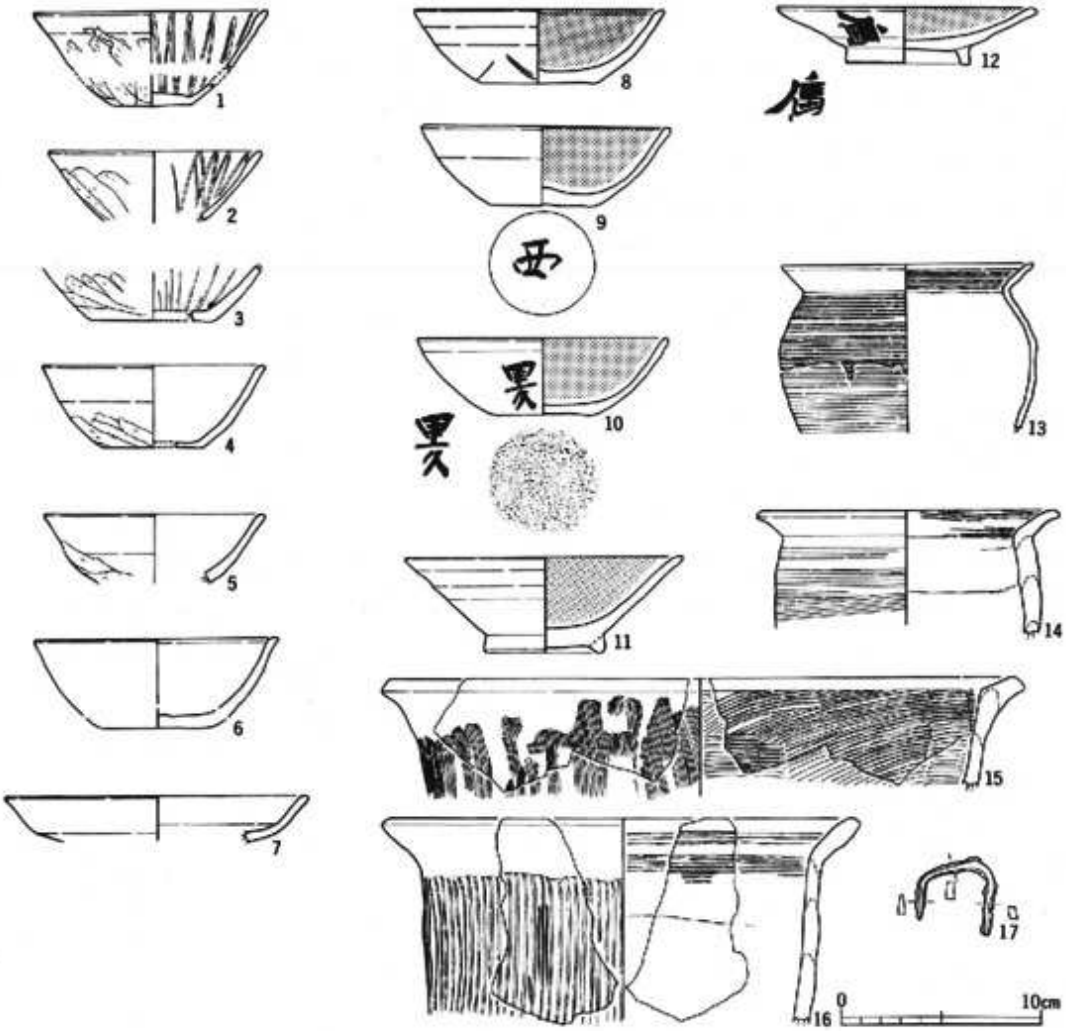
遺物（第21図、図版6）　住居址の西壁に接して1の完形の坏が出土したほか、覆土中及び廃土中から少量の遺物を得た。1～3は甲斐型坏、4、5は甲斐型の皿である。この中で4の底部外面には墨書文字「麻呂」がみられるが、明らかに人名を表わすものである。〔注8〕6は内外面刷毛目整形された甕である。以上より本址は9世紀第4四半紀の所産であろう。図示した他に須恵器甕胴部の小片が出土している。

9号住居址

遺構（第22図、図版6）　C・D22・23グリッドに位置し、東カマドをもつ平行四辺形に近い隅丸方形の竪穴住居址である。カマド部分の天井石等が乱れているものの全体的には遺存状況は良好である。主軸方向はE―15°―Nを示し、東西 3.8～4.1m、南北4.6mを測るやや大



第22図　9号住居址（1／60）



第23図　9号住居址 出土遺物（1／4）

きめの住居址である。層序は次の通り。1層　黒褐色土層。2層　茶褐色土層―ローム粒子が全体的に混入しているほか、遺物、炭化物、焼土粒子を包含する。3層　焼土層―北壁、西壁寄りの床面から10数cm浮いた位置に堆積していた。4層　暗黄褐色土層―ローム粒子を多く含み、焼土粒子、炭化物が混入する。床面はローム中に構築されており、よくしまっている。周溝はカマド部分を除いてほぼ全周し、小ピットが周溝中にいくつか検出された。床面上にはピットが5個みられるが、その配列は不規則で、上屋構造に関わるものか否か不明である。カマドは東壁のやや南寄りに構築され、石組粘土貼り構造で両袖石と天井石、支脚石が残存する。焚き口部分～燃焼部分を床面よりも10cmほど掘りくぼめており、焚き口部分の範囲を明確にしている。この傾向は北巨摩地方では10世紀後半の住居址に普遍的にみられる。この焚き口部分には厚さ10cm、巾40cmぐらいにわたって炭化物の堆積がみられ、使用当時の状況をそのまま残していた。カマドの層序は次の通り。1層　茶褐色土層―住居址の覆土2層と同一。2層　茶褐色土層―焼土粒子を少量含む粘性の強い土質で、カマドの構築粘土と思われる。3層　黄褐色

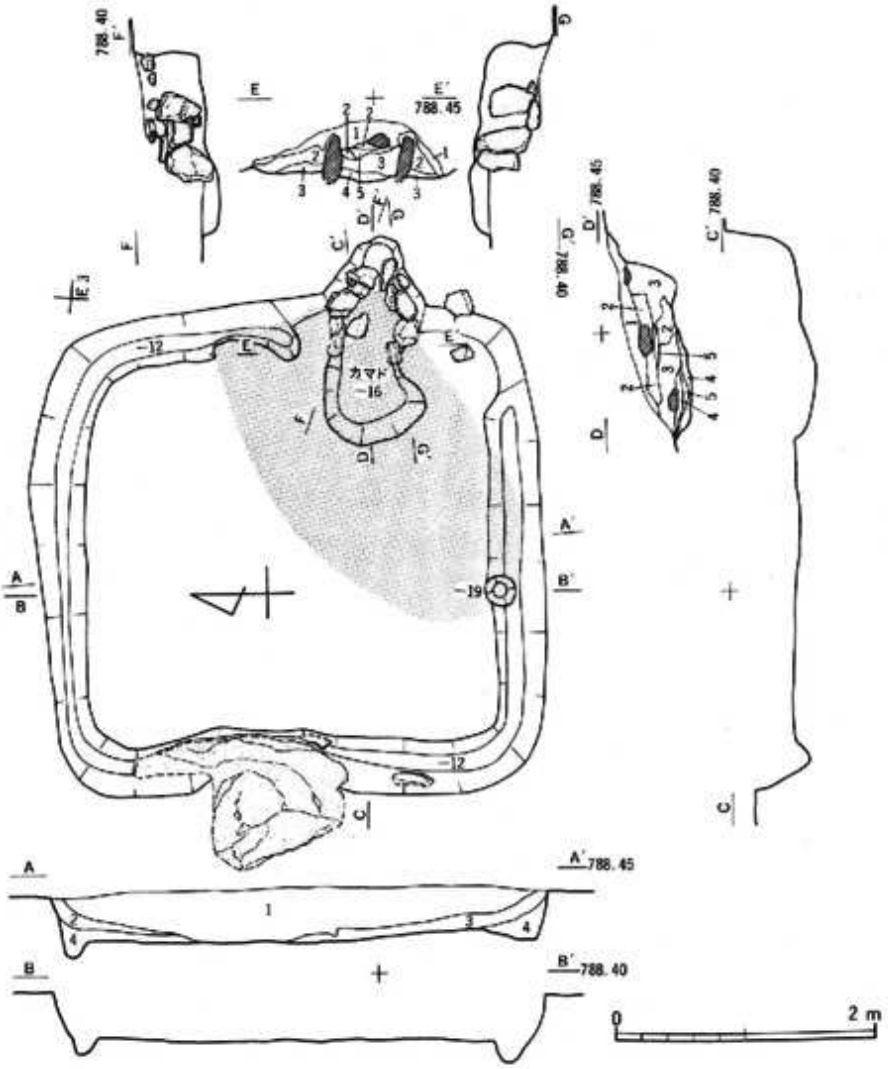
土層一焼土、ローム粒子が主体をなす粘性の強い土質で、カマドの構築粘土。4層　茶褐色土層一袖石の土台をなしているため、カマド部分の基盤と思われる、5層　炭化物層。6層　焼土層一鉄分が顕著である。7層　地山（ローム面）が焼成を受けて焼土化した部分。

遺物（第23図、図版6）　　1～5は甲斐型坏であり、1、2は10世紀第1四半期に、3～5は9世紀第4四半紀に相当すると思われるが、両者が同時に使われたのか、或いはどちらかが混入品なのか不明である。6は内面の磨き良好な信州系の坏、7は甲斐型皿である。8～12は内面黒色処理された坏・皿である。この中で8の外面には線刻で文字（上部が破損しているため不明）、9の底部外面には墨書文字「西」、10の外面には墨書文字「里久」（里人の可能性は弱い）、12の外面に墨書文字「廣」（人名かと思われる）が書かれており、墨書文字を多くもつ住居址である。とりわけ墨書土器が全て信州系であることが興味深い。13は信州系の小型甕。14の小型甕は胎土、器壁の厚さから北巨摩地方産の製品かもしれない。15、16は内外面刷毛目整形された甕である。17はコの字形に曲がった鉄製品で、何かを挟んで固定するような機能が考えられる。以上の他、自然石（安山岩）を利用した不定形の砥石がある。

10号住居址

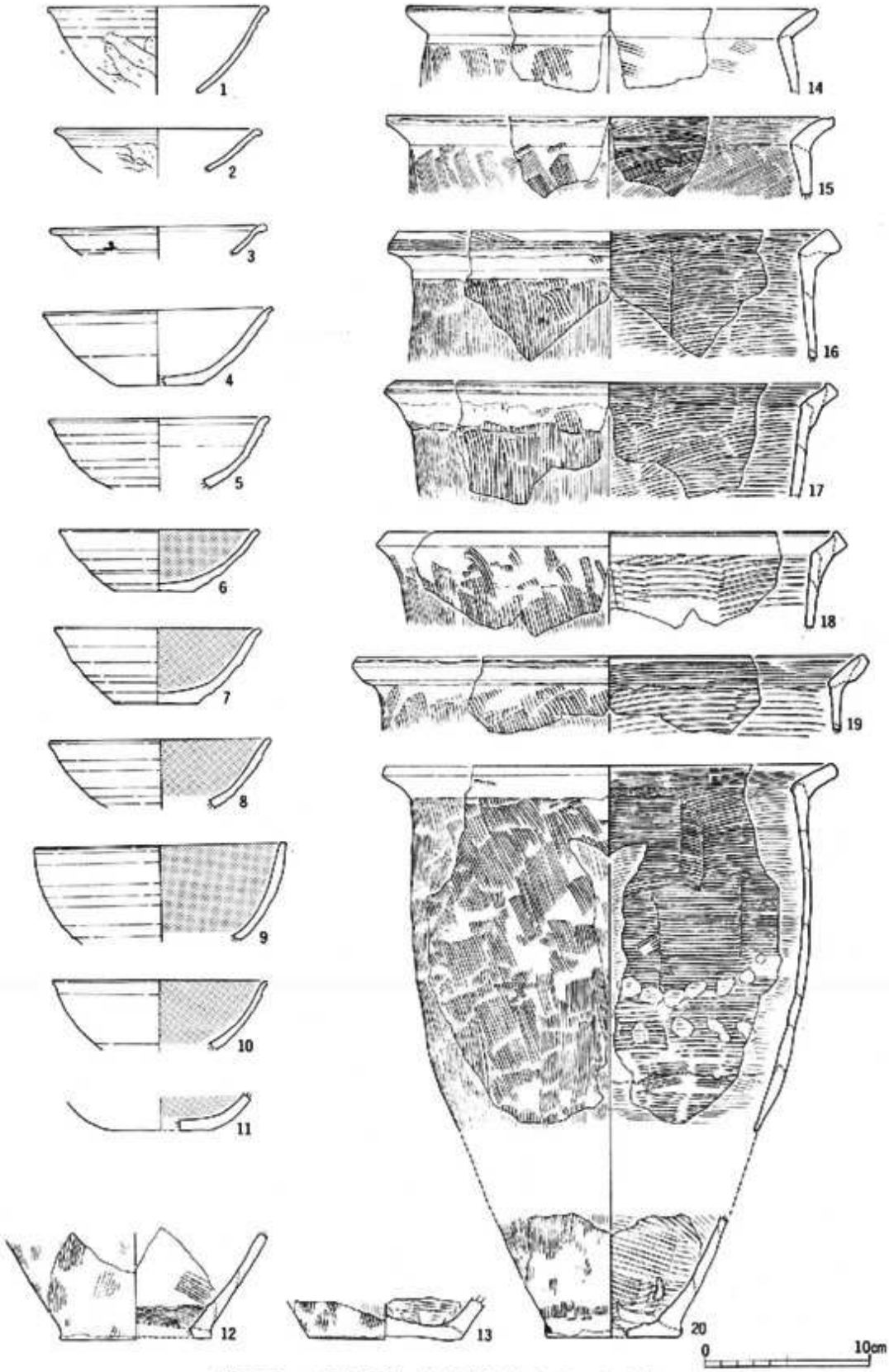
遺構（第24図、図版7）　　E2グリッドに位置する、東カマドをもつ隅丸方形の竪穴住居址である。住居址の遺存状態は極めて良好で、カマド燃焼部分の石組みが原位置を保っていた。主軸方向はE－6°－N、東西3.8m×南北3.8mの大きさである。覆土の層序は次の通り。1層　黒褐色土層一小礫を多く含む荒い土質で遺物、炭化物を包含する。2層　黒色土層。3層　茶褐色土層一焼土粒子、ローム粒子が非常に多く、しまり、粘性あり。住居址の東南部～カマド付近に広がっている。4層　黒褐色土層。床面はローム中に掘り込まれ、堅くしまっている。周溝は巾40cm、深さ12cmを測り、カマド付近を除いてほぼ全周する。ピットは周溝に接して1つ検出された。カマドは石組み粘土貼りで、天井石と支脚石を除いてほぼ完全に遺存していた。カマドの焚き口部分は9号住居址と同様に巾80cm、深さ16cm平らに掘り込んで作られており、巾35cmの燃焼部分、巾16cmで確認面からの深さ51cmの煙道部分を経てほぼ垂直に立ち上がる構造で、石組み全体の長軸は70cmを測る。袖石は縦長の平石を両側に3枚づつ立て、天井石を平らに固定するための小さな詰め石が袖石上に数個載っていた。カマドの層序は次の通り。1層　茶褐色土層一住居址覆土の3層と同一。2層　黄褐色土層--カマドの構築粘土で、ねばり、しまりが強い。3層　茶褐色土層一ローム粒子、遺物を多く包含する。4層　焼土層。5層　黒色土層一炭化物と灰の堆積土層。焚き口部分に相当する。

遺物（第25・26図、図版7）　　1～3は口縁部が玉縁化した甲斐型坏の小片である。3には外面に墨書があるが、途中で欠損しているため判読できない。4～11は信州系坏であり、うち6～11は内面黒色処理されている。甲斐型に比べ圧倒的に信州系の坏が多いのが興味深い。12～20は内外面刷毛目整形された甕である。口縁部が肥厚し、その端部が刷毛目整形されたものが多い。21はロクロ整形小型甕である。22、23は灰釉陶器で、22は大原2号窯式の小型皿、

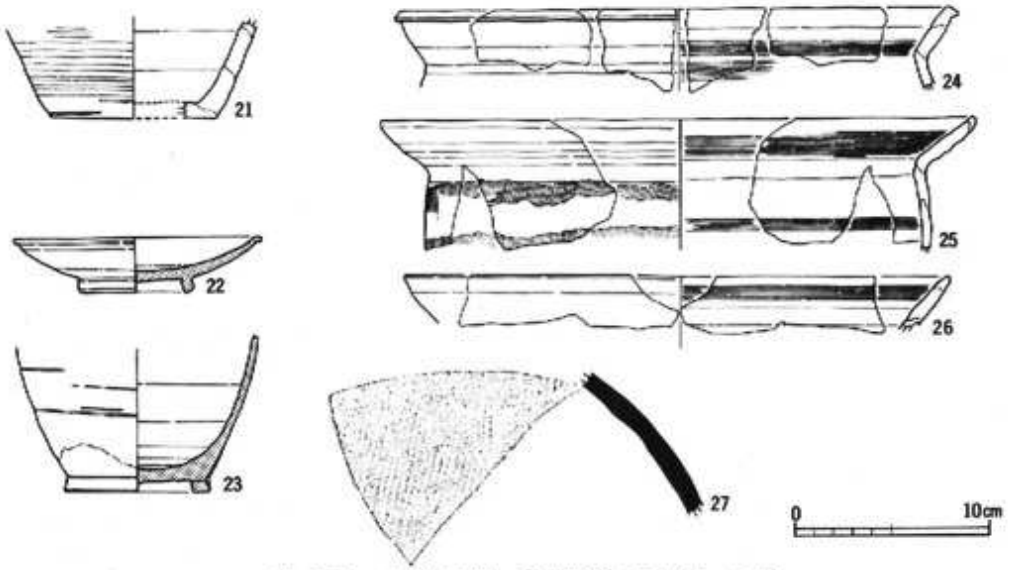


第24図　10号住居址（1／60）

23は長頸壺の底部付近であろうか。24～26は4号住居址の2と同じタイプで、外面胴部は縦方向の細かい刷毛目整形、内面はロクロによる刷毛目整形の甕の口縁部である。27は外面が叩き目整形、内面が刷毛目整形された須恵器大甕胴部片である。以上本住居址は10世紀第3四半紀の所産であろう。図示した他に、床面上10 cmの位置に長さ9 cm、厚さ4 cmの黒燿石の石核状石塊が1点ある。



第25図　10号住居址 出土遺物(1)(1／4)



第26図　10号住居址 出土遺物（2）（1／4）

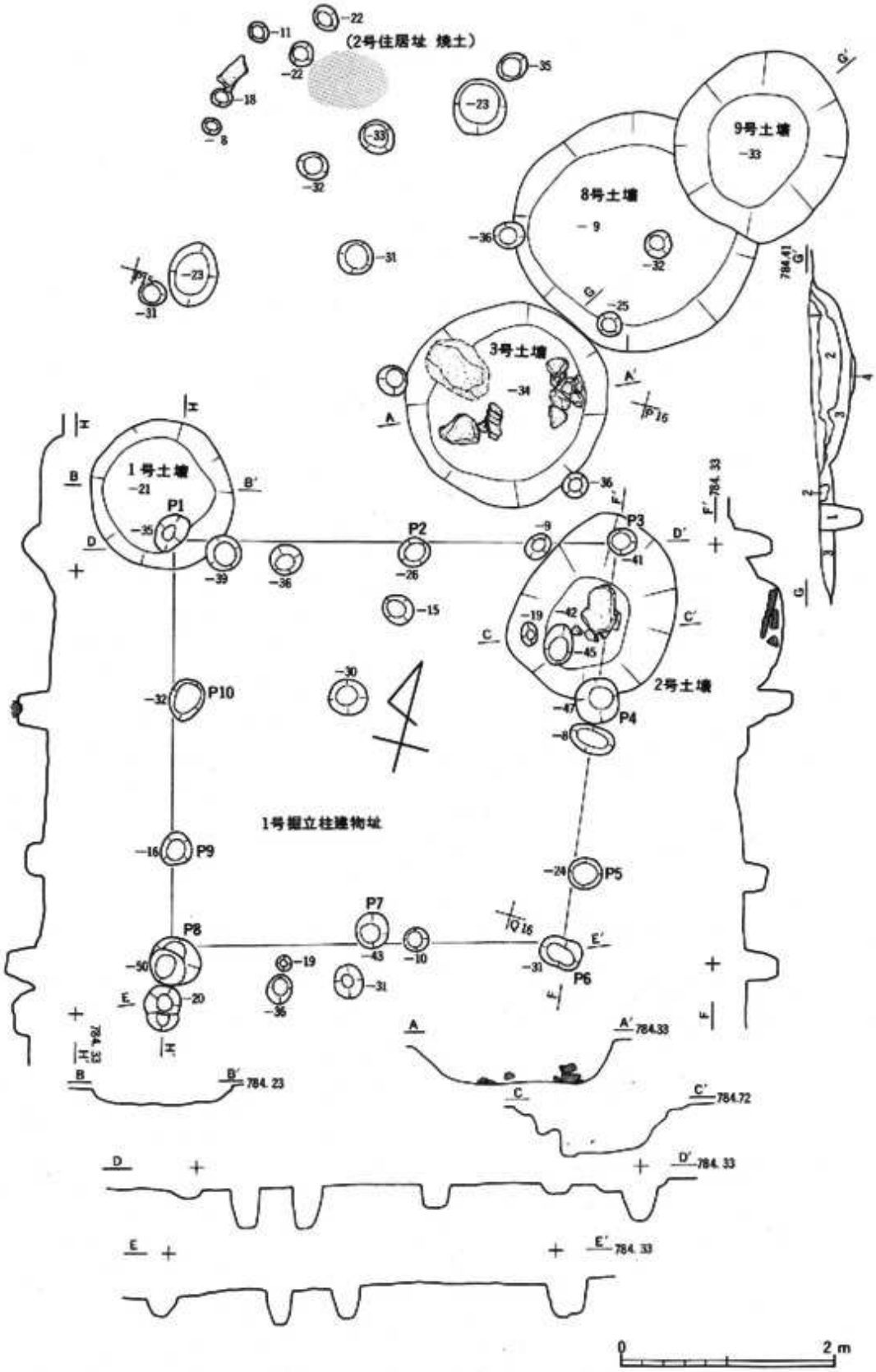
3　掘立柱建物址（1～6）

1号掘立柱建物址

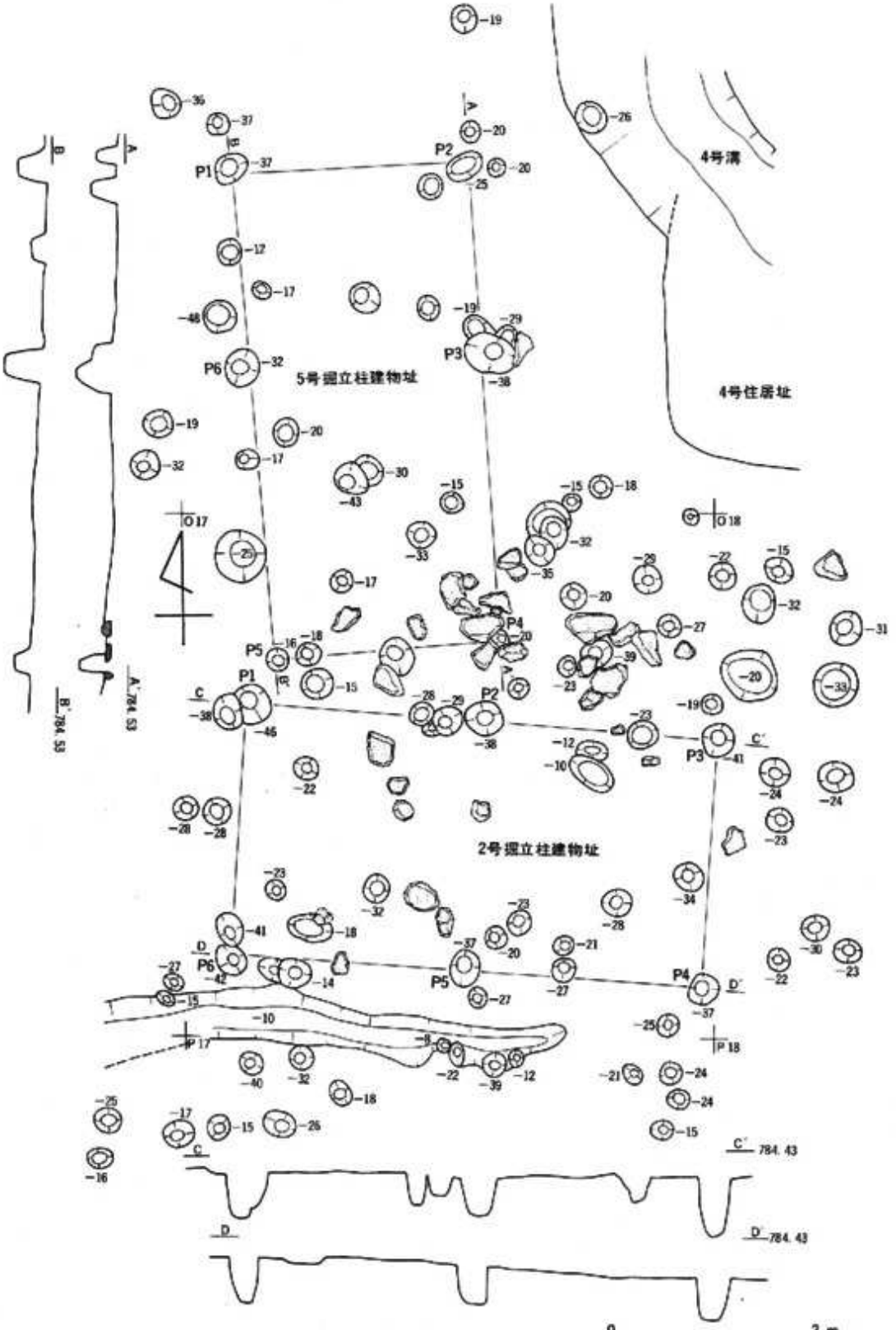
遺構（第27図、図版8－1）　P・Q15・16グリッドに位置する。2間×3間の建物址で、主軸方向はN－14°－Wを示し、東西4.2m×南北4.2mを測る。ピットは15個以上検出されたが、本址に伴う柱穴はP1～P10の10本であろう。その間隔はP1－P2間2.3m、P2－P3間1.9m、P3－P4間1.9m、P4－P5間1.6m、P5－P6間0.8m、P6－P7間1.8m、P7－P8間1.9m、P8－P9間1.1m、P9－P10間1.4m、P10－P1間1.6mと一定しておらず、またピットの深さも定まっていない。P1とP3、P4は土壙と重複しているが、その新旧関係は不明である。出土遺物はないため時期決定は難しいが、柱穴規模等から中・近世の所産であろうか。

2号掘立柱建物址

遺構（第28図、図版8－2）　O17グリッドのピット群中に確認された2間×1間の建物址である。主軸方向はE－6°－Sを示し、東西4.5m×南北2.4mを測る。柱穴P1～P6のうち、P1とP6に立て替えによるピットの重複がみられる。柱穴間の間隔はP1－P2間2.2m、P2－P3間2.2m、P3－P4間2.4m、P4－P5間2.2m、P5－P6間2.2m、P6－P1間2.4mであり、間隔は一定している。また柱穴は直径25～30cm、深さ37～46cmとほぼ一定しており、安定した柱穴構造である。この建物址の周辺にはこの他にも直線的に並ぶピットが多数あり、本址に附随した廂、或いは塀等の存在が想定される。また本址南側には巾30～50cm、深さ10cm程の浅い溝があるが、この溝の方向が本址の主軸方向とほぼ一致しており、雨落ち溝等の施設であった可能性がある。柱穴中からは遺物の出土はないが、P2とP5内には炭化物が多く含まれていた。ピット群の確認段階で、付近から中世の土鍋片や北宋銭が出土している



第27図　2号住居址 焼土、1号掘立柱建物址、1～3・8・9号土壙（1／60）

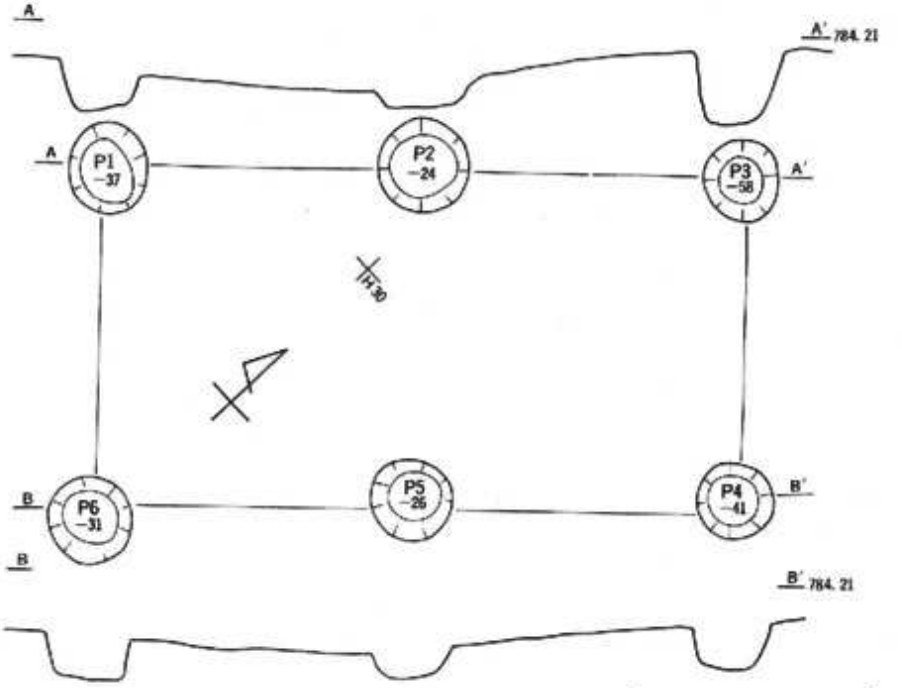


第28図　2・5号掘立柱建物址（1／60）

ので、中・近世の所産と思われる。

3号掘立柱建物址

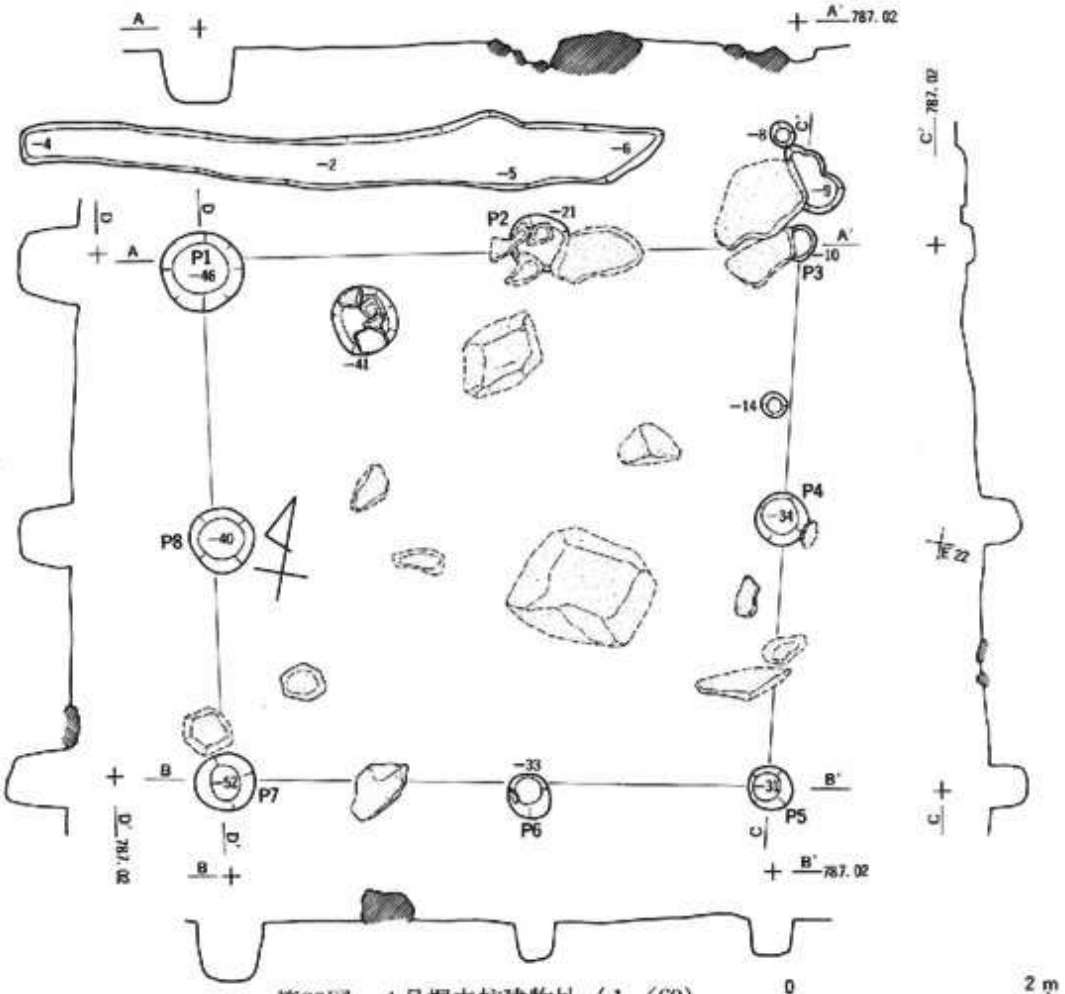
遺構（第29図、図版8－3）　G・H29・30グリッドに位置する。2間×1間の建物址で、主軸方向はE—45°—Nを示し、5m×2.5mをはかる。埋没谷の黒色土を全面的に剥いだところ検出されたもので、その覆土中には埋没谷の黒色土と共に黒色土上層に数多く包含されていた縄文土器片が混入していたことから、本址の掘り込み面は黒色土上層以上であろう。柱穴P1～P6は直径60～70cmと一定しているうえ柱穴底面のレベルもほぼ一致している。また柱穴間隔は全て2.5mである。柱穴覆土中からは縄文土器以外に出土遺物はなく時期決定の資料を欠くが、柱穴の規模から平安時代の所産と考えられ、本址北側3m にある9世紀第4四半期の5号住居址との関係が想像される。なお柱穴のセクションに柱痕は観察できなかった。



第29図　3号掘立柱建物址（1／60）

4号掘立柱建物址

遺構（第30図、図版8－4）　D・E20・21グリッドに位置する。2間×2間の建物址で、主軸方向はE—10°—Nを示し、東西 4.1～4.6m ×南北4～4.3mを測る。柱穴P1～P8は、礫の集中部に位置するP2、P3を除き安定している。柱穴の間隔は、P1—P2間2.6m、P2—P3間1.9m、P3—P4間2.1m、P4—P5間2.1m、P5—P6間 1.9m、P6—P7間2.3m、P7—P8間1.9m、P8—P1間2.1mである。柱穴内には黒褐色土が堆積していたが、遺物の出土はなく柱痕の確認もできなかった。本址北側30cmのところに、本址とほぼ同じ主軸方向で長さ5m、巾30～50cm、深さ2～6cmの浅い溝があり、覆土は砂層で遺物は出土していないものの、本址に伴う施設であると考えたい。雨落ち溝と考えれば、建物の軒先が溝上にあっ



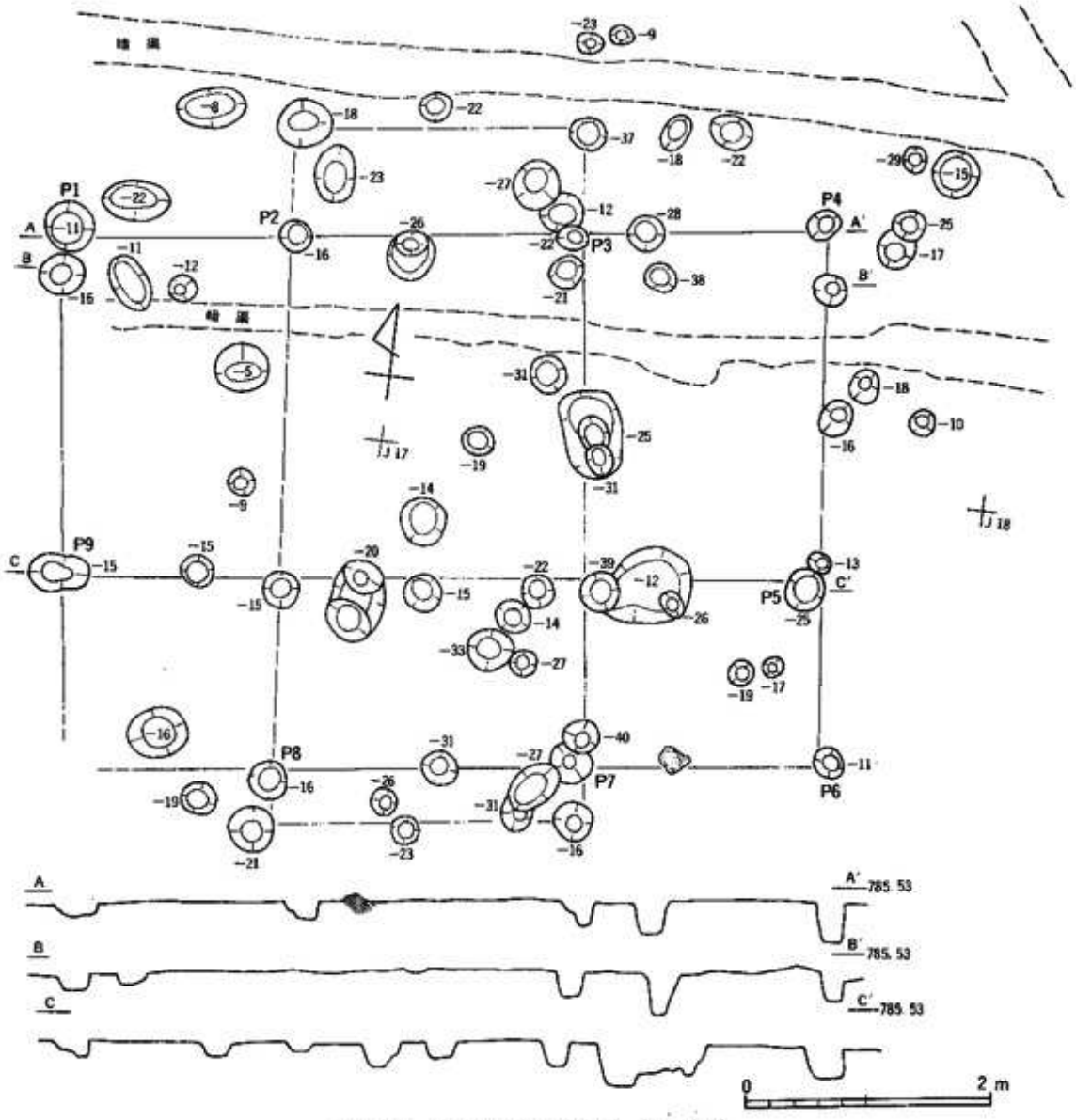
第30図　4号掘立柱建物址（1／60）

たことになるが、建築学上どんなものであろうか。さて本址からは遺物の出土がなく時期決定ができない。しかし本址の東5m には10世紀第3四半紀の9号住居址があり、主軸方向が本址とほぼ同じため、本址は9号住居址と関連する建物址と考えたい。このように竪穴住居址と掘立柱建物址がセットで検出される例は多い。

5号掘立柱建物址

遺構（第28図、図版8－2）　N・O17グリッドに位置する。1間×2間の建物址で、主軸方向はN－4°－Wを示し、東西2m×南北4.6mを測る。2号掘立柱建物址が検出されたピット群中北側30cmにあり、東西の4号溝、3号溝の間に位置する。2列に並ぶピットをその規模、間隔等から検討して建物址とみなしたわけだが、その上部に何らかの施設があったことは確かにしろ、建物址と断定するのには若干の疑問が残る。また東西の溝に切られていることを考えれば、1間×2間の規模が本来のものかどうか不明である。ピットは11個ほど検出されたが、柱穴はP1～P6の6本であろう。柱穴の規模は、東西の2つをそれぞれみればほぼ同じであるが、全体としては一定していない。その間隔はP1－P2間2.1m、P2－P3間1.8m、P3－P4間2.8m、P4－P5間2m、P5－P6間2.8m、P6－P1間1.8m、である。柱穴中から遺

物は出土していないが、遺構検出面からは古銭、陶器片をはじめとして中・近世遺物が出土していることと、ピットの規模等から考えると、中・近世の所産と思われる。なお、本址の周辺には直線的に並ぶピットがほかにもあるため、本址の規模そのものの検討の余地はあるといえよう。



第31図　6号掘立柱建物址（1／60）

6号掘立柱建物址

遺構（第31図、図版5）　I・J16・17グリッドに位置する。3間×2間の建物址で、主軸方向はE—5°—Nを示し、東西6.3m×南北4.5mを測る。本址を中心にピット群が形成されているため、本址推定ライン上には20個余りのピットが並ぶが、そのうち柱穴はP1～P11であろう。また本址の北側と南側には1間分の張り出しが想定できそうである。柱穴の間隔は

P1—P2間1.8m、P2—P3間2.2m、P3—P4間2m、P4—P5間3m、P5—P6間1.5m、P6—P7間2m、P7—P8間2.4m、P9—P1間2.9mを測る。柱穴中からの出土遺物はないが、P7内には炭化物が多く含まれていた。なお本址付近のピットの中で、先端を鉈状工具で尖らせた長さ16～27cm、直径4～7.5cmの丸木が直立していたものが3例あった。これらは建物の上屋を支えるための柱とするには余りにも細く、先端の加工も不自然であるため水田造成時に使われた杭の一種であるかもしれず、本址を含めたピット群の性格づけに大きく関わるものである。本址の確認面からは常滑甕片、砥石等が出土しており、ピットの形状と合わせて考えれば中・近世の所産といえよう。

4　土　　壙（1～16）

1号土壙

遺構（第27図、図版8—1）　P15グリッドに位置する。1.3m×1.4mの円形を呈し、深さ20cmを測る。覆土は小礫を多く含んだ荒い黒褐色土層で、本址に伴う出土遺物はない。本址内に1号掘立柱建物址のP1が存在するが新旧関係は不明である。

2号土壙

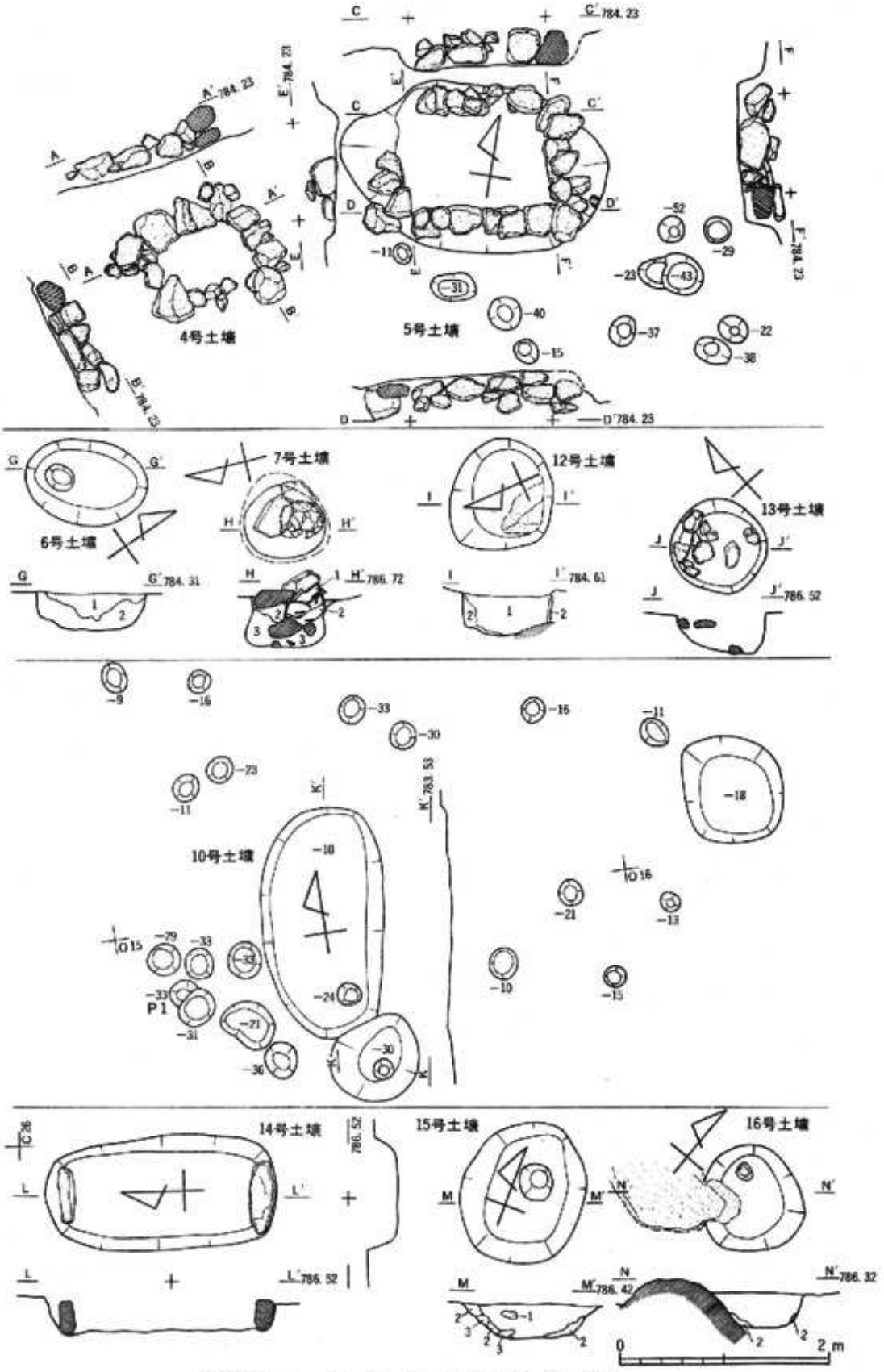
遺構（第27図、図版8—1）　P15グリッドに位置する。1.5m×1.8mの楕円形を呈し、深さ42cmを測る。1号掘立柱建物址と重複するため、建物址のP3、P4が本址と切り合っているが、その新旧関係は不明。覆土は1号土壙と同一で、同時期の所産であろう。土壙底部には30cm×50cmの礫をはじめとする集石がみられる。本址は土壙墓的なものであろうか。出土遺物はなく時期は不明。

3号土壙

遺構（第27図）　O・P15グリッドに位置し、8号土壙と接する。また2号土壙は僅か50cm南である。径1.8cmの円形を呈し、深さ34cmを測る。1、2号土壙と覆土は同一。底面には2号土壙と同じく集石がみられる。1、2号土壙と同じ性格のものであろう。出土遺物はない。

4号土壙

遺構（第32図、図版9—1）　Q16グリッド、3号溝中に位置する方形石組土壙である。本址は3号溝によって南西側の積石を破壊されたような形跡があり、また掘り方面もほぼ消滅しているため、3号溝より時期的に古いと思われる。一部残存する積石から推測すると、本址は1.3m×1.6mの長方形を呈し、主軸方向はE—40°—Nを示す。積石は遺存状況の良好な東面によれば、長さ20～40cm、厚さ15～30cmの自然礫を使って2段に積まれており、積石の上面から下面までは約35cmを測る。出土遺物はなく、底面に鉄分堆積も認められなかったが、水溜め、或いは肥溜め等の機能が考えられる。また類例の中には人骨を伴うものがあり、墓壙の可能性も指摘されている。(注9) 中・近世の所産であることは明らかである。



第32図　4～7・10・12～16号土壙（1／60）

5号土壙

遺構（第32図、図版9－1）　P・Q15・16グリッドに位置する方形石組土壙で、4号土壙の僅か1m東で検出された。主軸方向はE－10°－Nを示す。東西2.1m×南北1.4mをはかり4号土壙同様小型のタイプである。積石は北側と西側の一部が崩落していたが、全体的に遺存状況は良好である。2段の積石で、下段には長さ30～40cm、巾20cmほどの礫を並べ、上段には15～20cmの小形の礫をのせている。但し、本址の覆土中には多量の礫が充満していたため、或いは3段積みだったのかもしれない。積石の上面から下面までは約35cmをはかる。覆土は暗茶褐色土層1層のみである。出土遺物はなく、鉄分堆積も認められなかった。本址周辺にはピットが10個余りあるが、本址の上屋構造に関わるものか否かは不明。

6号土壙

遺構（第32図）　F・G31グリッドに位置する。1.2m×0.8mの卵形を呈し、深さ34cmを測る。主軸方向はN－40°－E。覆土は次の通り。1層　黄褐色土層－ローム粒子多い。2層　茶褐色土層。底面の16cm上から石鏃が1点出土したほか、縄文土器の小破片が出土している。

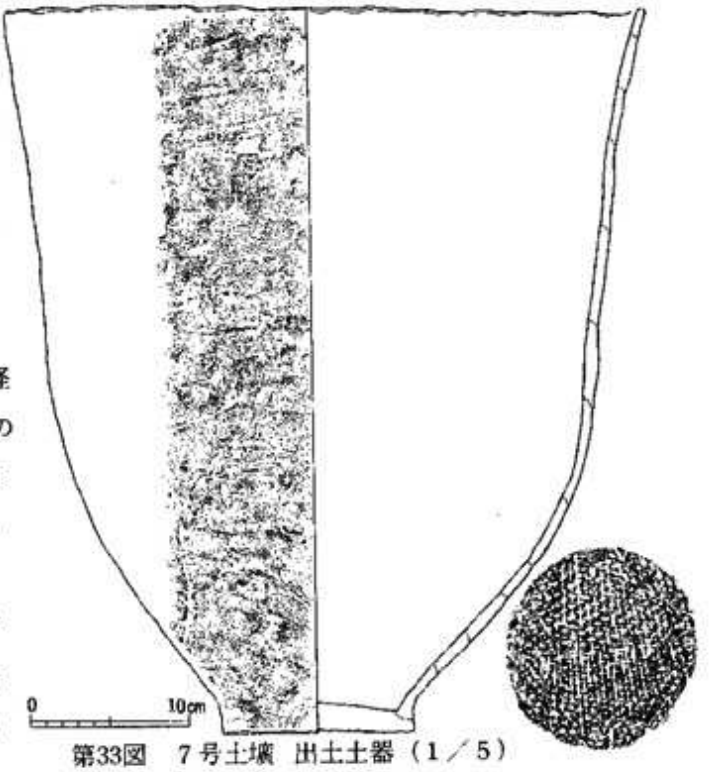
遺物（第34図）　5は本址出土の黒燿石製の石鏃である。

7号土壙

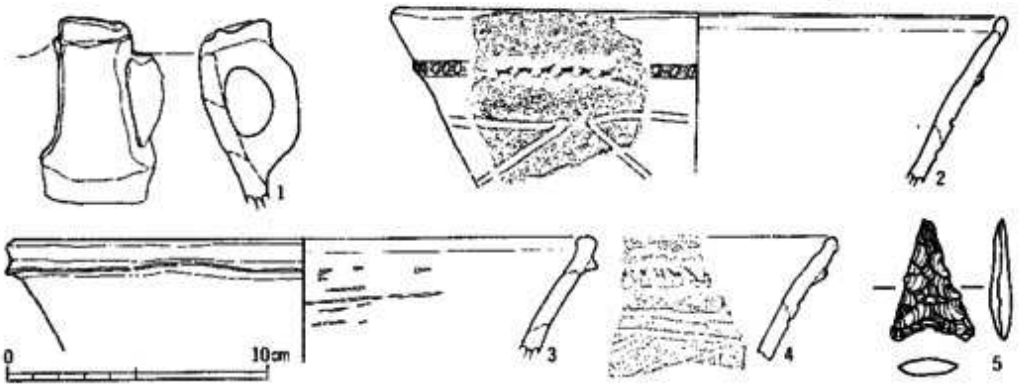
遺構（第32図、図版9－4・5）　E22グリッドに位置する。配石を伴った屋外埋甕が逆位に埋納された土壙で、70cm×50cmのほぼ円形の平面プランを示す。そして底面付近では袋状に広がり、内部の最大径は90cmを測る。また深さは50cm。土壙上部では長さ35cm～40cm、巾25cmほどの礫2個による配石で埋甕底部が押し潰されており、それを取り上げると、土壙中位から埋甕の口縁部約1／2の破片が逆位で出土した。また更にその下には長さ30cm、巾20cmほどの礫が埋没していた。覆土の層序は次の通り。1層　茶褐色土層－埋甕片を多量に含んだ層で、しまりが弱い。2層　茶褐色土層－しまり、粘性がある。3層　黒色土層。地山はロームである。

遺物（第33・34図、図版9）

第33図は埋甕で、口径40.5cm、底径12.2m、高さ45.8cmの大型で無文の深鉢形土器である。内外面ともに雑なヘラ磨きによる整形が施されている。底部には原体巾2～2.5mm、2本越え1本潜り1本送りの網代痕がみられる。縄文時代後期、堀ノ内式土器であろう。第34図1は土壙下部



第33図　7号土壙　出土土器（1／5）



第34図　6・7・16号土壙　出土遺物(1～4は1／3、5は1／1)
(1は7号土壙、2～4は16号土壙、5は6号土壙)

の礫直下から出土した注口土器口縁部で、やはり堀ノ内式土器である。縄文時代後期の埋甕資料は県内ではまだまだ少なく、本例は貴重な資料といえよう。(注10)

8号土壙

遺構（第27図）　O15グリッドに位置する。3号土壙と接し、9号土壙と切り合っている。径2.3mの円形を呈し、深さ9cmを測る。覆土は9号土壙の3層と同質であり、埋没時期が9号土壙とほぼ同時期であることを示す。またセクションによれば中央にみられるピットは本址よりも新しいことがわかる。出土遺物はない。

9号土壙

遺構（第27図）　O15・16グリッドに位置し、8号土壙と切り合う。径1.6mの円形を呈し、深さは33cmを測る。覆土は次の通り。1層　暗茶褐色土層―1、2、3号土壙と同一層。2層　暗茶褐色砂層―ローム粒子が多い。3層　暗褐色土層―粒子細かく粘性が強い。4層　暗茶褐色砂礫層―小礫を多量に含む砂質層。この層序から、8、9号土壙は、1、2、3号土壙よりも古いことがわかる。但し、多少の時期差はあるにしても1、2、3、8、9号土壙はほぼ同じ頃に構築された土壙群であることにかわりはない。本址に伴う遺物はない。

10号土壙

遺構（第32図）　N・O15グリッドに位置する。2.2m×1.2mの楕円形を呈し、深さは24cmを測る。主軸方向はN―9°―Eを示す。覆土は小礫を少量含む黒褐色土層である。本址に伴う遺物はない。

11号土壙

遺構（第7図、図版10―1）　E・F33グリッド、7号住居址の僅か40cm東に位置する集石土壙である。径1.3m、深さ10～15cmを測る円形土壙の覆土中に、3～28cm大の多量の礫が包含されており、焼成を受けた礫が数点みられた。覆土は次の通り。1層　黒褐色土層。2層　茶褐色土層―ローム粒子を多く含む壁体崩土。土壙底面には一部焼成面がみられる。なお覆土中には遺物、炭化物はみられなかった。本址は縄文時代の屋外集石炉と思われる。7号住居址

には余りにも近すぎるため、8号住居址に伴う施設であろうか。

12号土壙

遺構（第32図）　F・G28グリッド、埋没谷の傾斜面に検出された径1m の円形土壙で、深さ40 cmを測る。覆土は次の通り。1層　黒褐色土層―黄色粒子、白色粒子、スコリアを多く含み、埋没谷の覆土と同質である。2層　黄褐色土層―ローム粒子が多い。遺物の出土はなく、時期不明。

13号土壙

遺構（第32図、図版10―2）　C25グリッドに位置する。径90 cm、深さ40 cmを測り、覆土中に10～20 cmの礫を10個余り含む円形の集石土壙である。覆土はローム粒子、ロームブロック、小礫をやや多く含む暗褐色土層である。遺物はない。

14号土壙

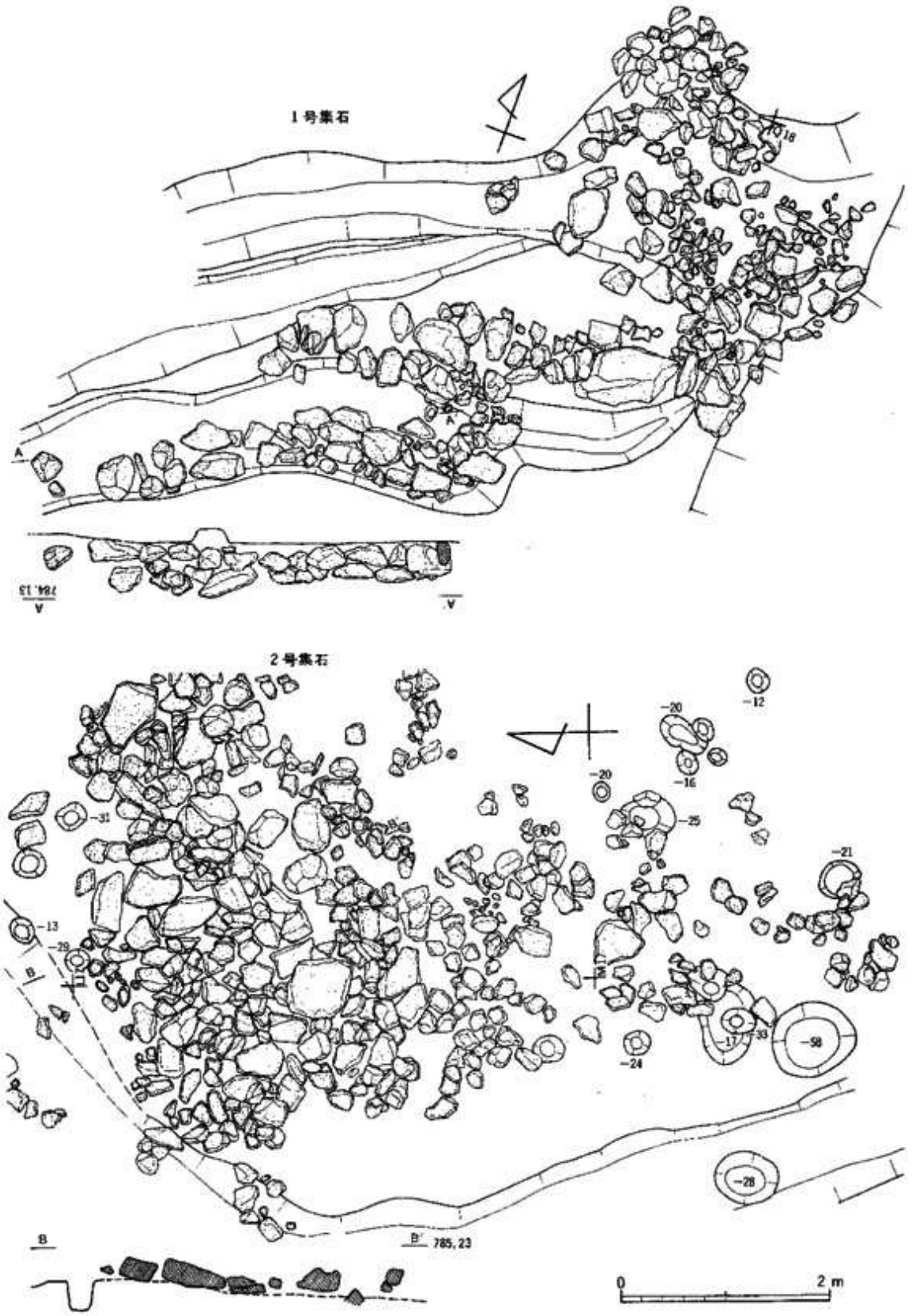
遺構（第32図、図版10―3・4）　C25グリッドに位置する。長軸2.2 m×短軸1.1 m、深さ30 cmを測り長方形を呈す土壙で、主軸方向は北を示す。土壙の南北両端には、長さ50～70 cm、巾30 cm、厚さ15～20 cmの平らな面をもつ自然礫を据えている。礫間は1.7 mを測る。覆土は白色粒子、ローム粒子を多く含む茶褐色土層である。出土遺物は全くないが、本址が縄文時代後期の石棺墓の一種であることは明白である。山梨県内では類例が全くないが、東京都青梅市の寺改戸遺跡の石棺墓群中には全く同じ形態のものが4基検出されており、加曽利B式期に伴う墓壙であることが知られている。寺改戸遺跡からは、その他に堀ノ内式土器の埋甕を納めた袋状の土壙があり、本遺跡の墓制と非常に類似している点が興味深い。

15号土壙

遺構（第32図、図版10―3）　B26グリッドに位置する。1.2 m×1.3 mの円形を呈し、深さ29 cmを測る。覆土は次の通り。1層　茶褐色土層―ロームブロック、ローム粒子がやや多い。2層　黄褐色土層―壁体の崩土。3層　ロームブロック。遺物はないが、本址の覆土は13号土壙とともに14号土壙に類似するため、縄文時代後期の所産である可能性が強い。

16号土壙

遺構（第32図、図版10―3）　C26グリッドに位置する径1m の円形土壙で、深さ35 cm を測る。覆土は次の通り。1層　黒褐色土層―スコリア、白色粒子がやや多く、炭化物が少量みられる。堀ノ内Ⅱ式土器を数片含む。2層　茶褐色土層―ローム粒子が多い。出土した土器片から、本址は堀ノ内Ⅱ式期の所産である。この7、13～16号土壙のある地区は堀ノ内式～加曽利B式期の土壙群といえるが、これらの土壙群が7、8号住居址によって構築され、両時期を通して土壙群として意識されていたことは想像に難くなく、7、14号土壙のように墓制に強くかかわる例が含まれることから墓域と考えてもよいだろうと思われる。そう考えると、縄文時代後期において聖域空間が居住空間の北側に約35 m 隔てて存在したことになり、縄文時代後期の集落構造、精神構造を探るうえで重要な資料といえよう。



第35図　1・2号集石（1／60）

遺物（第34図、図版10）　2～4は本址1層の出土品で、2、4は有刻隆帯の下に沈線文を施す深鉢形土器、3は無刻隆帯が巡るだけの深鉢形土器である。

5　集　　石（1，2）

1号集石

遺構（第35図）　O17・18グリッドを中心にして、1号溝が2号溝に接する付近から4、5号土壙にかけて広がり、位置を明確に示すことはできない。また1号溝の南側には互い違いに2列の石列状の雑な石積みがみられるが、それらも含む。礫は長さ30 cm程のものを中心に1 mもある大きなものまで数多くあり、自然堆積によるものとは思われない。2本の石列からわかるように、本址は2、3号溝の護岸的な性格をもつもので、元来は石列状に石積みがしてあったのが崩落して面的に広がったものではなかろうか。2 列の石列のうち南側のものは、長さ3.5 m、巾50 cmの規模で20 cm～40 cmの礫を中心に2段～3段に積んだものであり、主軸方向はE－4°－Nを示す。北側の石列は長さ4.5 m、巾 0.5～1 m の規模で、長さ 0.2～1 m の礫を雑に並べたもので、積石部分は少ない。集石中からは縄文時代～中・近世までの遺物が少量出土したが、本址に伴うのか、溝址に伴うのか判然としないため覆土中遺物とともに後で説明したい。本址の時期は1、2号溝と同時期であり、中・近世の所産であろう。

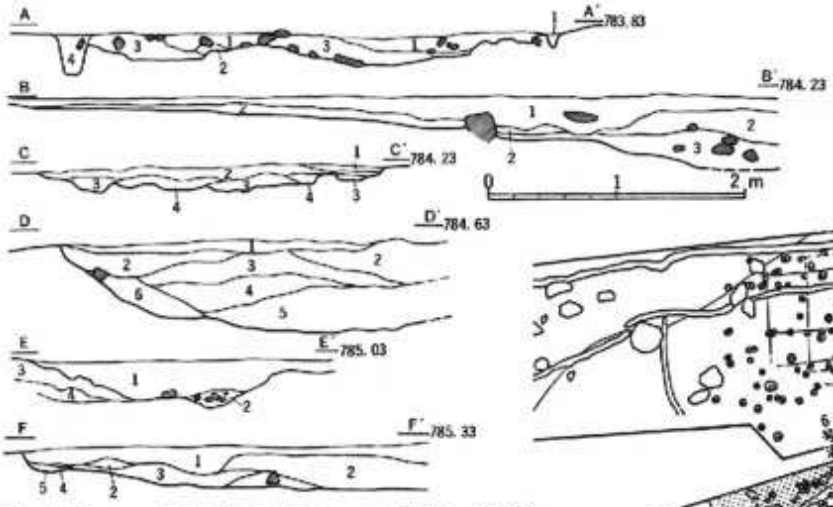
2号集石

遺構（第35図、図版10－6）　L・M16・17グリッドを中心に広がる。1号集石と同様な礫が4 m ×5 m の範囲内に密集して無雑作に置かれており、その中に石列等を見い出すことはできない。また礫の置き方には規則制は見受けられない。またそれぞれの礫の表面は様々な傾きを呈しており、この集石全体が面としての広がりを意識しているとは思えない。また集石の覆土は堅くしまることもなく、何らかの建築施設の基盤とも考えられない。ただ本址は6、7号溝中に広がらないことからやはり1号集石と同様、護岸的性格のものであろうか。そう考えると本址南側には2・5号掘立柱建物址があり、それらとの関係が予想される。本址からは土師質土器、陶器、瓦器など少量の出土品があるが、それらは遺構外出土品の同一個体が多く、本址に単独に伴出したものではないため、覆土中の遺物とともに後で説明する。出土品から本址は中・近世の所産であるといえよう。

6　溝　　址（1～6）

1号溝址

遺構（第36・37図）　Q・R16・17グリッドに位置する。東側の2号溝址から分岐して西南方向へ約10 m 行った所で3号溝址と合流して3号住居址を切って南へ向っている。溝巾は約3 m、深さ約20 cmを測る。溝内には2～3本の小溝が重複して轍状を呈す。また集石の項で触れたが、2号溝と接する付近を中心に1号集石がみられるとともに、溝址左岸に護岸用の石列



第36図　1～6号溝址セクション図（1／60）

第37図　1～6号溝址

が集石内に2本、3号住西側に1本みられる。即ち1、2号溝址に囲まれた部分（R17グリッド付近）は土留めをする必要があった重要な場所で、何らかの施設があったと考えられるが、残念ながら遺構は検出されなかった。遺物は古銭（天禧通宝～政和通宝）5枚、砥石3本他、中・近世の遺物が少量出土した。R16グリッドで観察された土層は次の通り。1層　暗茶褐色土層。2層　暗黄色土層―ローム粒子が多い。3層　茶褐色砂礫層―小礫が多く、しまり、粘性は弱い。4層　暗茶褐色土層―1層と同質。本址は3号柱居址を切っているため10世紀以降、中・近世の所産であろう。

2号溝址

遺構（第36・37図）　N～R18グリッドに位置する。本址は北から南へほぼ直線的に走っているが、両端及び東岸は農道等によって調査できなかった。長さ20m以上、巾5m以上、深さ55cmを測る。護岸用の石列はみられないが、1号集石に伴う礫の広がりがみられる。また西岸には溝に臨む形で雑なテラス状の配石がみられた。本址は2号掘立柱建物址の東側に位置し、建物址、ピット群と関連するものであると思われる。P18グリッドで観察された層序は次の通り。1層　黄褐色礫層―礫を多量に含み、鉄分堆積がみられる。砂層を伴う。2層　暗茶褐色土層。3層―茶褐色礫層―1層とほぼ同質。本址周辺からは青磁片、土鍋片等が出土しているので、中・近世の所産と考えておきたい。

3号溝址

遺構（第36・37図）　M17、N～Q16グリッドに位置する。M17グリッド付近からほぼ直線的に走り、途中N16グリッドで5号溝址と合流しながらQ16グリッドで1号溝に合流する。またQ16グリッドでは4号土壙を破壊している。本址からは天聖元宝1枚のほか馬の歯と思われる骨片が少量出土した。O16グリッドでの層序は次の通り。1層　茶褐色土層。2層　暗黄褐色土層―礫、ローム粒子が多く非常に堅くしまる。3層　茶褐色砂礫層―砂礫が多く、しまりはない。4層　茶褐色土層―小礫は少ない。本址は4号土壙より新しく位置づけられる中・近世の所産であろう。

4号溝址

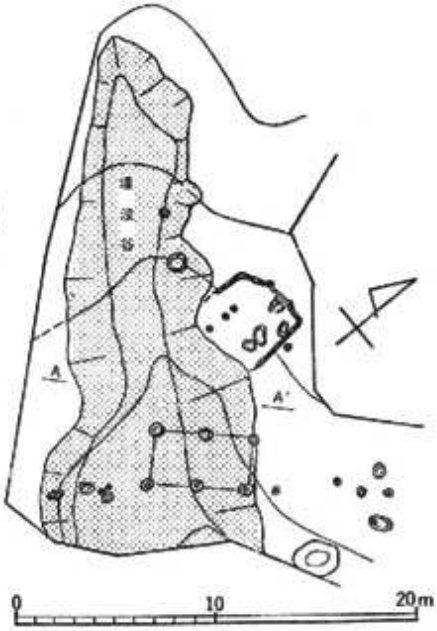
遺構（第36・37図）　M・N17、N18グリッドに位置する。MとNグリッドの境付近でほぼ直角に曲り、4号住居址を切りながら南東へ流下している。本址の左岸と両端部は農道によって調査不能であった。全長10m以上、巾2m以上、深さ70cmを測る。覆土中からは明治18年の一銭銅貨ほか近世・近代の陶磁器が少量出土しているため、ごく最近まで存続した溝址であることがわかる。N17グリッドでの層序は次の通り。1層　黄色土層―いわゆる狐土で、漏水防止のため人為的に盛り土されたもの。2層　茶褐色土層―ローム粒子がやや多い。3層　茶褐色混合土―ローム層と4層の混合土でロームブロックが多い。4層　黒褐色土層―しまり、粘性弱い。5層―茶褐色土層―2層とほぼ同じでロームブロックが混入する。6層　茶褐色土層―2層とほぼ同じ。掘り込み面はロームを主体とする岩盤層である。

5号溝址

遺構（第36・37図）　L～N16グリッドに位置する。L16グリッド付近で6号溝址と合流して南へ直進し3号溝址に合流する。全長約12m、巾1.5～3m、深さ40cmを測る。2号集石の西側に位置し、両者の間には関連性があると思われる。M16グリッドでの土層は次の通り。1層　黒褐色土層―小礫がやや多く粘性は弱い。2層　暗黄褐色土層―ローム粒子多く、しまり粘性が強い。この周辺での遺構確認面である。3層　暗褐色砂礫層―ローム粒子、砂礫、黒色粒子多量。本址は3号溝址とほぼ同時期の所産であろう。

6号溝址

遺構（第36・37図）　J～L17、L16グリッドに位置する。2号集石の北側を、東北から南西へクラン



第38図　埋　没　谷

第39図　埋没谷セクション図（1／80）

ク状に曲りながら流下しL16グリッドで5号溝址に合流する。東側が農道のため完全な調査はできなかったが、全長10m以上、巾2m以上、深さ30cmを測る。J17グリッドでの層序は次の通り。1層　黒褐色土層―小礫がやや多い。2層　茶褐色土層―ローム粒子が多く、粒子が細かい。3層　褐色砂層―小礫が多く砂層を含み、粘性は全くない。4層　黄色土（ローム）層。5層　黒褐色土層―1層とほぼ同じ。遺物はないが、3・5号溝と同時期の所産であろう。

（埋没谷）（第38・39図）

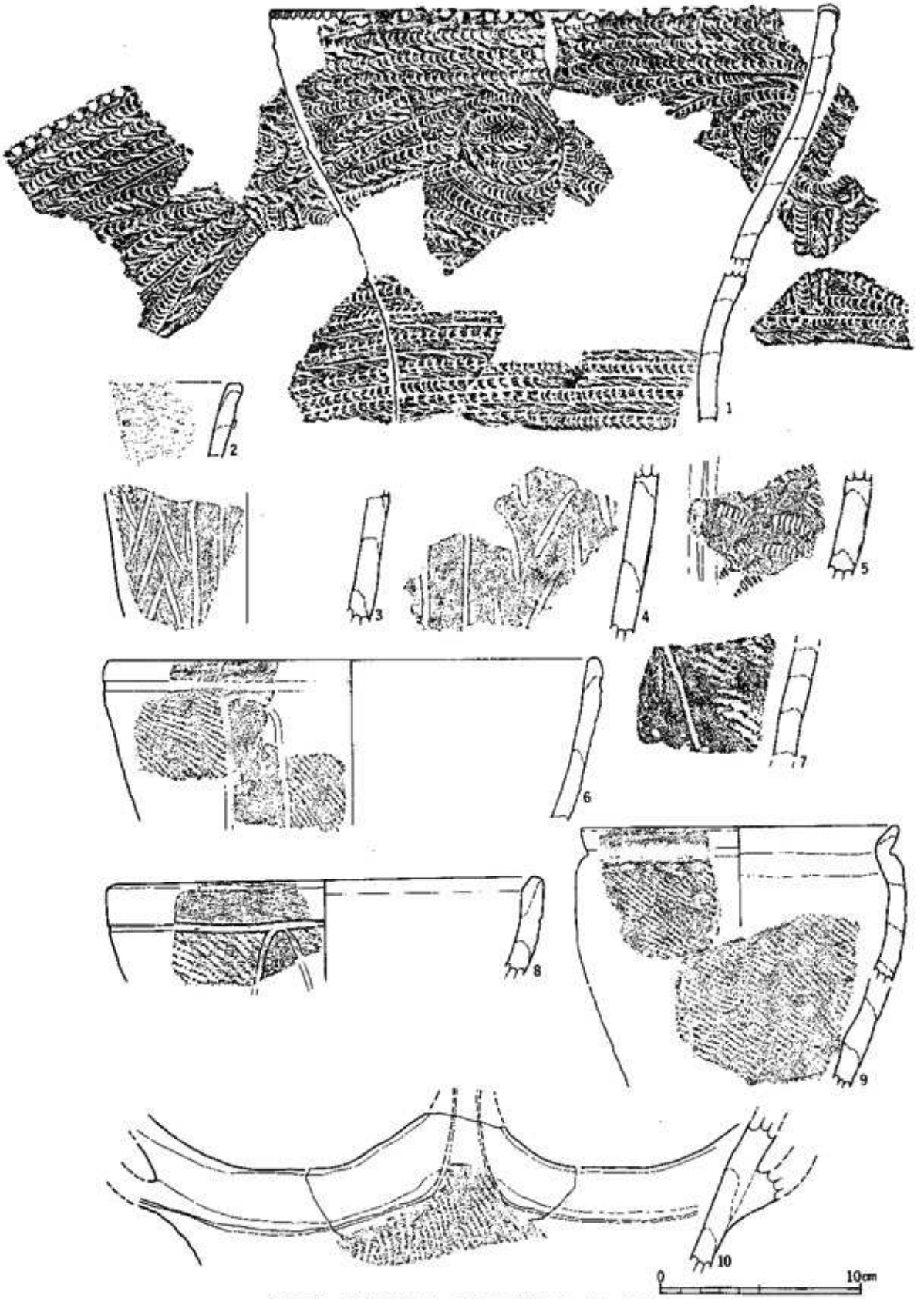
次に参考までに調査東地区、F26グリッドからH・I30グリッドにかけて南東方向に発達した埋没谷の土層を説明する。埋没谷は長さ27m以上、巾5～10m、深さ約60cmを測る。土層は次の通り。1層　暗茶褐色土層―ローム粒子、白色粒子を多く含み、遺物を包含する。2層　黒色土層―粒子が細かい。3層　黒色土層―白色・黄色粒子が多量に含まれる。4層　茶褐色土層―ローム粒子、白色粒子が多い。

7　遺構外出土遺物

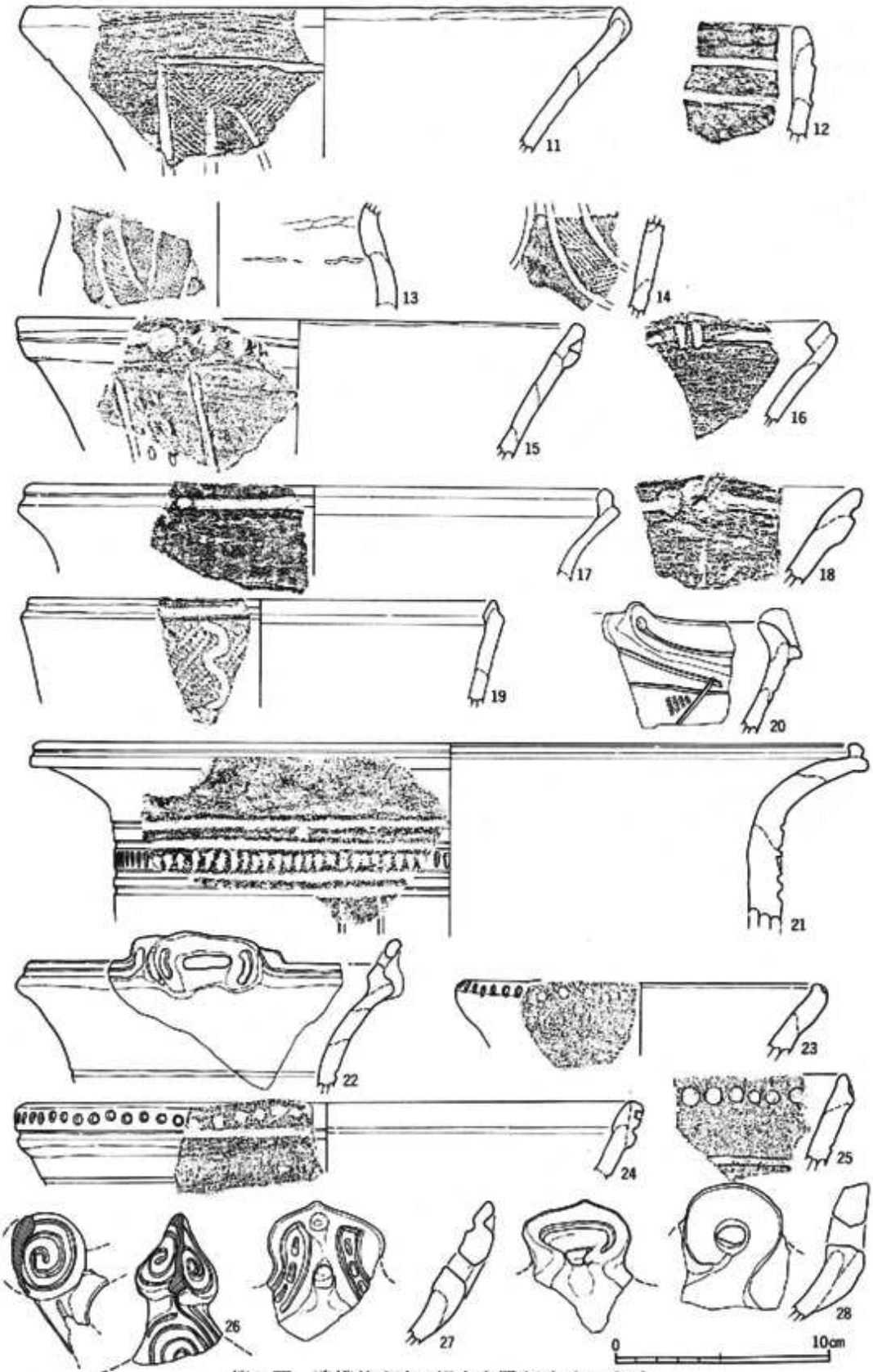
縄文土器（第40～45図、図版11）

本遺跡からは、縄文時代前期諸磯b式から後期加曽利BI式までの土器片が、東地区の埋没谷を中心に遺跡各地から出土した。1、2は前期（諸磯b・c式）、3～10は中期終末期（曽利V式、加曽利EIV式等）、11～14は後期初頭（称名寺式）、15～58は後期前葉（堀ノ内式を主とする）、59～62は後期中葉（加曽利B式）、63～68は後期の注口土器（堀ノ内、加曽利B式）、69～79は土器底部（中期末～後期中葉）、80～82は後期蓋である。以下詳述したい。

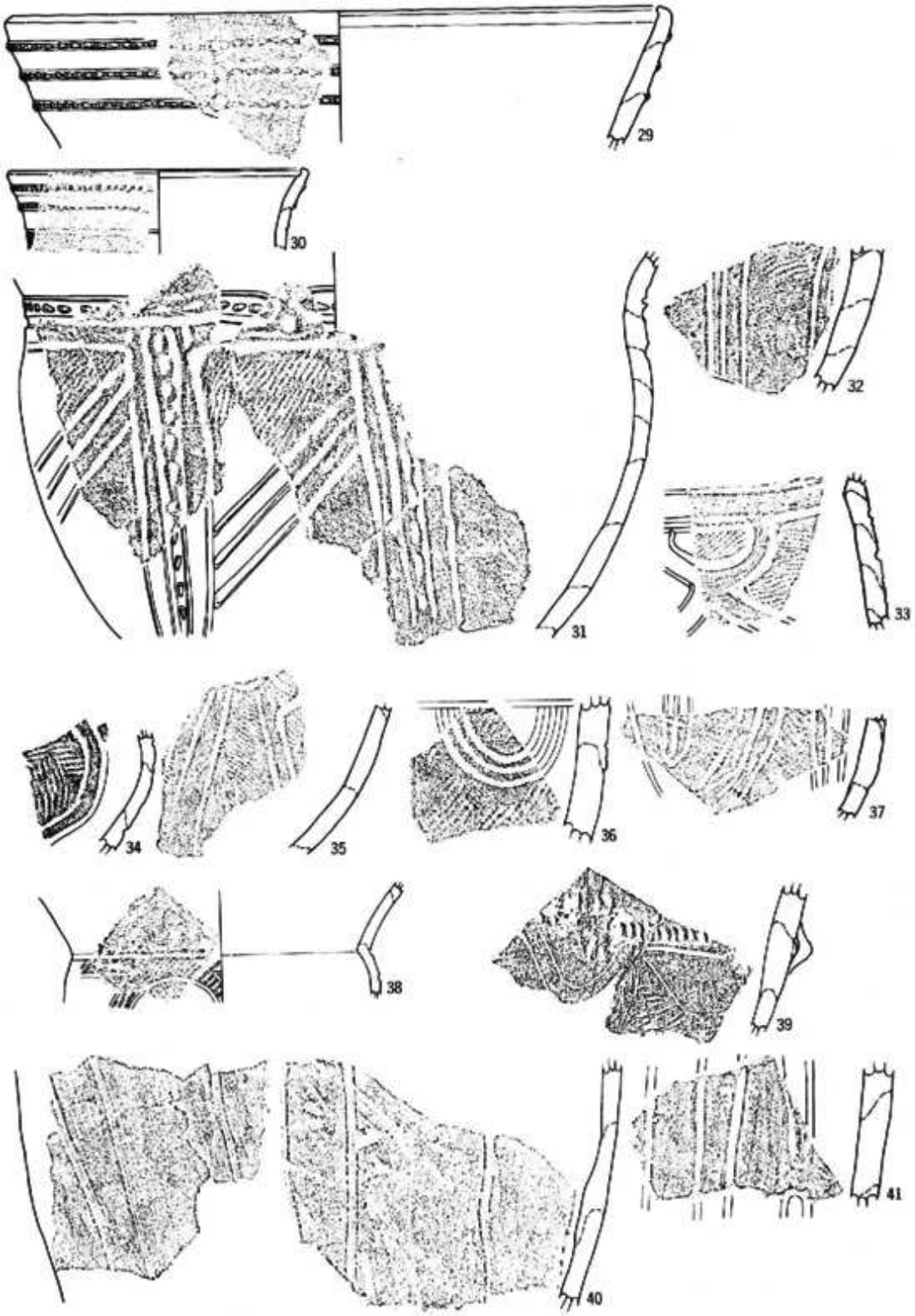
1はN14グリッドの黒色土中からまとまって出土した諸磯b式古段階の深鉢形土器である。左巻きの渦巻き文をモチーフとして、竹管文の押し引きによる連続爪形文と貼り付け隆線、或いは隆起線上に左上りの斜線を施して器表面を充填しているほか、一部には縄文がみられる。3～5は曽利V式深鉢形土器で、八の字状沈線文が施されている。9は縄文が全面に施された小形の深鉢形土器で、時期的な位置づけについては明らかではない。15～22は堀ノ内式土器で、口縁部に一条の沈線文が施された深鉢形土器である。口縁部以下は、無文、沈線文、沈線文＋縄文のタイプがある。23～25は口縁部に竹管状工具による列点文が連続する深鉢形土器である。26～28は堀ノ内式の深鉢、浅鉢の口縁部把手である。29、30は堀ノ内Ⅱ式の深鉢形土器で、口縁部に有刻隆線が複数条巡る。31～39は堀ノ内Ⅰ、Ⅱ式の深鉢、又は鉢形土器の胴部片で沈線文の間に縄文を充填する。40～43は沈線文のみが施文された深鉢形土器の胴部片である。44～48は櫛歯状工具による集合沈線文が縦方向に施文された深鉢形土器で、中でも44、45は口縁部直下に押圧文が連続した隆帯が一条巡り、その下部に沈線文を施したものである。49～58は無文土器の口縁部である。時期決定は難しいが、58の鉢形土器は器形から判断すると加曽利B式に属するであろうか。口径13cm、底径5.6cm、高さ58cmを測り、底部には原体巾2.5～3mmの2本越え1本潜り1本送りの網代痕がある。63は小形の注口土器で沈線文と列点文が施され



第40図　遺構外出土 縄文土器（1）（1／3）

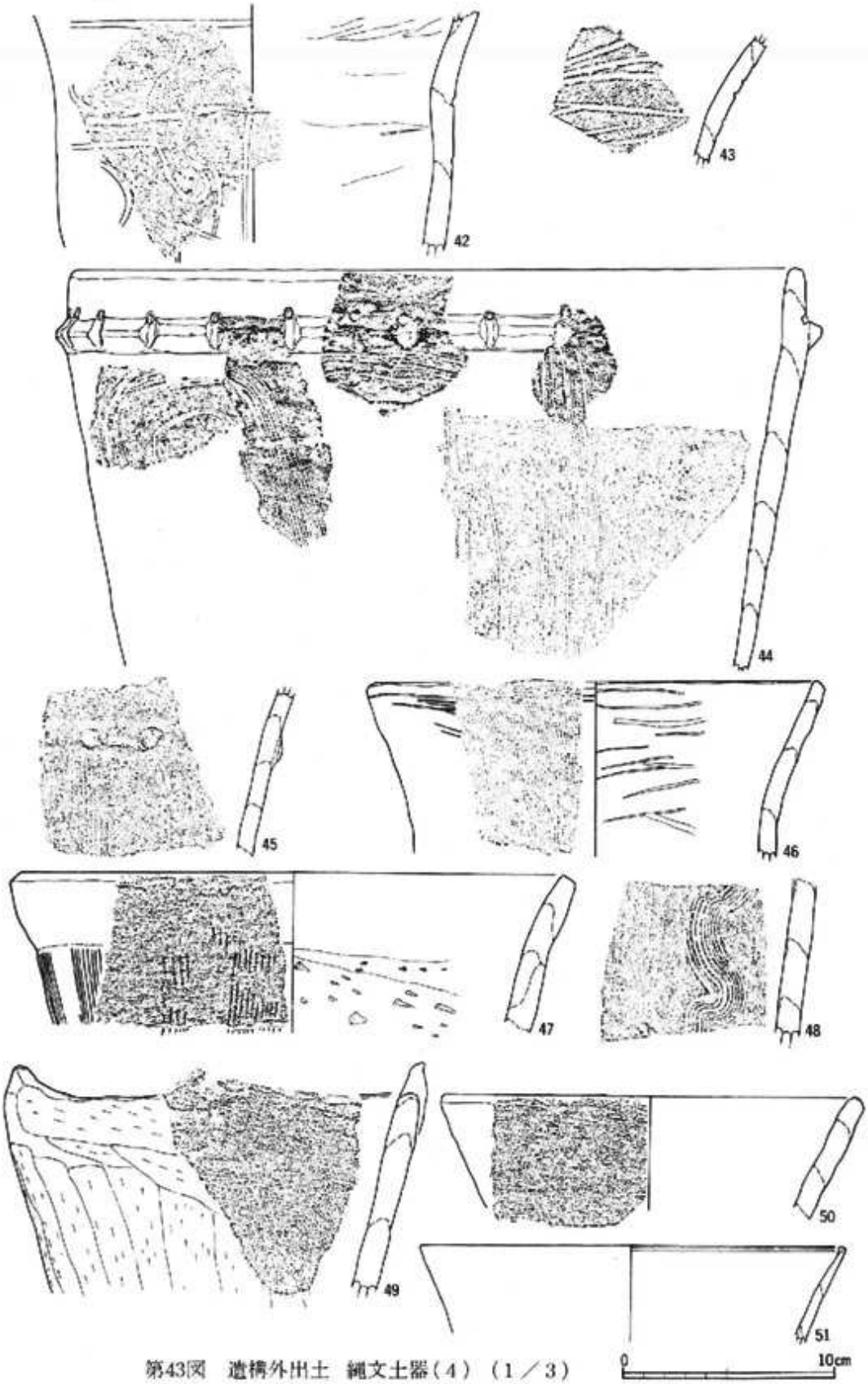


第41図　遺構外出土　縄文土器(2)(1／3)

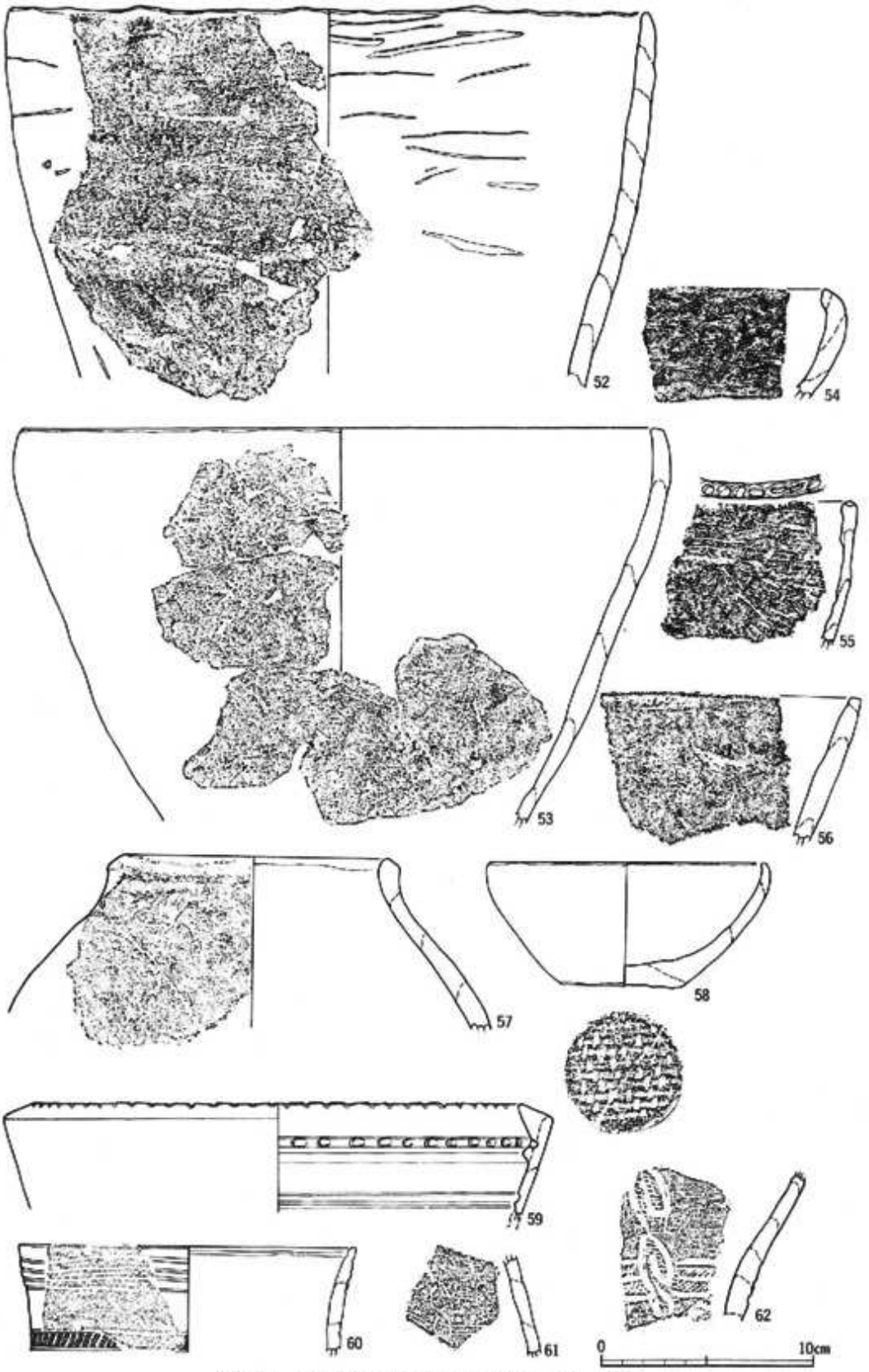


第42図　遺構外出土　縄文土器(3)(1／3)

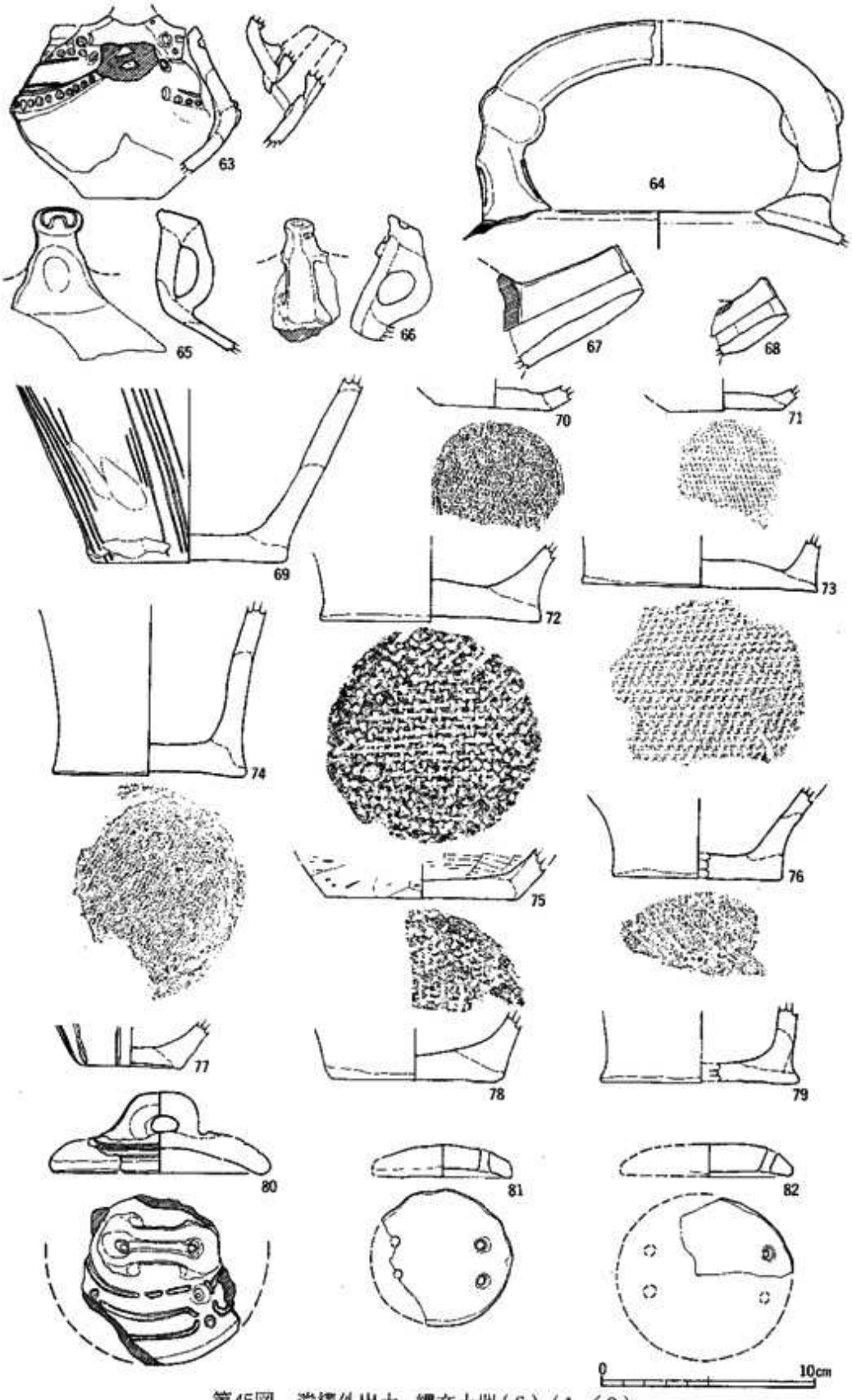
0　10cm



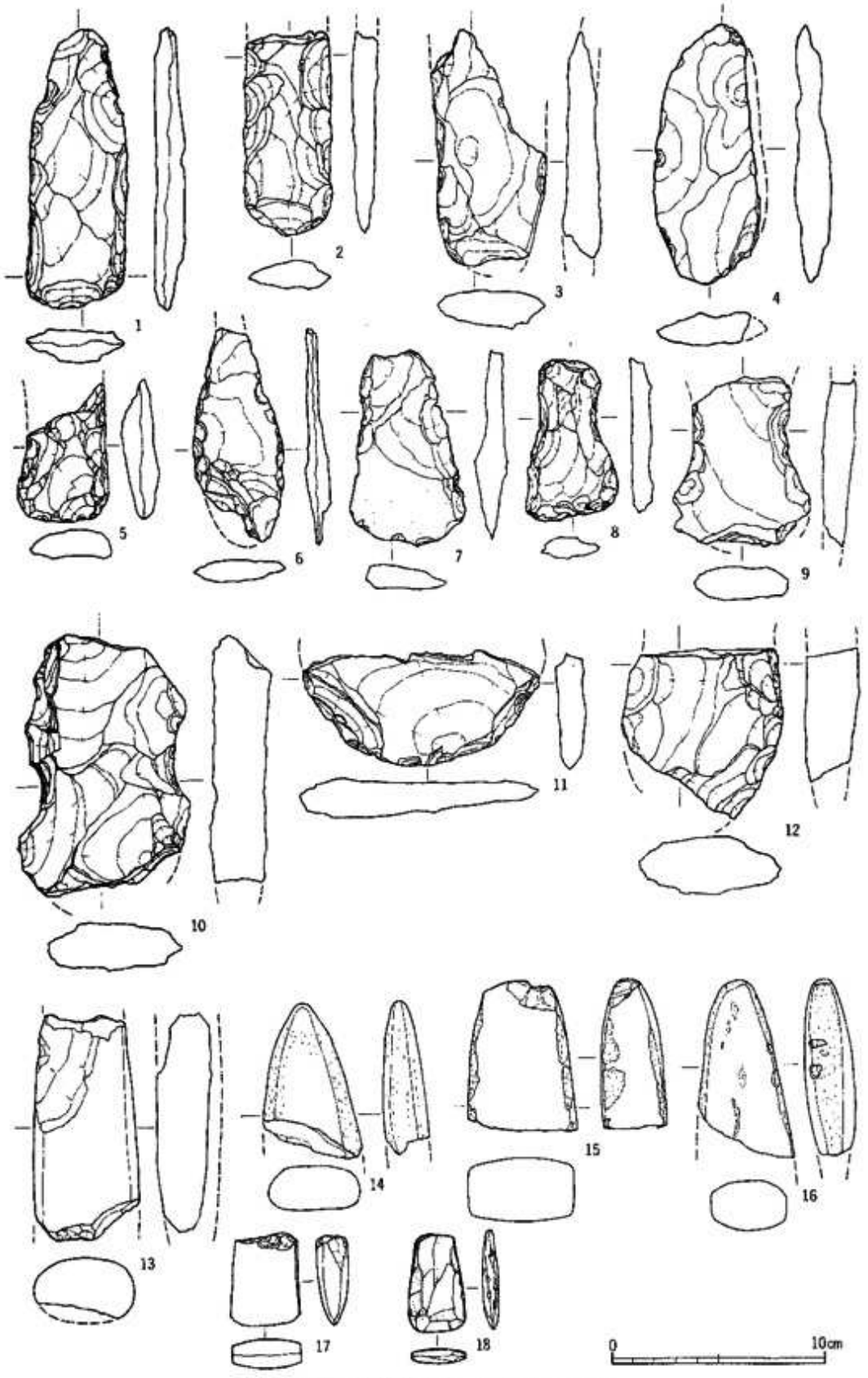
第43図　遺構外出土　縄文土器（4）（1／3）



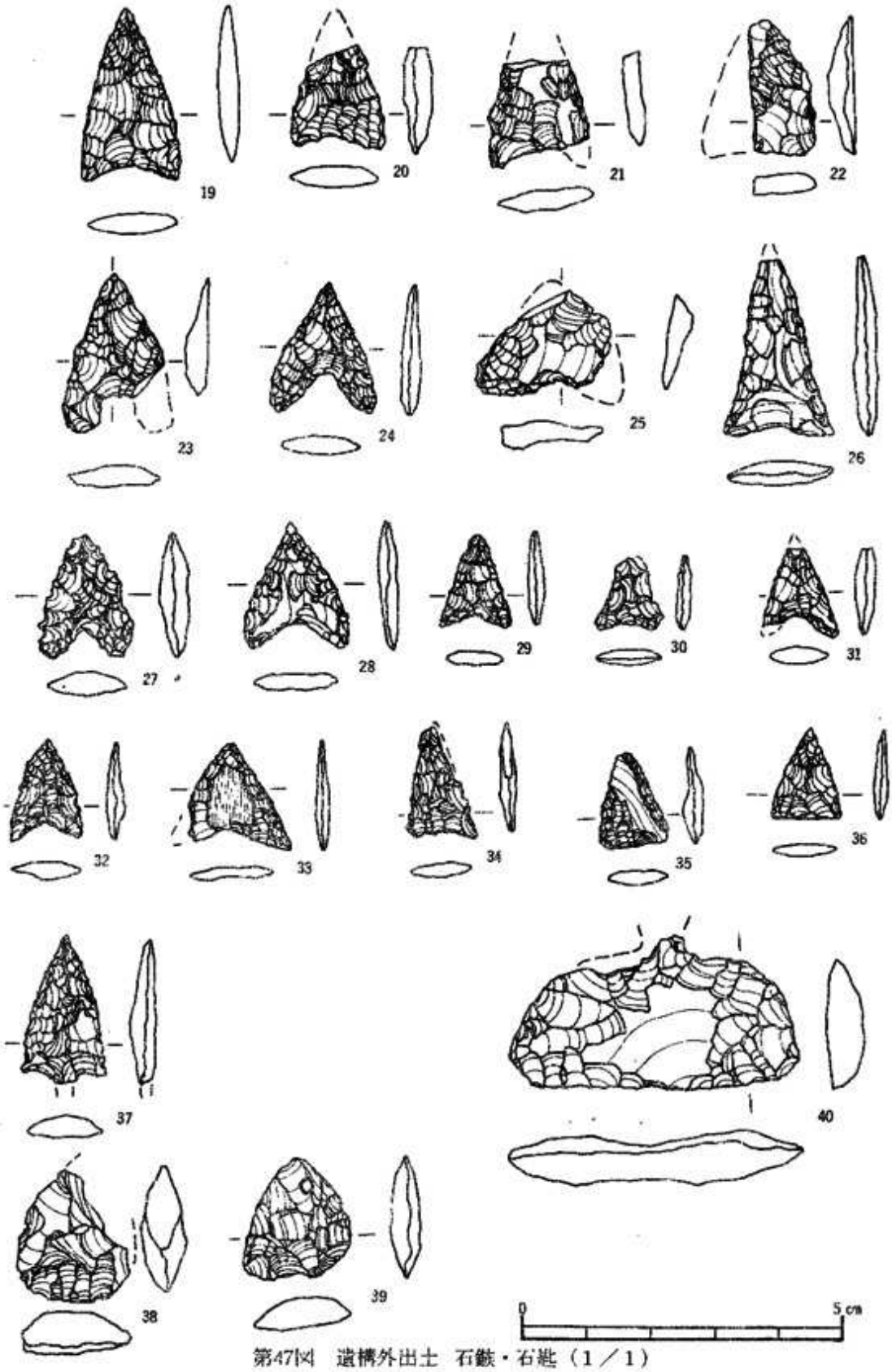
第44図　遺構外出土　縄文土器（5）（1／3）



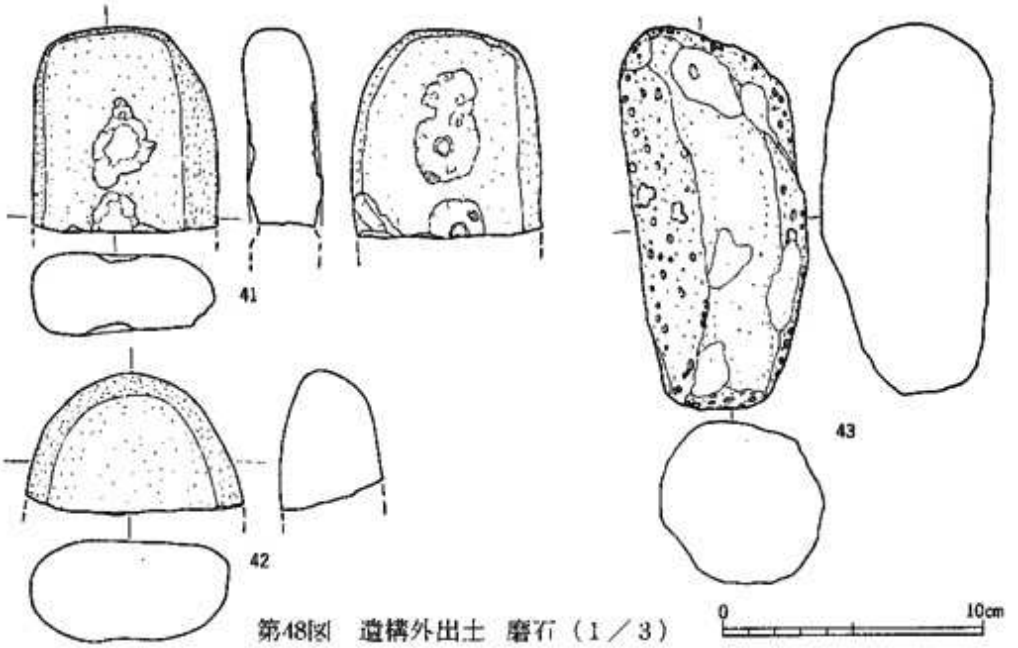
第45図　遺構外出土　縄文土器（6）（1／3）



第46図　遺構外出土 石斧（1／3）



第47図　遺構外出土　石鏃・石匙（1／1）

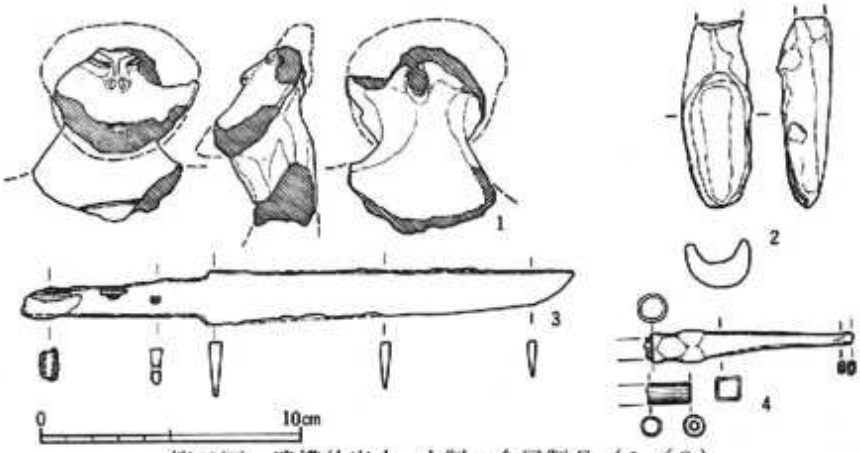


第48図　遺構外出土　磨石（1／3）

ており堀ノ内式であろう。64は磨きが良好な注口土器の把手部分で、加曽利BI式である。64～79の土器底部のうち70～75、79は2本越え1本潜り1本送りの網代痕をもち、原体巾は70、71が0.5～1mm、72は2mm、73は0.5～2mm、74は0.5mm、75は2～3mm、79は2.5～3mmを測る。また78は木葉痕、69、77は無文である。80は推定径10.5cmの堀ノ内I式の土製蓋で、上部にはブリッジ状の把手がある。81、82は円盤状を呈す無文の蓋で、2つの穴が1対貫通するものと思われる。81は径6.5cmをはかる。

縄文時代の石器（第46～48図、図版12）

縄文土器と同じく本遺跡の東地区を中心にほぼ全域から出土している。1～8は短冊形打製石斧、9～12は分銅形打製石斧である。石質は1、3、5、7～9は釜無川産と思われる硬砂岩、4、6、8～12は粘板岩、2は粘板岩ホルンフェルスである。この中で4と6は横刃形石器である可能性が強い。短冊形打製石斧は硬砂岩を、分銅形打製石斧には粘板岩を使用する傾向が看取できるが、(注11)これは大泉村周辺で一般的にいえることである。13～18は磨製石斧で、そのうち17、18は小型磨斧である。石質は13が御荷鉾(みかぼ)緑色岩、14は輝岩、15は片麻岩、16、17は輝緑疑灰岩、18は緑色岩の一種である。このうち13は形態が扁平で縄文時代前期の特徴を示す。長野県原村の阿久遺跡出土の磨製石斧はほとんどが扁平形態を呈す御荷鉾緑色岩であるという。(注12)19～39の石鏃は26が玄武岩、31が青色チャートである他は全て黒燿石である。この中で33は両面の中央部を中心に一定方向の磨り面がみられ、縄文時代後期～晩期にみられる部分磨製石鏃の一種であろう。40は赤色チャートの石匙である。図示したほかに、径3cmほどの球状を呈す輝石安山岩(注13)製の投弾状石器がある。41、42は磨石、43は縄文時代前期に多い稜磨石で、石質は全て輝石安山岩である。43は覆土中出土の諸磯b式土器に伴うものであろうか。



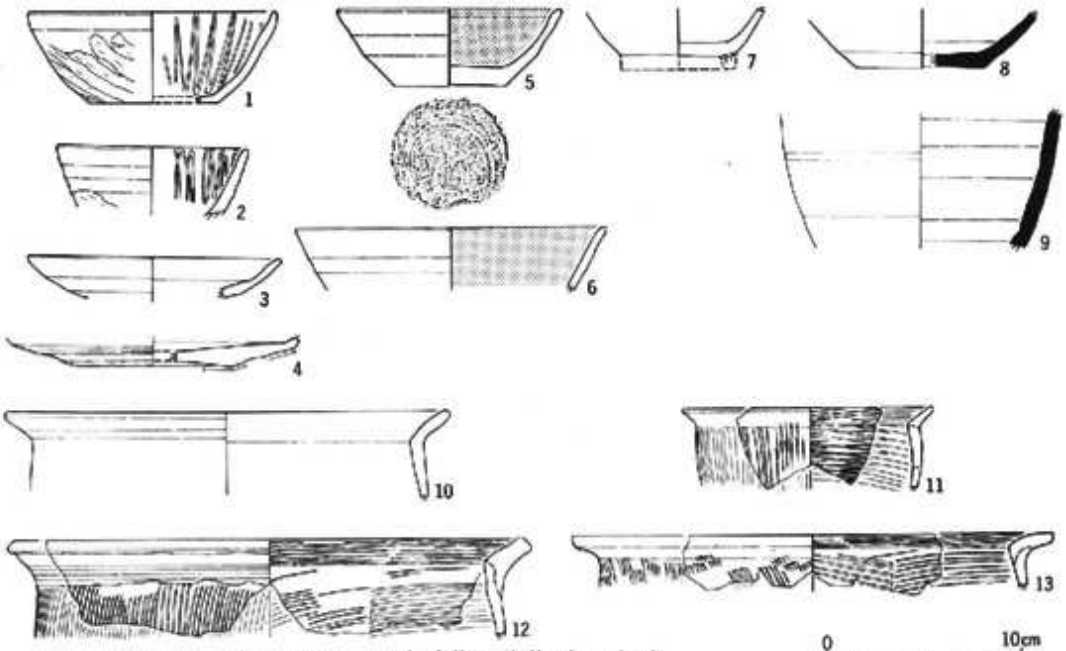
第49図　遺構外出土　土製・金属製品（1／3）

縄文時代の土製品（第49図、図版13）

1はD23グリッドで検出された土偶頭部である。表面はよく磨かれており、加曽利B式の所産であろうか。2は8号住居址付近で表採された土製スプーンである。土製スプーンは縄文時代中期頃から出現するが後期になって増加するもので、本例も加曽利B期頃の所産であろう。(註14)

平安時代の遺物（第50図、図版13）

1～7は土師器の坏・皿で、1・2は9世紀第4四半紀の甲斐型坏、3・4は9世紀第4四半紀～10世紀前半の甲斐型皿5・6は内面黒色坏、7は内面の磨き良好な信州系高台付坏である。8・9は須恵器で、8は坏、9は長頸壺であろうか。10～13は土師器甕で、10はロクロ成形され胎土が甲斐型坏に類似するもので、9世紀第4四半紀の所産であろうか。11～13は内外面刷毛目整形された甕で、そのうち11は小型甕である。図示した他にもあるが、(註15)いずれも住居



第50図　遺構外出土　平安時代の遺物（1／4）

址の時期を越えるものではない。

中・近世の遺物（第51図、図版13）

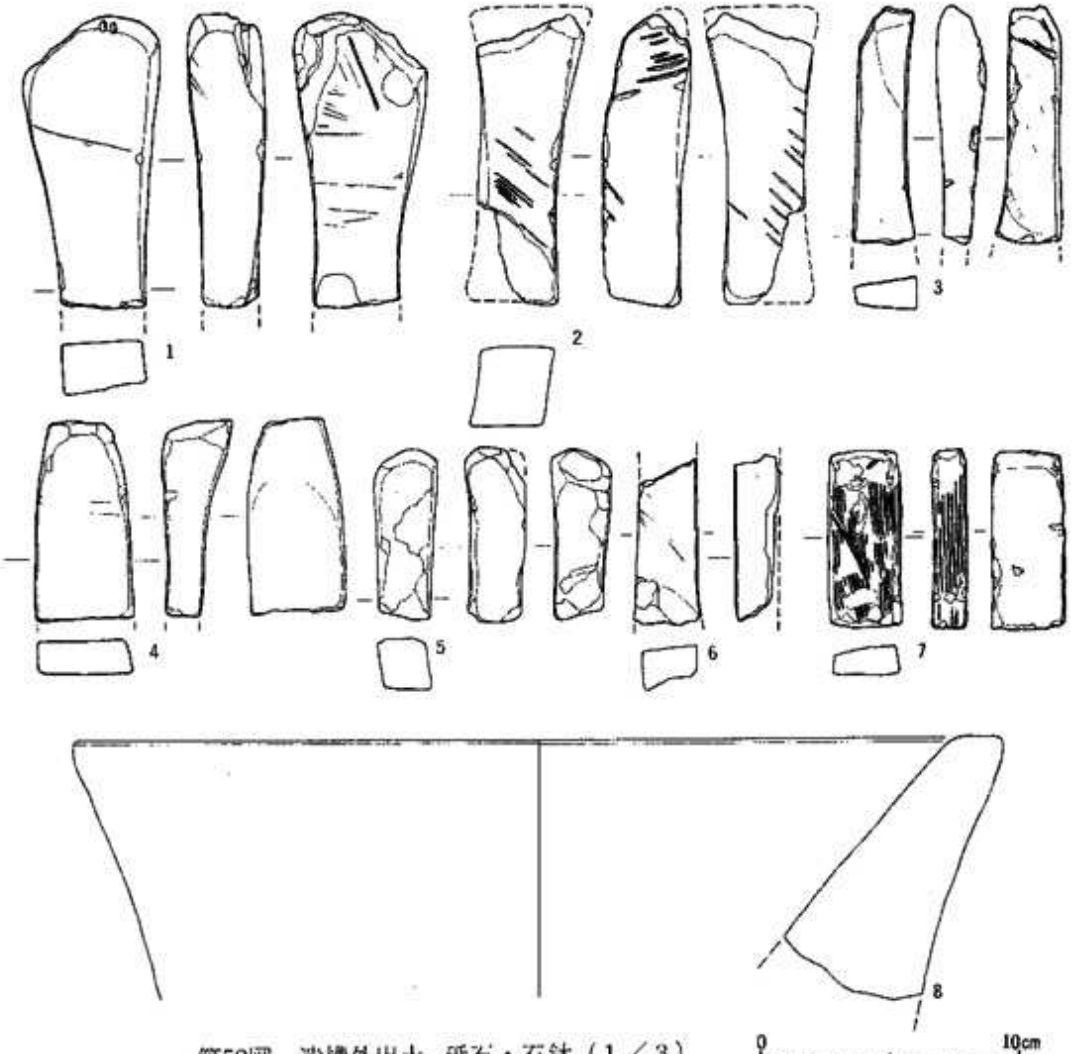
2・5・6号掘立柱建物址、1～7号溝址、1・2号集石址を中心に中・近世の遺物が少量出土した。1～4は土師質土器で、そのうち1、4は2号集石中から出土した。1は口径9cm底径5.5cm、高さ2.2cm を測り、底部には回転糸切り痕がある。5はP17・18グリッドから出土した土鍋で、口縁部には2つの孔が貫通しその外面に耳状の張り出しがある。多分、自在鉤に吊すための紐が焼けないための被いであろう。内面には薄い刷毛目整形が、また外面には軽くヘラ削り整形が行われている。類例は全くないが、孔が貫通しない資料として一宮町笠木地蔵遺跡Ⅲ期（12世紀前半）に把手状の突起をもつ甕があり、口縁形態も類似している。一応12世紀前半以降の所産としておきたい。6は美濃製陶器徳利、7は磁器徳利或いは仏花瓶、8は染付茶碗でいずれも近世の所産である。9は6号掘立柱建物址周辺及び2号集石中から出土した常滑焼甕である。口縁形態から14世紀中頃～15世紀中頃に位置づけられ、本遺跡の建物址ピット群、集石等の時代を推定しうる資料である。10は瓦器火鉢で、2号集石及びその周辺か

第51図　遺構外出土　中～近世の遺物（1／4）

ら出土した。この他に2号溝址周辺から出土した青磁2片がある。緑色を呈し厚さ4.5 mm を測る片切り手法による蓮花文が施文された碗口縁部片と、オリーブ色を呈し厚さ6 mmを測る碗胴部片で、ともに13～14世紀の中国龍泉窯系の製品である。本遺跡からは以上のほかにも天目茶埦、尾呂茶碗、古伊万里茶碗等がみられたが、殆んどが17世紀以降の製品である。また内耳土器片は僅か1点検出されたのみである。

砥石（第52図、図版12）

計7本の砥石が検出された。1、2、4は1号溝址、3、5は6号掘立柱建物址周辺、他は



第52図　遺構外出土　砥石・石鉢（1／3）

覆土中出土で、このうち1、2、4、5、6は黄色を呈す泥岩で仕上げ砥、3、7は中砥である。いずれも鎌用砥石であろう。

石鉢（第52図8、図版12）

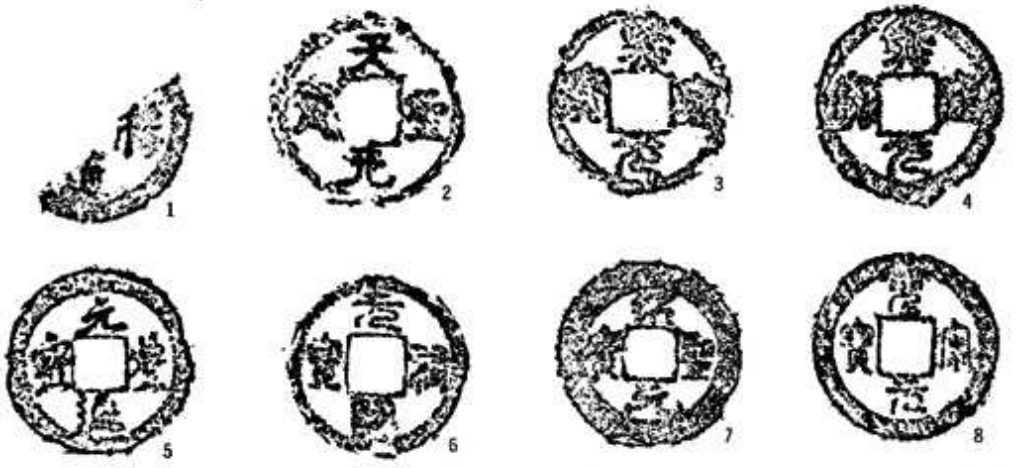
2号集石中から出土した安山岩製品で、推定径36 cmをはかる。類例は中・近世の遺跡に非常に多く、最近韮崎市金山遺跡からは片口の付いた完形品が出土している。

金属製品（第49図、図版13）

F27グリッドから鉄製刀子、E33グリッドから銅製キセル吸い口が出土した。3は短刀状のもので、刀身部14.2 cm、茎部 7.1 cm、全長部21.3 cm、関部巾 2.1 cm、厚さ4～5 mmを測る。茎部には径4 mmの目釘穴がひとつ貫通し、また後方両面には木質部が一部銹着している。時期は不明だが、平安時代以降であることは間違いない。4はキセル吸い口で、長さ7.7 cm を測り両端は円形、その間は断面方形である。前方部管内には径8 mmの円筒形の木質部が1.6 cm ほど残り、中心部には径3 mmの穴が貫通する。近世以降の所産であろう。

古銭（第53図）

1号溝址から5枚出土したほか、3号溝址から1枚、O15グリッドのピット中から2枚（うち1枚は紛失）、覆土中から3枚出土した。銭種は全て北宋銭で、天禧通宝～政和通宝までの9種10枚である。溝址出土が多く、いずれも風化が著しい。1は1号溝址の天禧通宝（1017年、楷書）、2は3号溝址の天聖元宝（1023年、楷書）、34は1号溝址の熙寧元宝（1068年、篆書）、5はO15グリッドP1（第32図）中の元豊通宝（1078年、行書）、6はO16グリッド出土の元祐通宝（1086年、篆書）、7は1号溝址出土の紹聖元豊（1094年、行書）、8はN17グリッド出土の聖宋元宝（1101年、篆書）である。この他に1号溝址出土の治平元宝（1064年、篆書）、政和通宝（1111年、篆書）がある。検出されたのが中・近世の遺構群内であるため遺構群に伴うものと考えられる。古銭の中に洪武通宝等の明銭や、寛永通宝など江戸以降の銭貨が含まれないことから、中・近世の建物址の時期をある程度絞ることができると思われる。



第53図　古　銭（1／1）

0　5 cm

Ⅵ　ま　と　め

1　豆生田第３遺跡と金生遺跡の関係について

本遺跡は金生遺跡から僅か500ｍの位置に所在するため、金生遺跡の周辺遺跡のひとつとして、当初よりその調査内容に期待がもたれたが、狭い調査範囲ということもあり検出された遺構は住居址２軒と土壙若干という結果であった。ただ調査範囲が狭いとはいえ、縄文土器が集中した付近を面的に剥いで意識的に調査した結果であり、やはり周辺遺跡としての本遺跡の性格を如実に表わしたものと受けとめたい。そうした認識に立って、本遺跡の遺構、遺物を検討してみると興味深い点がいくつかあげられる。

まず遺跡の継続時期についてである。金生遺跡では縄文時代中期後半～晩期末まで集落が継続して営まれたのに対し、本遺跡は出土した土器片の時期から推定するならば、縄文時代中期後半～後期中葉（加曽利BI式期）までであり、２軒の住居址は堀ノ内式期と加曽利BI式期に属す。ここで考えられるのは、この本遺跡の状況は金生遺跡における縄文時代後期中葉以降の住居址数の増加傾向と、大規模配石の発達過程に関連した、周辺遺跡の消長を示すものではなかろうかということである。すなわち、縄文時代後期中葉の加曽利B式期頃、何らかの理由で集落の統合が、ある程度の範囲内で行なわれた可能性があるという点を指摘しておきたい。

次に祭祀遺物の発見と、祭祀に伴なう大規模配石遺構の欠如である。従来より金生遺跡は、この地域一帯の祭祀を司さどる宗教センター的な役割を果たした集落で、石棒・丸石・土偶・獣骨等を媒体とする各種祭祀権を掌握しえた、いわゆる中心的な集落であると考えられている。それに対し本遺跡からは土偶２点が発見されたほか、住居址内の炉の正面の石に丸石が使われており、周辺集落での信仰形態の一端が窺われる。つまり金生遺跡で顕著に見られた土偶祭祀は、周辺集落でも同様に存在しており、その廃棄場所も同一集落内であったことがわかる。また金生遺跡では屋外の共同祭祀として他の各種祭祀と組み合わせて行われた丸石祭祀が、本遺跡では丸石のみが住居内に取り込まれ、「家」の祭祀として単独に行われていた可能性がある。つまり従来の見解を裏づける意味で述べれば、金生遺跡はその周辺の集落で個々の家の祭祀として行なわれていた各種祭祀や、集落ごとに行われていたムラの祀りを、屋外の共同祭祀として大規模に行なった集落であったと思われる。換言すれば、金生遺跡の共同祭祀に参加した周辺集落がひとつの共同体を構成しており、金生の集落は祭祀権を掌握することで共同体内の中心的役割を果していたと考えられる。そういう見地から金生遺跡をみると、１号配石遺構において石棺墓や石棒・丸石の組み合わせにいくつかのまとまりがみられるという状況は、想像を逞しくするならば、共同体を構成する個々の周辺集落によってそれぞれ維持された、祭祀場のまとまりを意味するものではなかろうか。なお本遺跡の８号住居址の丸石は、炉の正面に据え

られ、炉石としての機能を果すと共に「炉の神」の如く祀られており、物を生み出す力を内在する火（或いは炉）と、出産をはじめとする生産の象徴としての丸石を生活の場で結合することによって生み出されたこの祭祀形態は、縄文時代の合理性の一例を示すものとして興味深い。

金生遺跡の周辺には同様の中心的な遺跡として、高根町東井出の石堂遺跡、同じく村山北の割の青木遺跡、長坂町長坂上条の長坂上条遺跡をあげることができ、一地域における共同体の分を知るうえで、この八ケ岳南麓は重要なフィールドといえよう。また今後中心集落の調査とともに、周辺の小集落の徹底的な調査が共同体の構造研究を更に進展させるものとして注目される。

2　平安時代の八ケ岳南麓の開発について

本遺跡の所在する八ケ岳南麓のいわゆる台上地方（大泉村、長坂町、小淵沢町、高根町）では、一部に鬼高期の遺跡があるもののその後完全に遺跡がみられず、平安時代9世紀第4四半紀になって突然各地に爆発的に集落が発生し、11世紀後半に再び消滅するという過程が現在までに知られている。更に集落発生期の当初から各集落内に掘立柱建物址、鍛冶工房址を備えていることと、住居址どうしの切り合いが少なく各住居址はある程度の距離をおいて存在すること、出土遺物をみると墨書土器の比率が高く、須恵器、灰釉陶器等当時としては貴重な製品を甲斐国中央部の集落に比べ多くもつという共通性がみられるということが既に指摘されており、台上地方が計画的な開発を受けたのではなかろうかと考えられている。これらの指摘は台上の遺跡の調査が進むにつれて益々明確になりつつあり、今回の調査も指摘される傾向を示すものであった。最近の平安時代研究の動向として、どのような原因からこうした大がかりで計画的な開発に至ったのだろうかという点が最大の課題となりつつある。

そこで、この開発事業の発生期・発展期・消滅期の様相を、当時の物資の交流を端的に示す土器の組成分析によって探ることにより、開発そのものの契機を解明することができるのではないだろうか、というのが私の考えである。今回の調査では9世紀第4四半期～10世紀第3四半紀の住居址8軒が検出され、中でも3、5、9、10号住居址の出土品は該期の土器組成を知るうえで良好な資料であるが、細部にわたる分析は別の機会に譲るとして、大まかに4軒の遺物を見てわかるのは、信州系土器群の占める割合が坏を中心に非常に高いということである。ここで断わっておくが、北巨摩地方でいう信州系土器群とは内面黒色処理された坏や小型のロクロ整形甕等をさすもので、甲斐国中央部(一宮町、御坂町方面)では全く出土しない上、北巨摩地方の土器群とも明らかに胎土、焼成が異なっていることから今のところ長野県側のものと考えられている土器群である。

この信州系土器群は、この台上地方の土器群の組成分析をする際、甲斐型土器群とともにその流入過程及び流入量が非常に重要であると思われる。というのは、この台上地方が甲斐国内

での信濃国との唯一の接触地帯で古くから交流が盛んなため信濃国はもちろん、灰釉陶器の流入からわかるように美濃国をはじめとして東山道の諸国からいろいろな面で影響を受けていたわけで、そうした流れの中で信州系土器群も台上地方にもたらされたと思われるからである。従って当時、甲斐国の国府が東海道ルートの官道の表玄関であったのに対し、いってみれば裏街道の玄関口としてこの台上地方を含めた北巨摩地方を評価することができよう。つまり台上地方のもつ特殊性と、八ケ岳南麓の開発とを切り離して考えることはできず、開発事業の開始とともに現われる外的影響の分析によって開発そのもののもつ意味がわかるのではないかと考えるのである。

さて、こうした台上地方の開発事業は、当時北巨摩地方に設置されていたと考えられる官牧との関連において説明されることが一般的である。つまり官牧の経営は、水稲をはじめとして雑穀栽培等の生産基盤が背後になければ成り立たないというのがその説の根拠である。具体的にいえば、官牧を経営していく上で馬の飼料として、或いは牧吏の俸給として莫大な米、雑穀が必要であったため、官牧経営に伴う田畑の開発が大規模に行われたのではないだろうかということである。この考え方は台上地方のみにあてはまるものではなく、同じ八ケ岳西南麓の信濃国の勅旨牧のひとつ山鹿牧の比定地付近でもいえることで、発掘調査によって明らかになった諸特徴は全く一致している。さらに、八ケ岳西南麓地方で「甲州タイプ」とよばれる甲斐型坏、甕の出土が多い点は、(注13) まさに台上地方における信州系土器群の存在に対比すべきものであろう。牧と開発の関連性が全国的にいえるものかどうか不明なため断言はできないが、9世紀～10世紀にかけて八ケ岳山麓地方以外でも、東国地方の山麓を中心とした原野を対象に各地で開発行為がみられるようであり、この開発事業が全国規模で行われたのではないかとさえ思われる。

台上地方の集落は、駒牽きの記事から推定すれば、官牧経営の衰退と共に急激な消滅過程を辿ったものと思われるが、山鹿牧に比定されている八ケ岳西南麓地方でも全く同じ状況であるという。今後、八ケ岳南麓の開発過程の研究は、土器組成分析といった微視的な追求とともに全国的な視野に立って行われる必要があろう。

ところで、昭和59年に大泉村西井出で調査された東姥神B遺跡からは、10世紀第1四半紀の甲斐型坏に墨書された「安雲」が発見され、安曇氏の存在を示す全国初の出土として話題になったが、八ケ岳の開発に関連させてその後の知見を若干述べておきたい。

安曇氏は、その優れた航海技術によって朝鮮半島と行き来する中で、いち早く鍛冶技術と馬の飼育技術を習得したといわれている。また独自の漁撈技術を生かして、その後徐々に東北地方に進出していったと考えられている。(注14) おそらく当初は、海岸部で生産された塩や、魚介類を馬によって内陸部に運搬したり、河川において魚を追い求めつつ内陸部へ進入し、原野の開発に必需品であった鉄製農具を製造することによって山麓地帯の開発を進め、やがて牧の経営にも携わったのではないかと考えられる。つまり、9世紀第4四半紀以降の八ケ岳山麓の開発事

業にも当然安曇氏が参加していたのではないか、という推測が成り立つ。仮りに安曇氏が大泉村周辺に依拠していたとするならば、この付近に何らかの痕跡を残してはいないだろうか。

そこで大泉村周辺の安曇氏関係の地名、神社等を探ってみると、大泉村の南、高根町五町田に諏訪明神があるが、社記によればその祠地を「熱田の森」といい、地主神は「熱田明神」であるという（甲斐国志）。また台上地方の高根町～大泉村西井出付近に及ぶ一帯は、中世「熱那庄」といわれ（甲斐国志）、現在熱那という地名が高根町村山西の割に残る。また北巨摩地方には苗字として「跡部」がみられるが、南佐久郡誌の中で菊池清人氏が述べるように跡部は安曇部（アドベ）が変化したものではないだろうか。菊池氏は安曇部が地方の首長、或いは有力氏族の部民として招来され、又は中央政権の職業部として設置されて専門的な技術部門に使役された可能性を説いている。跡部が安曇部に関連するとすれば、何らかの権力によって安曇部がこの北巨摩地方に置かれたことになり、その設置時期は八ケ岳南麓の開発事業の発生期であったと想像することができよう。先学諸氏の御批判を賜りたい。

註

（1）近年では明治31年の原谷戸の大水害による、川流れが最も有名である。

（2）民話の内容は次の通り。谷戸八右衛門が狩りに出かけ、山火事で出合った小蛇を助けてやったところ、夢の中で大蛇が1本の楊子をくれた。それを裏山につきさしてみると水が湧き出て川となったため、下流の人々は八右衛門に毎年水の使用料を支払いながら水田をつくっていった。八ケ岳南麓に多く残る、泉の発見とその水利権にまつわる民話の一例である。

（3）小淵沢町教育委員会　佐野勝広氏の御教示による。

（4）長野県諏訪市十二の后遺跡出土品に数多くの類例がある。（参考文献4）

（5）県内の例としては、小淵沢町上平出遺跡IH住居址、高根町東久保遺跡12号住の2軒が共に9世紀第4四半紀である。このほかに長坂町柳坪A遺跡の鬼高期の住居址が5軒全て北カマドをもつ。

（6）「岳」そのものの類例はないが、長坂町柳坪C遺跡（1985年調査、未報告）出土の内黒土器（10世紀前半）に墨書された「岳」がある。

（7）一宮町北堀遺跡（参考文献17）、高根町湯沢遺跡・石堂A遺跡（共に未報告）にみられ高さがいずれも35 cm内外を測る。

（8）高根町東久保遺跡28号住居址（10世紀第1四半紀）出土の甲斐型坏に「大麻呂」と墨書された例がある。

（9）小和田館跡（参考文献16）のE地区の人骨が伴出した5基の墓壙のうち2基が石組土壙であり、埋葬方法は屈葬ではなかったかと考えられている。

（10）一宮町及び勝沼町釈迦堂遺跡、須玉町川又南遺跡、大泉村金生遺跡に類例がある。

（11）井戸尻考古館　小林公明氏、樋口誠司氏の御教示による。

（12）井戸尻考古館の小林公明氏によると、縄文時代晩期の断面が扁平な磨斧の多くは長野県富士見町の入笠山に産する御荷鉾緑色岩であることが多いという。

（13）最近、斉藤基生氏が縄文時代晩期の石鏃として報告しているが（参考文献20）、本遺跡の例は後期の所産と思われる。

（14）一宮町及び勝沼町釈迦堂遺跡で中期の例が、高根町青木遺跡、大泉村金生遺跡で後期の例がある。

（15）本遺跡からは1例だけだが、須玉町大豆生田遺跡、大小久保遺跡、武川村宿間屋遺跡では類例が多い。

（16）原村誌（参考文献15）の中で宮坂光昭氏が指摘するのは次の4点である。（以下原文のまま）

(1) 八ケ岳山麓の小河川にそって、長峰状の丘陵南西斜面の等高線上に帯状に並び、標高は 900～1000 m に集中する。

(2) 集落の構成をみると、住居址群の配列は密でなく、作られた時期の異なる住居址が互いに重複（切り合う）例は少ない。つまり比較的短期間の限られた時間幅をもつ集落である。

(3) 住居址から出土する陶器は、美濃地方で生産された灰釉陶器を主とし、その年代は平安時代後期（陶器の型式は折戸53号窯のものと同じ）に属する。また伴出する土師器には甕・坏・小形甕などがあり、それらの中には「甲州タイプ」と称されるものが多く、先の美濃産の陶器と合わせて、広い範囲の交流がうかがえる。

(4) 鉄製品の所有が普遍的となり、また鉄滓やフイゴの口（羽口）の出土例が多いことからみて、鍛冶を行う人々と、彼等のいた村が存在していたことをうかがうことができる。

(17) 以下『南佐久郡誌』の菊池清人氏の説を基にしている。（参考文献14）

参考文献

(1) 一志茂樹　1950　「官牧考―塩原牧を中心として―」『信濃』2―4・5　信濃史学会

(2) 末木　健　1974　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡小淵沢町内―』山梨県教育委員会

(3) 末木　健　1975　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内―』　山梨考古学研究会

(4) 笹沢　浩ほか　1976　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―諏訪市その4―』　長野県教育委員会

(5) 久保田正寿　1977　『青梅市の埋蔵遺跡』　青梅市教育委員会

(6) 磯貝正義　1978　「古代官牧制の研究―甲斐の御牧を中心として―」『郡司及び采女制度の研究』　吉川弘文館

(7) 浅川鷹寛ほか　1979　『いずみのふるさと』　大泉村教育委員会

(8) 坂本美夫ほか　1983　『神奈川考古　第14号　シンポジウム　奈良・平安時代土器の諸問題―相模国と周辺地域の様相―』　神奈川考古同人会

(9) 磯貝正義ほか編1984　『角川日本地名大辞典　19　山梨県』　角川書店

(10) 赤羽一郎　1984　『考古学ライブラリー23　常滑焼―中世窯の様相―』　ニューサイエンス社

(11) 雨宮正樹　1984　『東久保遺跡』　高根町教育委員会

(12) 萩原三雄ほか　1984　「山梨県考古学研究の現状と課題」『甲斐路』No.52　山梨郷土研究会

(13) 佐野勝広　1985　『前田遺跡』　小淵沢町教育委員会

(14) 菊地清人ほか　1985　『南佐久郡誌　古代・中世編』　長野県南佐久郡誌刊行会

(15) 宮坂光昭ほか　1985　『原村誌　上巻』　原村役場

(16) 岡本範之　1985　『小和田館跡発掘調査概報』　長坂町教育委員会

(17) 長沢宏昌　1985　『北堀遺跡』　山梨県教育委員会

(18) 長沢宏昌　1985　『笠木地蔵遺跡』　山梨県教育委員会

(19) 猪股喜彦　1985　「山梨県における奈良・平安時代の集落遺跡」『歴史手帖』13―1　名著出版

(20) 斉藤基生　1986　「縄文時代晩期の部分磨製石鏃について」『古代文化』3

第1表　平安時代の土師器・陶器観察表

（法量は口径，底径，器高の順，—は計測不能，（　）は推定値）

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量 cm	成・整形技法	胎土	残存%	出土位置	備考
第12図	1号住	1	土師 高台付坏	— (6.5) —	ロクロ成型，内面　黒色処理 底部　回転糸切り後 付高台	スコリア	—		
〃	〃	2	土師 皿	(12.8) 4.8 2.1	ロクロ成型，内面　黒色処理 底部　回転糸切り	金雲母・白色粒子	50		外面に刻書「大」
〃	〃	3	灰釉 埦	(13.5) — —	ロクロ成形		—		小片 大原2号窯式
〃	〃	4	土師 小型甕	(15.0) 7.1 16.4	ロクロ成形，外面　横刷毛目 底部　回転糸切り	白色粒子・黒色粒子	70		
〃	〃	5	土師 甕	— (10.0) —	内外面　刷毛目整形 底部　木葉痕	金雲母、白色粒子多い、黒色粒子	—		
〃	〃	6	土師 甕	(31.0) — —	外面　刷毛整形（刷毛目痕かすか） 内面　刷毛目整形	金雲母、白色粒子多い、黒色粒子	—	カマド内	内面　黒変
第13図	2号住	1	土師 坏	(11.3) 5.0 4.6	ロクロ成形、内面　暗文 底部　回転糸切り後　手持ちヘラ削り	スコリア，白色粒子	60		甲斐型坏、外面
第15図	3号住	1	土師 坏	12.1 5.4 4.5	ロクロ成形、内面　黒色処理　かすかなヘラ整形痕、底部　回転糸切り	スコリア、黒色粒子白色粒子	100	床面＋8.5cm	外面に刻書記号
〃	〃	2	土師 坏	(14.7) 5.4 5.3	ロクロ成形、内面　黒色処理 底部　回転糸切り	白色粒子、スコリア 黒雲母	45	床面直上～＋6cm	
〃	〃	3	土師 坏	(14.6) — —	ロクロ成形、内面　黒色処理	白色粒子、スコリア	—	床面＋2cm	
〃	〃	4	土師 坏	— — 5.3	ロクロ成形、内面　黒色処理 底部　回転糸切り	白色粒子、スコリア	—	カマド内　及び　カマド付近	
〃	〃	5	土師 高台付皿	12.6 6.4 2.7	ロクロ成形、内面　黒色処理 底部　回転糸切り＋付高台	スコリア、黒色粒子	90	カマド内　及び　床面直上	
〃	〃	6	土師 皿	(15.0) — —	ロクロ成形、内面　みがき　良好	黒色粒子、白色粒子 雲母、スコリア	—	カマド内	甲斐型皿
〃	〃	7	灰釉 高台付皿	15.8 8.1 2.6	ロクロ成形、内面　灰釉全面刷毛塗り 底部　回転ヘラ削り＋付高台		50	床面＋10cm	鉛釉 黒笹14号窯式
〃	〃	8	土師 甕	(25.8) — —	内外面　刷毛目整形	白色粒子，石英白色粒子	—		
〃	〃	9	土師 甕	(24.0) — —	内外面　刷毛目整形	金雲母、白色粒子	—		
〃	〃	10	土師 甕	(26.7) — —	内外面　刷毛目整形、口縁部　刷毛目痕、内面　指頭圧痕	金雲母、白色粒子	—	カマド内	
〃	〃	11	土師 甕	17.3 — 8.6	ロクロ成形、底部　回転糸切り	黒色粒子、スコリア	—	床面直上	
〃	〃	12	土師 小型甕	(16.6) — —	内外面　刷毛目整形	金雲母、白色粒子	—	床面直上	
第17図	4号住	1	土師 皿	(13.0) — —	ロクロ成形	スコリア	—		甲斐型皿、小片
〃	〃	2	土師 甕	(23.0) — —	ロクロ成形、口辺部　ロクロによる横刷毛目、外面　縦刷毛目	白色粒子	—	床面直上	
〃	〃	3	土師 甕	(29.5) — —	内外面　刷毛目整形 内面　指頭圧痕	金雲母多量 白色粒子、褐色粒子	—	床面＋19cm	
第19図	5号住	4	土師 坏	11.3 6.1 4.3	ロクロ成形、内面　暗文 外面　1/3以下ヘラ削り 底部　回転糸切り後　手持ちヘラ削り	白色粒子、スコリア	90	床面直上	甲斐型坏 底部・外面に墨書「主」、「主」
〃	〃	5	土師 坏	10.4 5.6 4.0	ロクロ成形、内面　暗文 外面　1/3以下ヘラ削り 底部　回転糸切り後　手持ちヘラ削り	白色粒子、スコリア	70	床面直上～床面＋3cm	甲斐型坏 墨書「主」、「主」
〃	〃	6	土師 坏	(10.8) (5.1) 4.2	ロクロ成形、内面　暗文、外面　1/3以下ヘラ削り、底部　手持ちヘラ削り	白色粒子	30	床面直上	甲斐型坏 外面に墨書「主」
〃	〃	7	土師 坏	(11.0) (5.1) 4.0	ロクロ成形、内面　暗文、外面　1/3以下ヘラ削り、底部　ヘラ削り	スコリア	15		甲斐型坏
〃	〃	5	土師 坏	(11.5) (6.3) 4.0	ロクロ成形、外面　1/3以下ヘラ削り、底部　手持ちヘラ削り	スコリア，白色粒子	20		甲斐型坏
〃	〃	6	土師 坏	(17.0) (8.9) —	ロクロ成形、 内面　暗文、外面　1/3以下ヘラ削り 底部　回転ヘラ削り＋付高台	スコリア、金雲母、白色粒子等微量	—		甲斐型坏 小片
〃	〃	7	土師 小型甕	(13.1) — —	ロクロ成形	白色粒子多量	—	床面下　ピット中	
〃	〃	8	土師 小型甕	— 6.0 —	ロクロ成形 底部　回転糸切り＋敷物圧痕	白色粒子、黒色粒子 スコリア	—	カマド内	

挿図番号	出土地点	番号	器種	法量 cm	成・整形技法	胎土	残存%	出土位置	備考
第19図	5号住	9	土師 小型甕	— 7.0 —	ロクロ成形 底部 回転糸切り	白色粒子	—	床面＋4cm	
〃	〃	10	須恵 高台付坏	— 10.0 —	ロクロ成形 底部 糸切り後回転ヘラ削り＋付高台	黒色粒子、白色粒子 スコリア	—	床面直上	
〃	〃	11	須恵 甕	— — —	ロクロ成形 上部 回転ヘラ削り	白色粒子	—	床面直上	
〃	〃	12	須恵 甕	— — —	内面 指頭圧痕 外面 叩き目整形	白色粒子	—	床面直上	
〃	〃	13	土師 甕	24.5 (8.0) 37.5	内外面 刷毛目整形 底部 木葉痕	金雲母、白色粒子 黒色粒子	50	カマド内 及び 床面直上	内面 3段以下 黒変
〃	〃	14	土師 甕	(24.6) 8.6 —	内外面 刷毛目整形（巾約3.5cmの刷毛目）、底部 木葉痕	金雲母、白色粒子	—	カマド内～ 床面＋3cm	
第21図	6号住	1	土師 坏	11.0 5.2 4.4	ロクロ成形、内面 暗文、外面 3段以下ヘラ削り、底部 回転糸切り 後手捻ちヘラ削り	スコリア、白色粒子	100	床面＋9cm （炉に接する）	甲斐型坏
〃	〃	2	土師 坏	(11.0) — —	ロクロ成形、内面 暗文		—		甲斐型坏
〃	〃	3	土師 坏	(11.0) — —	ロクロ成形	白色粒子	—		甲斐型坏
〃	〃	4	土師 皿	— (7.5) —	ロクロ成形、底部 回転ヘラ削り	白色粒子	—		甲斐型皿、底部に墨書「麻呂」
〃	〃	5	土師 皿	— (5.7) —	ロクロ成形、底部 回転ヘラ削り	白色粒子、スコリア	—		甲斐型皿
〃	〃	6	土師 甕	(26.0) — —	内外面 刷毛目整形	金雲母、白色粒子	—		
第23図	9号住	1	土師 坏	(12.1) (4.0) —	ロクロ成形、内面 暗文、外面 3段以下ヘラ削り、底部 手捻ちヘラ削り	スコリア、白色粒子 雲母、黒色粒子	30		甲斐型坏
〃	〃	2	土師 坏	(11.0) — —	ロクロ成形、内面 暗文、 外面 3段以下ヘラ削り	スコリア	—		甲斐型坏
〃	〃	3	土師 坏	— (6.3) —	ロクロ成形、内面 暗文、外面 ヘラ削り、底部 手捻ちヘラ削り	スコリア 雲母、白色粒子	—		甲斐型坏
〃	〃	4	土師 坏	(11.6) (5.2) (4.3)	ロクロ成形、底部 手捻ちヘラ削り	白色粒子	15		甲斐型坏
〃	〃	5	土師 坏	(11.6) — —	ロクロ成形、外面 ヘラ削り	スコリア、雲母	—		甲斐型坏
〃	〃	6	土師 坏	(12.6) 5.8 —	ロクロ成形、内面 みがき良好 底部 回転糸切り	雲母、石英、 スコリア、白色粒子	40		
〃	〃	7	土師 皿	(15.5) — —	ロクロ成形	スコリア、雲母	—		甲斐型皿
〃	〃	8	土師 坏	(12.8) (5.8) 3.8	ロクロ成形、内面 黒色処理 底部 回転糸切り	雲母、白色粒子 スコリア、黒色粒子	25		外面に刻書文字（？）
〃	〃	9	土師 坏	12.8 5.3 4.2	ロクロ成形、内面 黒色処理 底部 回転糸切り	白色粒子、石英 スコリア、黒色粒子	70	床面 15cm、ピット中 （ピット底部－15cm）	底部に墨書文字「西」
〃	〃	10	土師 坏	12.7 5.1 4.0	ロクロ成形、内面 黒色処理 底部 回転糸切り	褐色粒子、白色粒子 スコリア、黒色粒子	95	床面直上	外面に墨書文字「里久」
〃	〃	11	土師 高台付坏	(14.2) (6.2) 4.9	ロクロ成形、内面 黒色処理 底部 回転糸切り＋付高台	スコリア、雲母、黒色粒子多い、白色粒子	30		
〃	〃	12	土師 高台付皿	13.0 6.1 2.9	ロクロ成形、内面 黒色処理 底部 回転糸切り＋付高台	白色粒子、雲母、 黒色粒子、石英	95	床面＋7cm	外面に墨書「横」
〃	〃	13	土師 小型甕	(12.6) — —	ロクロ成形、横刷毛目整形	雲母、白色粒子、 褐色粒子	—	床面＋4.5cm	
〃	〃	14	土師 小型甕	(15.5) — —	輪積み＋ロクロによる横刷毛目整形	白色粒子、石英、黒色粒子、雲母、スコリア	—	床面＋4.5～7cm	
〃	〃	15	土師 甕	(33.1) — —	内外面 刷毛目整形	金雲母、石英多量、白色粒子	—	カマド内	
〃	〃	16	土師 甕	(24.7) — —	外面、内面口辺部 刷毛目整形	白色粒子、雲母	—		
第25図	10号住	1	土師 坏	(13.6) — —	ロクロ成形、外面 3段以下ヘラ削り	スコリア、白色粒子 雲母	10	カマド内	甲斐型坏
〃	〃	2	土師 坏	(12.8) — —	ロクロ成形、外面 ヘラ削り	スコリア、雲母、 白色粒子、黒色粒子	—		甲斐型坏
〃	〃	3	土師 皿（？）	(13.6) — —	ロクロ成形	スコリア、白色粒子	—		甲斐型坏、外面に墨書文字不明
〃	〃	4	土師 坏	(14.3) (5.5) 4.7	ロクロ成形、内面 みがき良好 底部 回転糸切り	黒色粒子多量、白色粒子、雲母、スコリア	25		
〃	〃	5	土師 坏	(13.7) — —	ロクロ成形、 内面 みがき良好（茶褐色処理）	石英、白色粒子、スコリア、黒色粒子、雲母	—	床面直上 及び カマド内	
〃	〃	6	土師 坏	(12.6) 5.0 3.9	ロクロ成形、内面 黒色処理 底部 回転糸切り	白色粒子、褐色粒子 黒色粒子	40	床面－31.5cm	

図版番号	出土地点	番号	器種	法量 cm	成・整形技法	胎土	残存%	出土位置	備考
第25図	10号住	7	土師 坏	(13.0) 5.4 4.8	ロクロ成形、内面 黒色処理 底部 回転糸切り	黒色粒子白色粒子 雲母、スコリア	25		
〃	〃	8	土師 坏	(13.9) — —	ロクロ成形、内面 黒色処理	石英、雲母、 白色粒子、黒色粒子	—	カマド内	
〃	〃	9	土師 坏	(15.8) — —	ロクロ成形、内面 黒色処理	雲母、白色粒子、 黒色粒子	—		
〃	〃	10	土師 坏	(13.5) — —	ロクロ成形、内面 黒色処理	雲母、白色粒子、 黒色粒子	15	カマド付近	
〃	〃	11	土師 坏	(6.4) — —	ロクロ成形、内面 黒色処理 底部 回転糸切り	スコリア、白色粒子 黒色粒子、黒色粒子	—		
〃	〃	12	土師 甕	(9.5) — —	内外面 刷毛目整形 底部 木葉痕	金雲母、白色粒子	—		
〃	〃	13	土師 甕	— (9.5) —	内外面 刷毛目整形 底部 木葉痕	金雲母、白色粒子	—	床面－31.5cm	
〃	〃	14	土師 甕	(25.5) — —	内外面 かすかな刷毛目	金雲母多量、 白色粒子	—		
〃	〃	15	土師 甕	(27.8) — —	内外面 刷毛目整形 口唇部 刷毛目痕	金雲母、白色粒子	—		
〃	〃	16	土師 甕	(26.8) — —	内外面、口唇部 刷毛目整形	金雲母多量、 白色粒子	—	床面－12.5cm	
〃	〃	17	土師 甕	(28.4) — —	内外面、口唇部 刷毛目整形	白色粒子、金雲母	—	カマド内	
〃	〃	18	土師 甕	(29.8) — —	内外面 刷毛目整形	白色粒子、金雲母	—	カマド内	
〃	〃	19	土師 甕	(32.1) — —	内外面 刷毛目整形 口唇部 刷毛目痕	金雲母、白色粒子	—	カマド付近	
〃	〃	20	土師 甕	(28.6) (8.4) —	内外面 刷毛目整形 底部 木葉痕	金雲母、白色粒子 スコリア	—	カマド内 及び カマド付近	
第26図	〃	21	土師 小型甕	— (8.4) —	外面 ロクロによる横刷毛目整形	スコリア、白色粒子 黒色粒子	—		
〃	〃	22	灰釉 皿	(12.7) 6.0 2.8	ロクロ成形、灰釉つけがけ 底部 回転糸切り＋付高台		—	床面＋15cm	大原2号窯式
〃	〃	23	灰釉 (長頸)壺	— (7.5) —	ロクロ成形、灰釉流しかけ 底部 回転糸切り(?)＋付高台		—	床面＋10～27cm	
〃	〃	24	土師 甕	(29.0) — —	内面 ロクロによる横刷毛目整形	黒色粒子、白色粒子	—		
〃	〃	25	土師 甕	(30.9) — —	内面 ロクロによる横刷毛目整形 外面 細かい縦刷毛目整形	白色粒子、スコリア 雲母	—	カマド付近	
〃	〃	26	土師 甕	(28.0) — —	内面 ロクロによる横刷毛目整形	黒色粒子、スコリア 雲母	—	カマド内	
〃	〃	27	須恵 甕	— — —	外面 叩き目整形、内面 刷毛目整形		—	床面＋9cm	
第40図	遺構外	1	土師 坏	(13.0) (4.7) (6.6)	ロクロ成形、内面 暗文、外面 粗ヘラ削り、底部 手持ちヘラ削り	スコリア 白色粒子微量	15		甲斐型坏
〃	〃	2	土師 坏	(10.0) — —	ロクロ成形、内面 暗文	スコリア、白色粒子 雲母	—		甲斐型坏
〃	〃	3	土師 皿	(13.0) — —	ロクロ成形	スコリア 黒色粒子微量	—		甲斐型皿
〃	〃	4	土師 皿	— (8.0) —	ロクロ成形 底部 回転糸切り後、回転ヘラ削り	スコリア多量、 白色粒子	—		甲斐型皿
〃	〃	5	土師 坏	(11.8) 5.8 4.0	ロクロ成形、内面 黒色処理 底部 回転糸切り	白色粒子、雲母	50		
〃	〃	6	土師 坏	(16.0) — —	ロクロ成形、内面 黒色処理	白色粒子、黒色粒子 スコリア	—		
〃	〃	7	土師 高台付坏	— (6.0) —	ロクロ成形、 内面 みがき良好 底部 回転糸切り＋付高台	白色粒子、黒色粒子	—		
〃	〃	8	須恵 坏	— (6.6) —	ロクロ成形、底部 回転糸切り	白色粒子多量、 黒色粒子	—		
〃	〃	9	須恵 (長頸)壺	— — —	ロクロ成形	白色粒子多量、 スコリア	—		
〃	〃	10	土師 甕	(23.0) — —	ロクロ整形	黒色粒子、白色粒子	—		
第41図	〃	11	土師 小型甕	(13.0) — —	内外面 刷毛目整形	金雲母、白色粒子 黒色粒子	—		
〃	〃	12	土師 甕	(27.0) — —	内外面 刷毛目整形	白色小礫多量、 白色粒子	—		
〃	〃	13	土師 甕	(25.0) — —	内外面 刷毛目整形	白色粒子、金雲母、 黒色粒子	—		

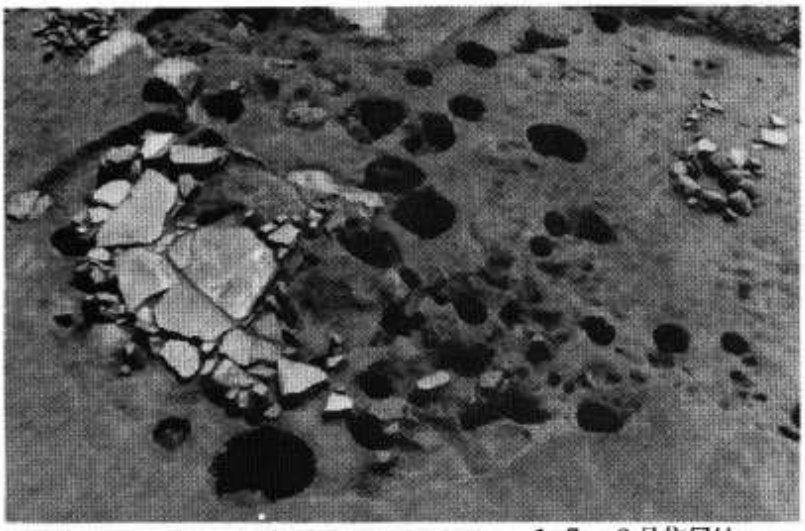
1, 遺跡調査前
(東南より)

2, 遺跡調査前（南より）

3,遺跡調査前
(北より)

4,遺跡調査中

図 版 2



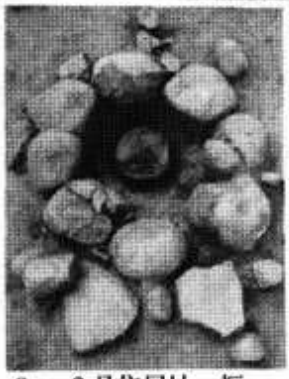
1，7・8号住居址

8—15

2，8号住居址

8—11

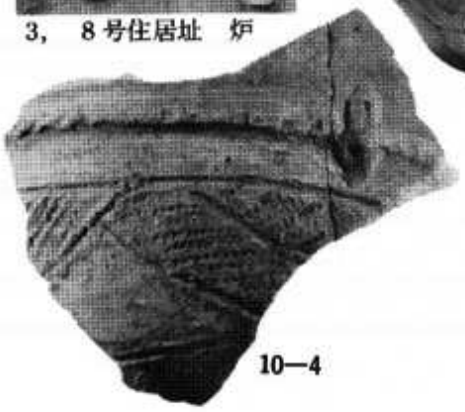
8—12



3，8号住居址　炉

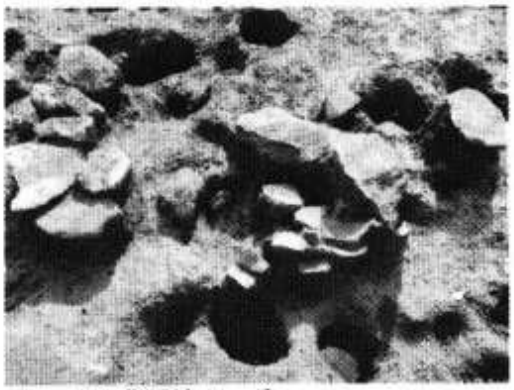
10—10

10—1



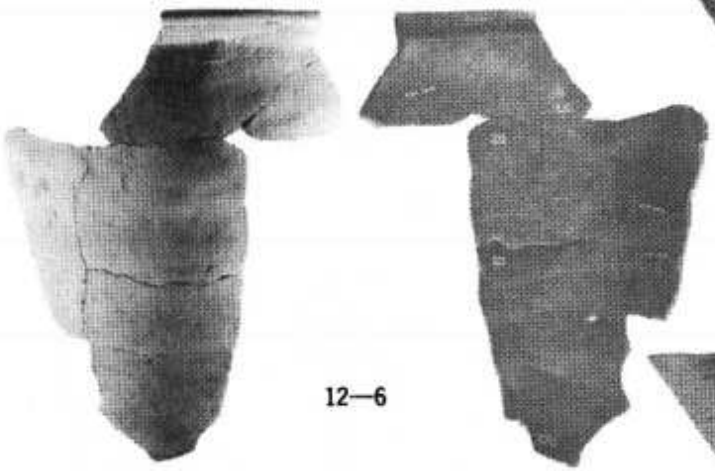
10—4

10—13



1, 1号住居址カマド

12—4



12—6

13—1

2, 作業風景

4, 3号住居址
カマド

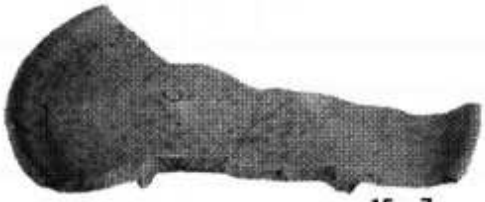
3, 3号住居址

图 版 4

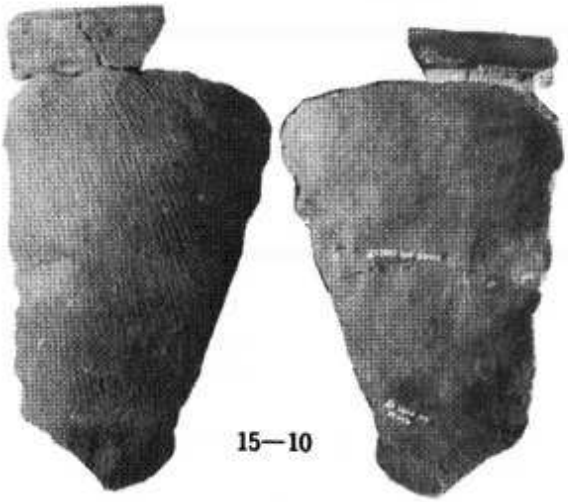
15—1

15—11

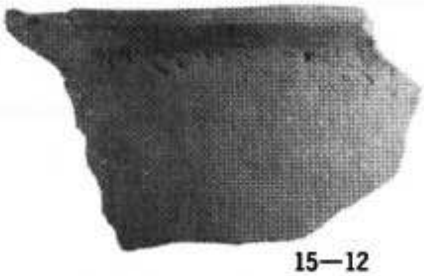
15—5



15—7

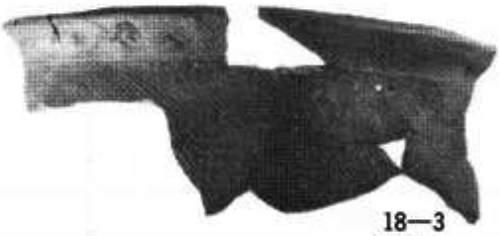


15—10



15—12

1， 4号住居址



18—3

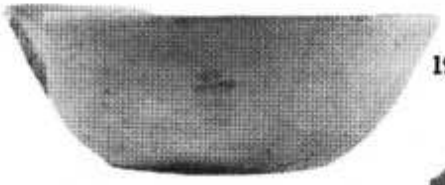
18—2

1, 5号住居址

2, 5号住居址カマド

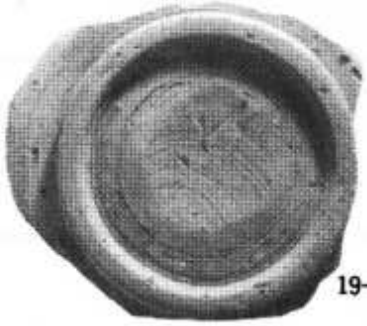
3, 5号住居址
遺物出土状況

4, 5号住居址カマド

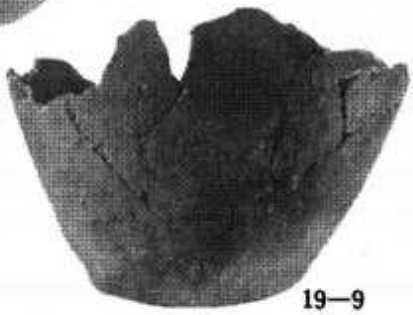


19—1

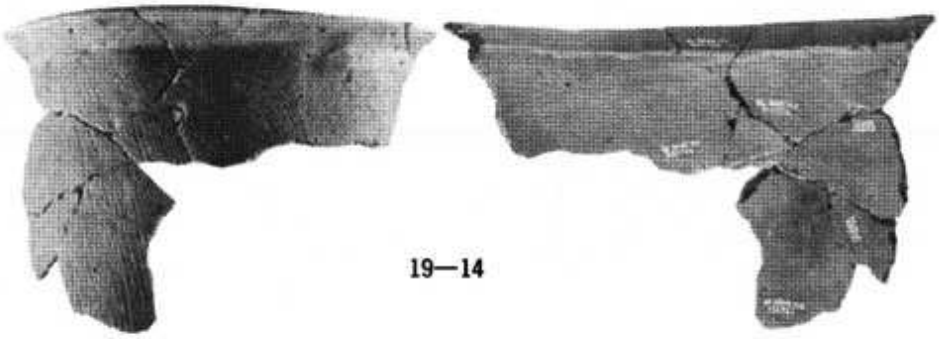
19—13



19—10

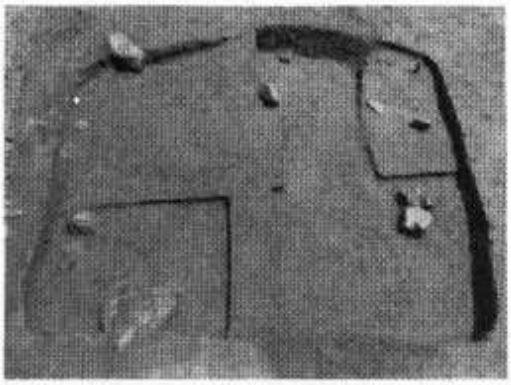


19—9



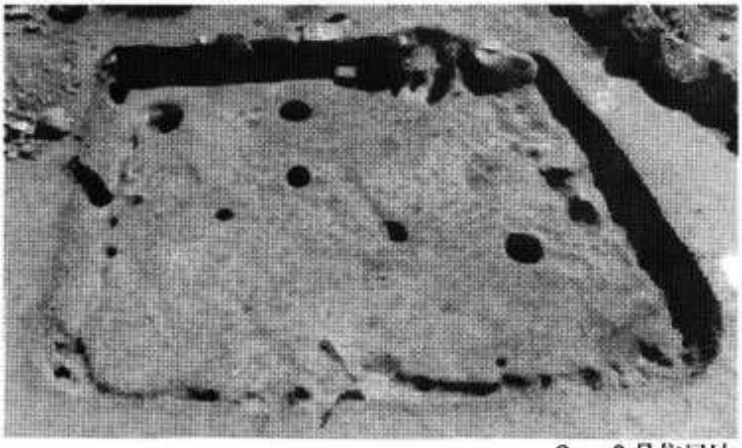
19—14

図 版 6



1， 6号住居址

21—1

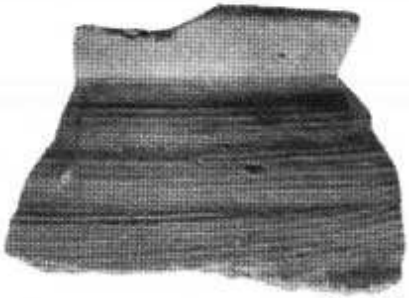


2， 9号住居址

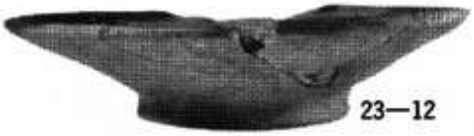
3， 9号住居址カマド

23—9

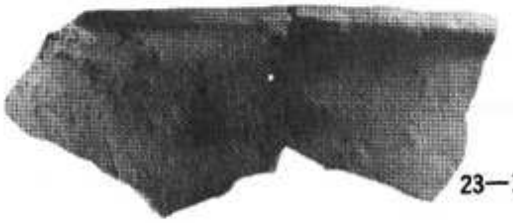
23—10



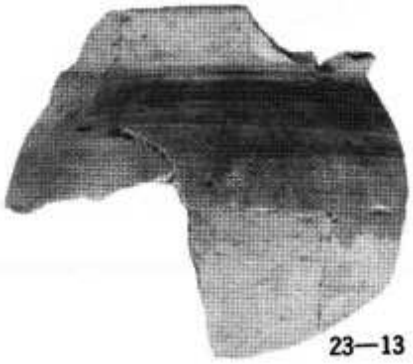
23—14



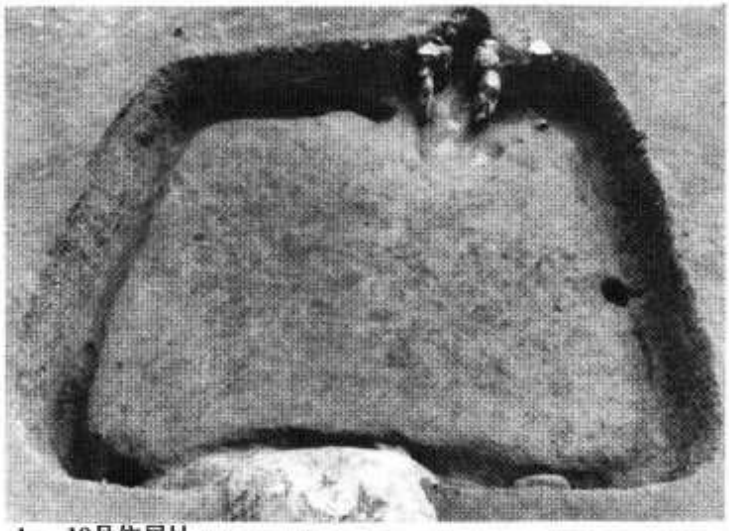
23—12



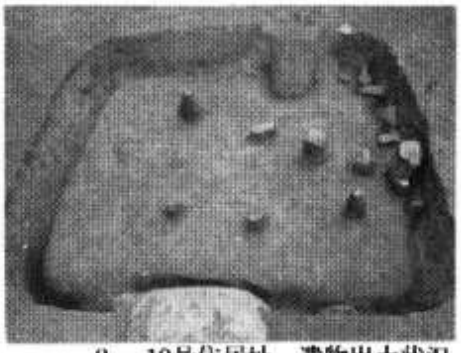
23—15



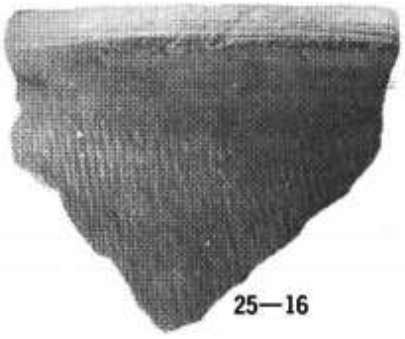
23—13



1， 10号住居址



2， 10号住居址 遺物出土状況

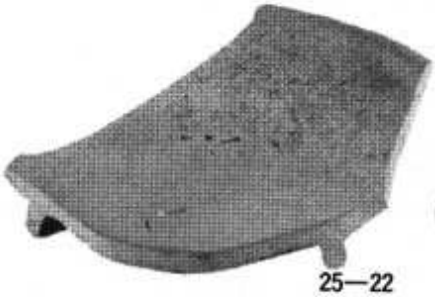


25—16

3， 10号住居址カマド

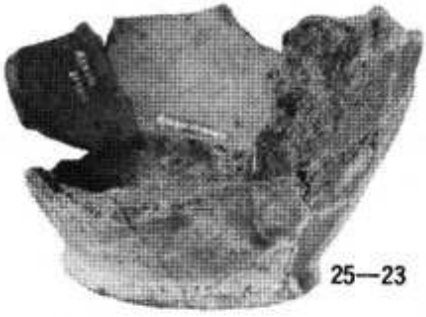
4，10号住居址カマド

25—18

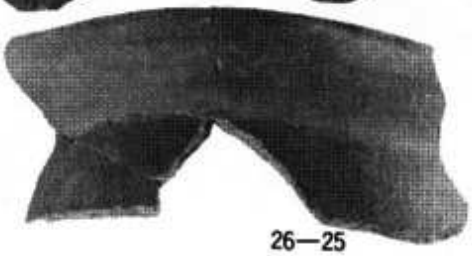


25—22

25—20



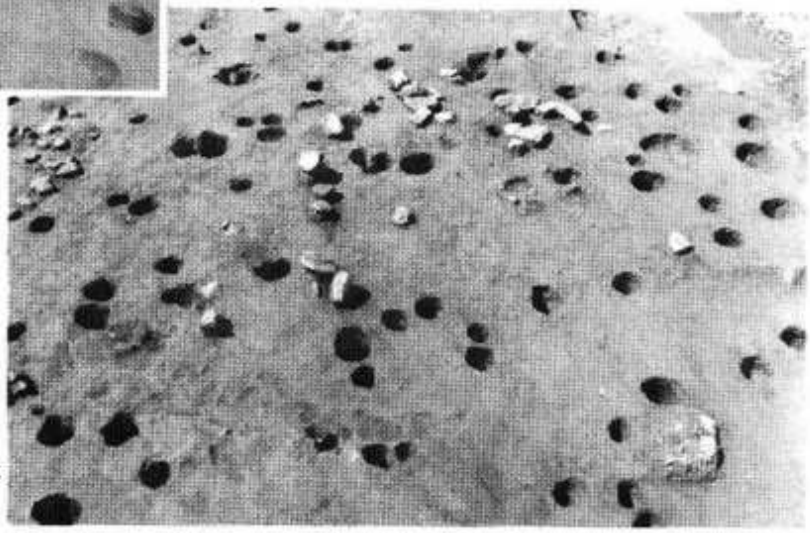
25—23



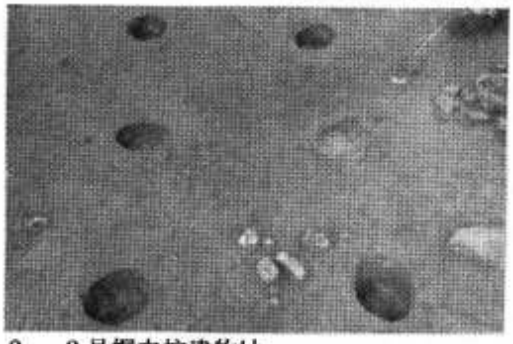
26—25

図 版 8

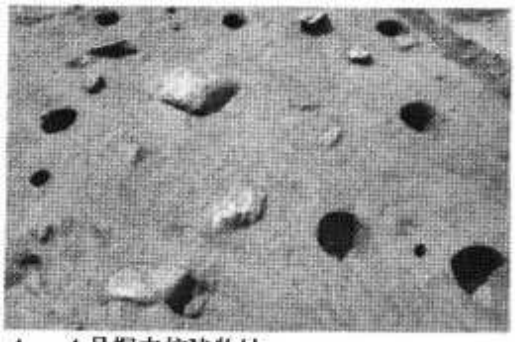
1, 1号掘立柱建物址



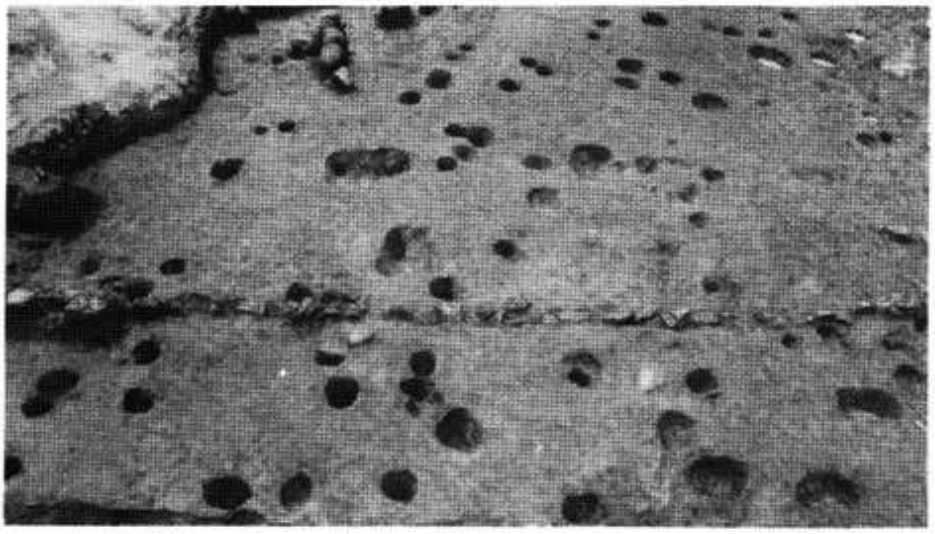
2, 2・5号
掘立柱建物址



3, 3号掘立柱建物址



4, 4号掘立柱建物址



5, 6号掘
立柱建
物址

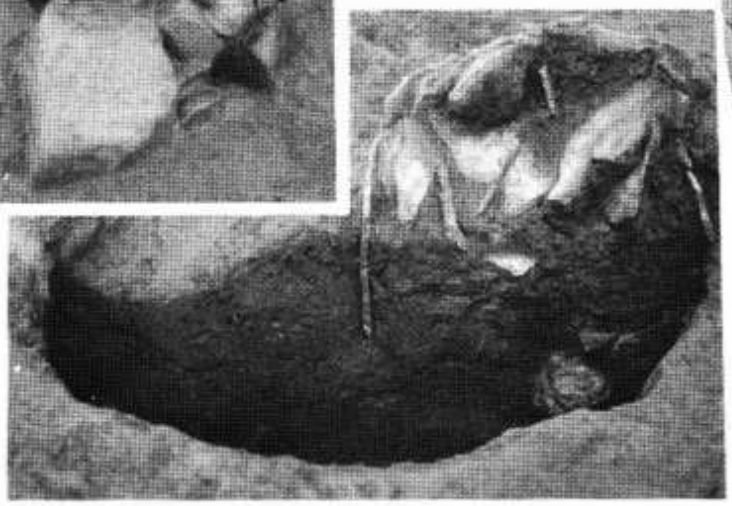
1, 1号溝
4・5号土壙

2, 4号土壙

3, 5号土壙

4, 7号土壙上部状況

33

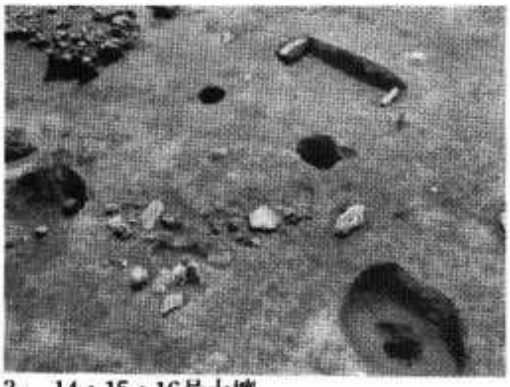


5, 7号土壙半截状況

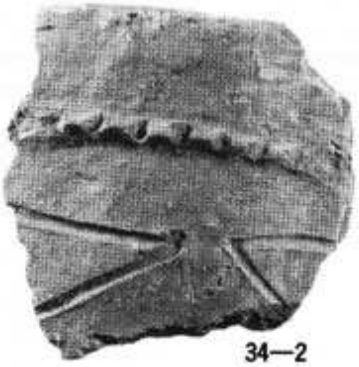
図 版 10

1, 11号土壙

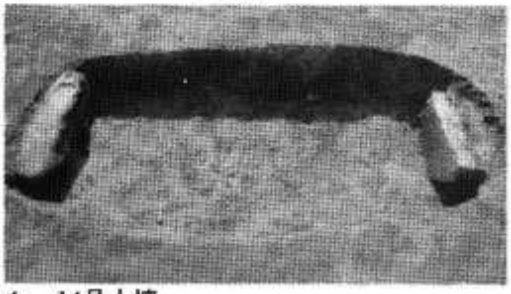
2, 13号土壙



3, 14・15・16号土壙



34—2



4, 14号土壙

5, 14号土壙

6, 2号集石

40—1

42—39

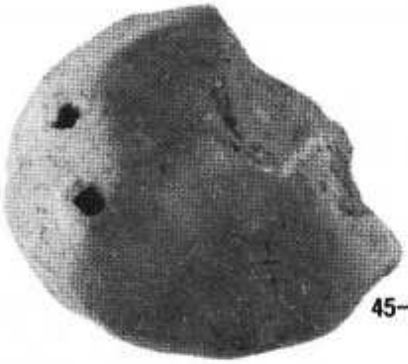
41—21

42—31

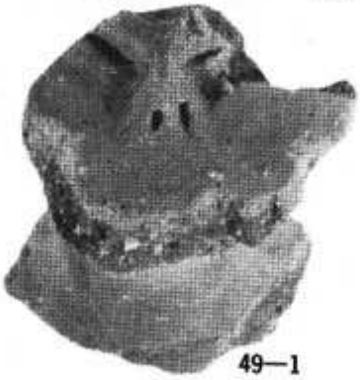
44—58

45—63

45—80



45—81



49—1

49—2

図 版 12

46—1

46—2

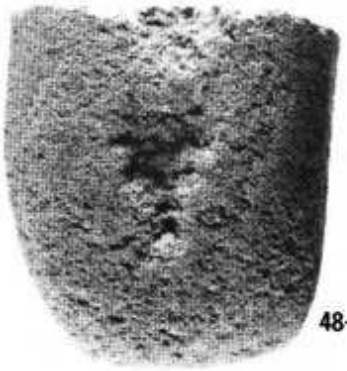
46—4

46—7

46—8

46—10

46—13


48—39

1, 9号住居址に寝てみる

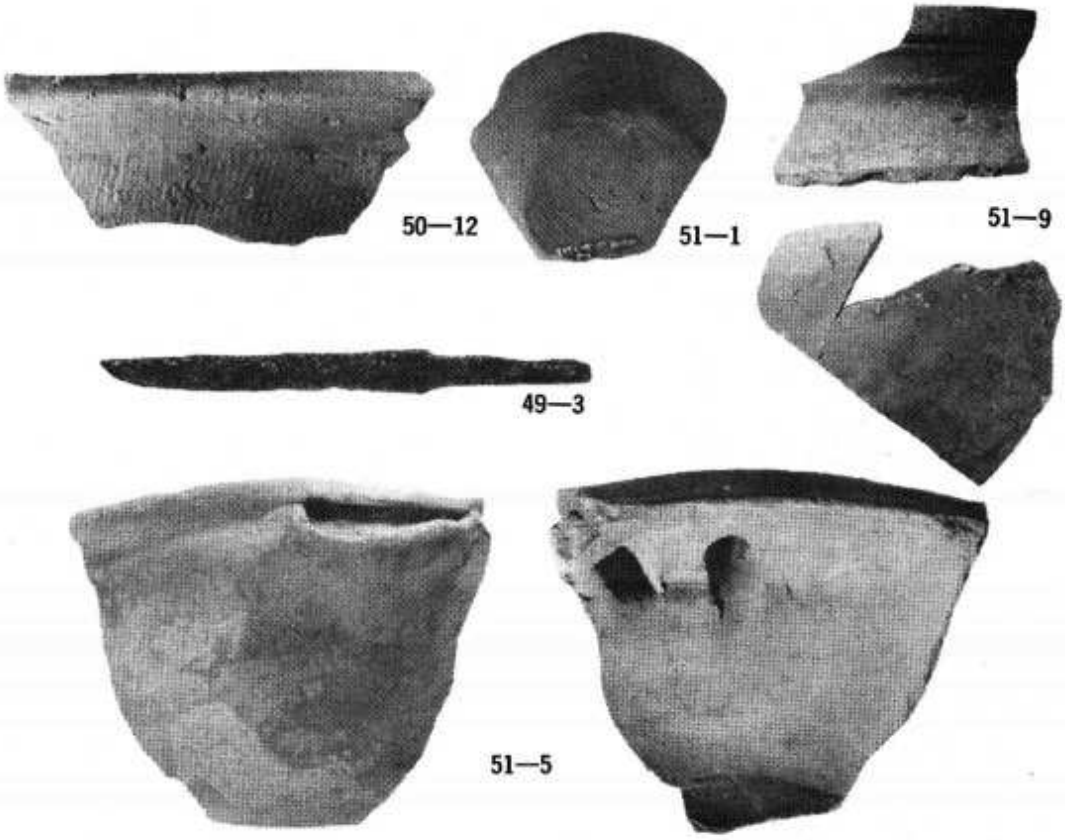
52—1

52—2

52—3

52—4

52—8



1, 丸山上部

2, 八右衛門内屋敷跡

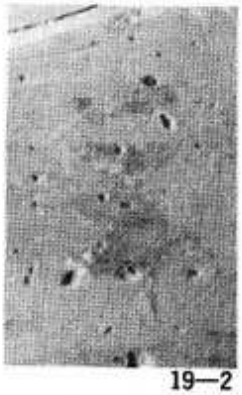
3, 別当十三塚の板碑

4, 城下の宝篋印塔

13—1

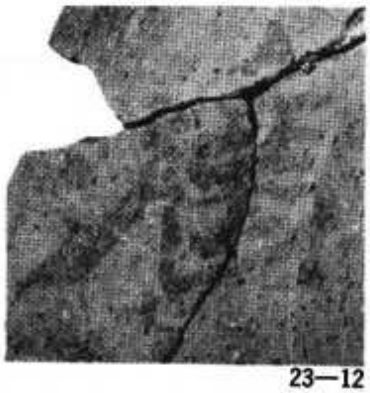
19—1

19—1


19—2

19—3

23—10


23—12

21—4

23—9

12—2

15—1

墨書・刻書文字（記号）集成

昭和61年3月31日発行

大泉村埋蔵文化財報査報告第4集

豆生田第3遺跡

編集
発行　大泉村教育委員会
〒409−15
山梨県北巨摩郡大泉村西井出3193
大泉村総合会館内
TEL 0551−38−3115

印刷　峡北印刷株式会社
〒409−15
山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条
TEL 0551−32−3245